



## 主張

### 学生運動の新たな波と我々の任務

#### (1) 運動の新しい波

最近の我々の経験は、学生運動内部に「新しい波」ともいうべき流動状況が——正確にいうならその活動の萌芽ともいうべき動きが形成されつつあることを示している。

この運動の波は——その労働運動との関連は後に述べるとして——三つの形で現われている。

第一は、私学に於ける授業料値上げ反対、あるいは学生会館の管理、運営といった学内斗争である。

例えば、東京に於いては、中大等であり、そして今年も中大、明治、法政、早大なども本格的な斗争が起るであろうと予想されているし、關西でも同志社、立命、関大、大阪市大などでストライキ、無期限スト（立命）などを含めた大衆的な昂揚が起きている。このような事態は、もちろん、学内斗争という形で、従来もなかつたわけではない。しかし、それらと区別されるのは、(イ)大学当局の攻撃が各大学いつせいであること。(ロ)従って、それに反する反対斗争もきわめて広範であること。(ハ)そして特に、これらの斗争が、従来であれば、政治斗争のいわば合間に、「接ぎ」の意味で戦かれていたのに反して、これらは、安保以降、政治斗争が、大衆的基盤を喪失する中で、なしろ逆に、大衆的基盤に於いて戦かわれ、従って、経済斗争→政治斗争

というシエーマに当てはまる側面を持つていることである。

第二に、地方大学に於ける大学当局の自治権 奪に抗する斗争である。そして、最後に——しかも、これこそ最も重要だと思われるが——東京に於ける運動の下限からのたもなおりの兆しである。例えば、これは一一、二九に於ける東大〇〇の勤員と、その後の自治会選挙での社会学同の勝利という所に表現されている。

これらの一連の動きは、確かにまだ、萌芽以上のものではない。特に第三の最も重要な要因は特に微弱ではある。だが、これらの動きが決して偶然的なもの、一時的なものではないとするならば、必ずや、やがて明白な形で巨大な斗争へ発展するであろう。

だから、我々は、これらの新しい波の性格を分析しなけれはならぬ。

#### (2) 新しい波の性格

かつて、レーニンは一九〇五年後の反革命の時代、ツァーイのもとに全被支配階級が、革命の疲弊からまだ立直つていない時、ペテルスブルグのある大学で生じた学内斗争を次のように評価している。「プロレタリアートと歩調をそろえた学生は政治活動をめざさなければならぬ。……」

…等々という革命的スローガンは、ここではますます広範で、全面的で、戦斗的な煽動を行うべきな指針から、いろいろな運動形態の、いろいろな段階に機械的にあてはめられる死んだドグマになつてゐる。「小さい学園紛争の小さな始まりでも偉大な発端である」(レーニン全集一六)我々は、ここで、現在の日本の運動の後退を一九〇五年後のロシアと同一視しようというのではない。それどころか、むしろその相違を強調したいほどであるが、それらについては後に述べよう。――ましてや、政治斗争に對置して学内斗争を強調しようなどというのではない。そうではなくして、レーニンがいう「いろいろな段階」の性格を明らかにすることが、きわめて重要だと考えるのである。

(注) 例へば、昨年の暮に開かれたマル同中核派の全国ブラクシオンでは、偶然にも、「運動の高揚の萌芽」という点で我々と似た分析に立つてゐるが、その内容をよく読むなら、日韓などの情勢の進展といつた一時的要素と、自己の党派の伸びとを基準としてゐるかに見えるのである。

さて、先に上げた三つの要因の中で、前の二つは、いわゆる大管法の実質化という性格を持つてゐる。すでに周知のように大管法は、一方で経済の高度成長に見合つた技術開発と技術者要求による産学協同をスムーズに行うという面と、他方で戦後日本のインテリゲンチヤの広範な政治過程への登場(直接には安保斗争)を弾圧しようという面とがからみあつて提起されたのであつた。そして大管法斗争

そのことは、先の第三の要因として上げた、東京の運動の下限からの向上をどのように評価するかという点と関連してゐる。すでに全面的に政治斗争が引起されるような情勢が(単にブルジョアニーの権力ステジュールとして)ではなく、それに対決する主体的条件としても)成熟してゐるとするならば、学内斗争は少々ネグレクトしても(或いは、全国的政治斗争に支えられて政治斗争に学生大衆を結集する中で、学内での権利拡大をはかる)全国的政治斗争(組織的には全学運動再建)へ一歩はく進するという方向となる。だが、我々の判断では、確かに政治斗争の昂揚への萌芽と評価できても、いまだ全面的な昂揚が開始されてはゐないと思はれる。

だが、もちろん、昨年の秋の斗争の一定の昂揚が、単に日韓の情勢が動き、更に、それを政治方針としてかかげる部隊がいたからだといつた主張は、何もいつてゐないか、あるいは自己の正統性をのみを云おうとする主観主義かのいづれかである。

東京の運動の一定の流動状況を生みだした原因は、④日韓会談の進展、⑤東京社学同が、それを一貫した政治方針

の過程で逆に安保後、久々にインテリが政治運動へ参加する様相を示した時、池田内閣は、大連協↓認承官という実質化を追求する方向へ転換したのであつた。その表現として、国立大学に対しては、もつぱら行政処置による攻撃がかけられ、私学に対しては、より一層の産学協同を推進することによつて内部からの空洞化をはかるうとするのである。しかも、これは一部の諸君が云うような単に経済的な問題ではなくして、この過程は同時に学生自治会、教授会などの権限を理事会等のもとに吸収していくというきわめて政治的な内容が共なつてゐることである。これらの攻撃の性格は、大学のみではなく、安保以降のブルジョアニーの他の分解(労働運動を中心とす)とも共通してゐる。いわゆる反動化ということではなく、ライン・アンドスタッフに典型的に表現されるように労働過程の合理化が職制支配の強化を意味し、がんにがらめに資本のもとに労働者をしぼり上げてゐるのである。

そして、このような攻撃の性格は後にも述べるように転換をせまられつつあるとはいへ、当面は続くであらうし、更に、転換といつてもその内容がより一層の合理化を中心として形成される以上は、それに対する対決は以然として斗争の起点とならねばならないという事情を考える時、大学に対する同様な斗争は、いわば、学生運動の「職場斗争」として私学に於ては特に重視する必要がある。このように云うと、学内主議 etc のレットテルをはろうとする連中が、それみたことかとも云うかも知れない。だが、我々は、一般

としてかけて戦つたこと、⑥その社学同を支える有利な条件として、広島原水禁大会の時の反戦学生集会以來の諸分派(日共とマル同解放を除く)の統一戦線の形成、といつた事情が、現象的には上げることができる。だが、我々がそれ以上問題を分析しないならば、「日韓会談は重要で社学同は正しく統一戦線も追求しなければならぬ」といつた不毛な一般的結論しか導き得ないであらう。むしろ問題は、このような一定の流動状況が内包してゐる発展の契機をさぐるという点にあるのである。

さて、このことを結論から云うならば、戦後第三の転期とその階級斗争に規定された運動の周期が開始されてゐるということである。学生運動に則して云うなら次のようである。

#### 第一の転期は、

全学連の形成――その深部に於いて戦争協力者の学園追放、学園生活の擁護といつたきわめてリアルな要求の獲得斗争から開始され、五〇年のレット・パージで終る過程である。この間の斗争は、特に二、一ストにいたる階級的統一戦線への萌芽という階級斗争の大昂揚に規定され、まさにその一翼としての役割を荷つていたと云つてよい。第二次全学連(五六年)に於ける市民的統一戦線内での一翼とは質的に異なる位置にあつたといつてよい。少なくとも、四九一五〇年での労働運動の大敗北以前に於いては労働者階級のヘゲモニーが存在していたのである。

(注) 労働者階級のヘゲモニーは、本来的には、前衛党の

指導によつてのみ貫徹される。従つて、この間の日共の指導の完全な誤りを考へるとその意味でヘゲモニーは存在していないが、労働者階級の自然発生的な斗争で革命的昂揚が形成され、日共もそれに追隨したという点で、こう云つてもよいと思ふ。

そして、まさに、第一の転換期とは、この階級的統一戦線への崩壊にまでつき進んだ斗争が、その敗北の結果として市民的統一戦線へと再編される時期をさしている。経済的には、財閥解体と農地改革によつて危機に瀕した独占ブルジョアジーが、傾斜生産方式からトツチ・ラインの過程でその固有の二重構造を再編しつつ復活への基盤を固めるのである。政治的には、農地改革によつて農民を労働者から切斷しつつ、「前衛」の犯罪的無能によつて労働者階級をも弾圧(二)、一ストに対するマツク普簡、政令一〇七号を頂点として一連のフレイムアップによつて)と分裂とによつて支配を確立するのである。そして、この最後の斗争こそレット・パージ斗争であつたが、それまでの誤まりの累積の結果として労働者階級は完全な敗北を経験する。他方全学連の斗争のみが成功するが、このコントラストな姿こそ、市民的政治斗争の端初である。何故なら、そこにはすでに労働者階級のヘゲモニーは基本的に喪失しているからである。そして、同時に、この学生運動の先進性は、日共国際派系の学生共産主義者の手によつて、第二次全学連へと引きつがれてゆく。

### 第二の転換点とは、

このヘゲモニーなどについては述べておかねばならない。まさに、第二次全学連(五六年の八中委一九大会以降)の運動は、先のレット・パージ斗争で現われた端初的形態の全面開化として現われた。だから、それは、すでに労働者階級の先に述べたような敗退を伴件として、その範囲で斗争の徹底化をはかろうとするものであつただけに、必然的に労働者階級の問題をどうするかという問を内包しており、共産主義者同盟はその間に解答せんとして敗退したのであつた。

### さて、現在、我々が直面している 第三の転換点とは、

先づ、何よりも開放体制→自由化の新しい段階に対応する日本資本主義によつて規定される。まさに、従来の日本独占の「セツト化」への傾向(「日本経済論」下・大内力)が、自由化の本格的展開(IMF八条國移行、OECD加盟等)に当面し、新しい再編をせまられているのである。その困難は、例え、自主調整といわれようとも、国家独占的な財政、金融政策のフル展開による国家的規模での「新産業体制」としての性格を持つてあろう。そして政治的には、自民党近代化に表現されているように、いわば「革」統一戦線にこの困難に対応しうる強力な指導力を確保しようとするものである。これは、経済での新産業体制に完全に見合つたものである。更に、労働者に対する日経連の転換(労働協調主義によつてこの体制を固固たるものにする)ことが、独占ブルジョアジーのキーポイントとなしている。

云うまでもなく、五五、六年頃よりの高度成長に規定された階級斗争の形態である。ここでは、労働者階級の内部では、日本的組合主義(太田一岩井ライン)の成立に特徴が示されている。賃金斗争に於ける産業別統一斗争(春斗)によつて強大化した独占に對峙しようとしつつ、それは逆に組合の官僚化を生みだす、何故なら、この間の生産性向上(技術革新)運動に對して協力はしないが妥協するといわれるように、高度成長による莫大な利潤の若干の分配を受けつつ、それが戦い取られたというよりも、逆に基本的な労働過程は「職場の変質」といわれるように合理化とそれに共なる職制支配(資本の支配)を許容し、労働者階級の斗争体制は弱されてゆくのである。そして、このように職場での斗争体制が危機になるに於いて、ヘゲモニーは、単産へ強い上げられそれは差別化どころか官僚の自己合理化の口実となるにいたる。又、いわゆる大衆社会状況の現出が云々されるが、まさにかかる労働者階級の敗北の結果としてなのであり、日本的構造改革の成立は、かかる条件に對する深刻な反省もなく、斗争の成果を体系化するのではなく逆に敗北の合理化の理論となり、安保一三池以降主流となつてゆく。

さて、更に政治斗争に於いては、いわゆる市民的政治斗争の典型的姿が現われている。その基本的な特徴については、前号で示されているので省略するが、ただ、この政治斗争は、先に述べた職場での斗争の敗北をいわば補充する作用を有し、従つて街頭主義的斗争形態、小ブルインテリ

この政策は、民社一同盟会議の育成と総評の全労化という方向でなされているが、これに対応する労働者階級は、物価問題、合理化に對して潜在的なエネルギーを有しながらも斗争に顕在化されていないのが現状である。そして又、独占ブルジョアジーの困難は、先にも述べたように妥協するが協力的な力といわれた太田一岩井にかわる協力者としての同盟会議一本化という政策に向いつつあり、しかも民間内部の太田一岩井派に對する構造改革派グループによつて資本の合理化を評してきた民間大産産を基礎とした全労への接近がこころみられ、日本的組合主義は危機に立たされている。まさに資本の法則によつて協力が妥協か、そして根本的な解決かという問がなされる第三の転換期が開始されている。

そして、冒頭に述べた学生運動の流動化の兆しは、実に、この戦後の第三段階とも云うべき運動の周期の表現として把握する必要があるのだ。この流動状況を支えているのは、明らかに、大衆社会的状況への一定の危機意識である。日本資本主義の脆弱性の故に、西欧的な大衆社会というよりは、その内部にいわゆる「ムラ状況」(その内容は、近代化に對する農村、中小企業→前近代性という対立的図式ではとうてい把握し得ない)を有し、常に資本の矛盾が露呈せずにはいないこと、しかも、それが開放体制への移行の再編期にあつて矛盾が集中的に現われること(物価問題、中小企業再編、農村の人口流出と老令化の加速)しかも、それが、資本の一方的ペースで進行することに對する危機感

である。

かかるものとして、我々が新しい運動の波を把握するとするなら、それに対する対応はいかにあらねばならないのか。

### (3) 我々の任務

先づ、第一に、我々は学生大衆斗争の一種の変化を見ておかねばならない。つまり、冒頭で述べたようにその斗争の形態は多様であること、又、それだけではなく、政治斗争に於いても、変化がみられることである。例えば、最近の京都府学連の運動は、いわゆる戦術の系列によつて質的に運動を飛躍させつつ権力に肉迫するというよりも、むしろカンパニア斗争への方向へ質を落しつつある。それは、第二次全学連に見られた「学生運動の展開→労働運動への影響」というシエーマが、労働運動の後退によつてほとんど空語となつてきていることに規定されている。そして、このように運動の質を落すこと自体は、まったく妥当な方向である。ただ、そのことによつて生みだされる種々のマイナスへの処置さえ打てば、だが、これは、後述しよう。

もう一つの重要な点は、全国的政治斗争への一貫した指向が必要だということである。この点を新たにたまつて議論する必要はないかと思われるが、日共の動向とたまつて議論する必要がある。昨年くれ、東C、京大Cでの自治会選挙の結果はこの意味で象徴的であつた。大衆は明らかに全国的政治斗争への指向を支持した。日共はその平民学連

表現されている。

かかる困難を打開するための表現は、種々の形で行われているが、いづれもが、先づ綱領という形で、日本の左翼に伝統的な「先づ分離」という形を取つていくことである。我々は辛直に「云うなら、東京社学向の一部にもかかる動向のあることに危グの念をいだいている。現実の斗争の立運れに対して、それを、この「ような「前衛」という形で強力に棄切ろうとする試みは決して正しい方向ではない。それが、具体的な斗争の経験を普遍化し総合したものとしての包括性を有しない以上、理論のセクト化、運動の分離という悪しき伝統を継承するのみである。更に又、特に東京社学向は、労働運動に、まったく切断されているだけに一層この点は重要である。(そして恐らく、M・L同盟と、マル線の相異は、理論のちがひというより、この労働運動に対する組織的対応いかなの問題と思われる)

このようにして、我々は、従来の「学生運動の展開→労働運動」という形での労働運動とのかかり合ひから、一箇の政治的組織を媒介した方向への転換が必然化されている点を見取ることができる。この点を抜きにした自立運動は、結局、現実の重みに耐えきれず、思想の要質をきたしつづつあることは、清水幾太郎氏、吉本達明らのいきつまりによつて証明されつづつある。だが、そのことをストレートに前衛的結集へとすすめる論点は自立論の提起した問題をとびこえることである。例えば、マル同中核にしても、反帝、反スタ、こそが、ということはその悪しき典型であ

方式によつて学生運動の独自の展開を否定し、いわゆる四  
中総路線としての同盟会議、総評とも異なる階級的民主的  
労働組合(それは、いうまでもなく歴史的に破産したプロフ  
インテルン方式である。特に、現情勢の運動の後退という  
時点では、一層犯罪的である。運動の革命的昂揚期には労働組合の「赤色化」は必然であろうが)の方式と同一に日  
共「民青の系列的運動の方向へ学生運動を歪曲しようとして  
いるのである。そして、このことは、必然的に全国化を  
要求する学生大衆の利害と衝突することを意味している。  
更に又、大衆が全国化への潜在的指向を有しているとは云  
え、それが現実の運動へ具体化されない処からくる、指導  
部の視点の地方化、学園主義化こそ、我々の最も注意すべ  
き点である。例えば、構成派には明白にこの傾向が現われ、  
しかも、それが、不断に理論の検証の場を喪失させ、理論  
のセクト化と運動の地方化がいわば自家中毒症状を引き起  
している。

我々は、かかる運動の地方化を防ぐ組織的処置(と同時に、  
運動の新しい流動状況を促進させるものとして)として何らかの  
全国的機関の設置を提起する。さしあたり、四月上旬全国自治代  
の開催はきわめて重要である。

第二の問題は、運動形態が、かかるものとして展開される  
こと、いいかえれば、大衆斗争自体が党派性を表示することは、  
困難であるという点からくる我々の任務である。

我々は従来、全学連の再建を通じつづつ「旧ブント」の結集を  
呼びかけてきたが、その路線が失敗したことにもこの点は

る。

そして、かかる問題は、学生運動に於いては、長期的展望に  
於いて、現状を位置づけるという事、それにもとづいた、活動家層  
の結集という点、特に重視されねばならぬことを要請している。

全学友諸君、戦後第三の転換点は開始され、運動の新しい波が  
兆しはじめている。我々は、運動としても理論としてもこの流動  
状況を一層拡大するために全力を上げねばならない。



△はじめに▽

当面の国内情勢の規定要因は、何よりも国家独占資本主義の固有法則の展開であり、そのもたらすところの世界資本主義の危機の同時性の中への日本資本主義の全的介入への過程である。又、そのもたらすところの階級斗争ならびにその展望は、日本資本主義の構造——とりわけその権力構造に巨大な作用を及ぼさずにはおかない。

### (1) 激化する市場競争

世界資本主義は今や生の苦悶ともいわれるべき局面を経つつある。激化する市場競争——それは、先進諸国市場の再分割（自由化）と後進諸国市場の再分割を軸にして展開している。EEC諸国、米ともに、国家独占資本主義の財政政策が必然化するところのインフレ的物価騰貴<sup>1)</sup>それによるところの企業収益の低下と、過剰生産を切りぬけるために、延命の突破口を市場競争にかけてきている。米は、その相対的地位の低下を防ぎとめるべく、ソ連の「平和共存戦略」——現状維持政策とタイアップしつつ、EEC市場への進出をねらい、EEC諸国（とくに仏）は、東南アジア

中南米におけるアメリカ支配の動搖に乗じ、同地域に対して大きな影響力をもつ中共のとりひきのもとに自らの支配権を確立せんとしているのである。その間をぬつて、西独、日本等々は、企業合同と国内体制の立ちおくれによつて仏米を警戒しつつ、独自のシェアの形成へとむかいつつある。

このような展望のない市場競争と国内階級矛盾の増大は、ブルジョアリーの支配体制にも大きな変動を生み出しつつあることに注目しなければならぬ。物価騰貴による生活苦の増大、オートメ失業、労働強化、賃金抑制等々の階級矛盾が一定程度労働者階級の反抗を触発しつつ、なお、その決定的なたちおくれの故にブルジョアリーのヘゲモニーによつて収約されつつあるかのようなのである。すなわち、EEC諸国における社民政権の誕生は、「資本主義の最後の救命投」として、ブルジョアリーによつて設定されたものである。

### (2) 国内情勢の転換

さて、日本資本主義にとつて、激化する市場競争への介入とは、「開放経済体制への移行」と「アジア運帯の強化」

として表現されている。ブルジョアリーにとつては、今や、それに対する國民的な危機意識を組織し、産業構造の改変と、國際的緊張關係に対応する政治体制を確立することが焦眉の課題となつている。政治情勢の転換をもたらして、るところの要因を、検討しよう。

まず、産業構造の改革は、「新産業秩序」のかけ声のもとに、企業合同等々による独占強化と、農業、中小企業の再編を基軸におしすすめられている。前者については、三十九年度予算原案にみられる如き財政政策や、国家政策を媒介にした金融資本との結合、又は企業合同（海運集約化に典型される如き）、更に、管理価格拡大、カルテル強化による独占強化策等々である。

水平結合の弱さをその特徴として、もつところの日本資本主義において大規模な資本の結合は、何よりも国家権力の強力な介入を要請すること、そして、企業合同と合理化が、個別産業的規模においてでなく、國家的規模において、遂行されるにもなつて、国家権力がますます前面におし出されてくるであろうこと。そして、それは、オートメ失業、中高年層の失業、合理化（労働強化）賃金抑制等々に対する労働者階級の斗争において、国家権力の問題をますます直接性をもつて提起してくるであろうということ。——この過程が、「開放体制への移行」にもなつて、急速に進展するところに、情勢の基調をみなければならない。

次に、農業、中小企業の問題については、独占大企業中心の「開放体制」を底辺産業——中小企業で調整するという

ものである。金融ひきしめ新窓口規制等々の金融措置によつて切りすてと系列化が進行している。

これは、中小企業解消の方向でなく、独占に有利になる方向での再編であり、中小企業の犠牲のもとにおける景気調整である。一方で、零細農業の切りすてによつて大量のプロレタリアートを中小企業へ吸収させ、二重構造をより拡大し、低賃金制を維持せんとするものである。

このような、構造変化は、独占ブルジョアリーをして、権力構造の整備に対する強烈な要求へと向かわしめている。

### (3) 市場問題

日本資本主義にとつても、「輸出振興」——市場問題が至上命題となりつつある。高度成長財政政策が、必然化したところの物価騰貴による企業収益の低下、國際収支の悪化、自由化の下での競争力に対する危機感——それらが、韓国、東南アジア進出への切迫した要求としてあらわれている。六〇年安保改定において、帝國主義復興の儀式を終えた独占ブルジョアリーは、今や、韓国——台湾——東南アジアに、経済的、政治的支配圏を形成することを具体的に日程に上するにいたつたのである。

「日韓国交正常化」の要求は、「良質の労働力」（低賃金、高い教育水準）を利用しての企業進出や、重化学工業品の輸出をより大規模に、確実に行う上で人围手統等々の障害を除去し、在韓日本商社活動の安全保障のために、彼等にとつて、絶対早急に必要なものとなつている。韓国に

おける日本の経済的比重が高まるとともに、在韓權益保護のための政治的軍事的介入の合法化の上でも「正常化」は必要前提である。

史上最大のインテキ選挙さえが示したような朴政権の不安定性を日本独占による植民地的支配に対する韓国大衆の反発は、日本自衛隊の公然、非公然の介入を必至とするであろう。更に又、日韓政治同盟における日本ブルジョアジーのヘゲモニーは、東南アジア、朝鮮確保をめざす彼等にとつて絶対の前提条件となつてゐる。かくて、「正常化」交渉は、三、四月の端境期をひかえ、政権の維持に狂奔する朴とタイアツプして急速に、おしすすめられるであろう。東南アジア諸国に対しても、インドネシア、マレーシア紛争への介入によつて独自の地歩を築きあげ、大規模な進出を企図してゐる。

#### (4) 政治体制の再編

以上の情勢にみあつたところの政治体制をブルジョアジーはいかに確立しようとしてゐるのであるか。

まず第一に、それは、国家権力の総合性、機動性、集中性への要求としてあらわれてゐる。新産業秩序形成における国家権力の機能増大、斗争抑圧、国際的緊張関係より生じる政治問題の集積に 대응するところの「強力政治体制」を彼らには必要としている。それは、安保以降三年間の池田政権の性格に、大きな変更をくわえるものとなつた。三〇年代の高度成長を基盤とし、高度福祉国家の幻想と、政治的

ジョーの危機意識の喧伝によつても、権力機構の整備が必ずしも成功しないならば、彼等は来るべき経済・政治危機を契機に権力構造の改変を執行する決意をかためざるをえないであらう。

当面、彼等は、開放体制・市場競争に対する国民的な危機意識を組織することに、最大の眼目をおいてゐる。愛国心・民族意識・国家帰属意識・企業帰属意識・階級協調というイデオロギー攻勢をあらゆる面において組織するであらう。

オリンピックを政治休戦とし、巨大なマスコミを総動員して、国民的ヘゲモニーを掌握するということが、その最大の手段であらう。しかし、より基底的には、企業意識を媒介とした、長期安定資金、職務給等々による階級休戦・協調の画策が展開されるであらう。したがつて、このことは高度成長にタイアツプした総評の大巾賃上げ斗争も一つの転換点にさしかかつてゐることをも意味してゐる。すなわち、独占ブルジョアジーにとつては、従来の総評とのアベック斗争さえ許容し難いものとなつてゐるのだ。従来の資本の労働政策は、低賃金を維持することに最大の関心が払われながらも、強力な資本蓄積の過程で、総評（基幹部門）の大巾賃上げ斗争に対して一定の許容を与え、その代償として、職域における合理化にたいする承認をとりつけるという妥協的政策であつたが、自由化段階の独占は、資本の下への労働のはげ完全な屈伏によるところの協調政策を必要とするに至つたのである。ブルジョアジーは、総評

迂回、そして、労働過程における労務管理体制によつて、諸階級を去勢することに、一定の成果をあげた「池田体制」も、今やまさに、その基盤の喪失によつて、転換をよぎなくされているのである。とはいえ、ブルジョアジーは、新たな情勢の切り切りのために、その突破口をいまだに設定しえないでゐる。

昨年後半以降、独占王流は、「自民党近代化」のために、さまざまな手をうつてきた。三木調査会答申や、佐藤派を通しての「派閥解消」要求は、派閥均衡体制を打破し、集中体制をつくりだすことによつて、独占ブルジョアジーとの緊密な結合をねらつたものであつた。更に、より根本的には、労働力構成変更に対応するところの「近代的ブルジョア政党」への脱皮が叫ばれた。それは農村人口流出によつて自民党の従来の基盤が喪失するという危機認識の上に、プロレタリア階級内部に積極的な支持層を組織しなければならぬというものである。これにもとづいて、「労働憲章」「自民党基本憲章」が作成され自民党大会に提出されようとしたが、結局、「保留」という形で流されてしまつた。

又、行政制度調査会答申という形で首相の下への行政権の集中という制度改革案が提起されたが、これに対しても、各省官僚の猛烈な抵抗で実現困難という状況がある。広域行政圏の形成、警察組織の集中化という志向も、ブルジョアジーの強固な意志のあらわれである。

「開放体制への移行」を錦の御旗にした独占ブルジョアの「妥協」よりも民社ト全労の「協力」をその新たなパートナーシップとして要求している。したがつて、今春斗は、明らかに、民間運動を敵しい試験の上でせざるにちがいない。物価騰貴や合理化によつて増大しつつある労働者の生活苦をともかくも反映して自然発生的な斗争へ身をゆだね、右派との分裂を深めるか、（大単産を民社ト全労に吸収される瀬戸際に立つということにもなるだろう。）あるいは、対決を回避し、資本の要求する「協力」へとより深く屈伏してゆくのかという問題が提起されている。今春斗をめぐる情勢はさきわけて重要である。それは、今年前半における日韓会談反対―憲法答申反対斗争を軸とした政治情勢の動向を大きく規定するだろうからである。更に、オリンピック政治休戦、思想攻勢の情勢を突破する力量を発揮しうるかどうかにもかかわつてくる。

#### (5) 憲法問題

ブルジョアジーは、「憲法改正」というヴィジョンをもつた。

大戦後、日本資本主義に課された上部構造の弱さというハンデイは、軍事的緊張情勢（朝鮮戦争等々）や、不況期や、政治的緊張期（安保斗争等々）に つねに顕在化し、憲法改正への努力を持続せしめたのである。池田政権においても、ようやく世界的となつた自由化と経済的変動（国際収支悪化等々）の訪れに対する危機感、憲法調査会に結集する改憲派の絶えざる策動を活発化するに至つたのである。先

述した如き、新たな情勢に対応するところの権力構造の再編と、東南アジア進出に併う日本自衛隊の比重増大と強化（それは、米極東戦略の変動に併う自主防衛への要請によつても促進される。）と、海外派兵の公然化は、憲法改定という一連の過程でもつて遂行されようとしている。ブルジョアジーのプランに書きこまれた 七〇年安保改定は、東南アジア盟主としての地位を宣言すべきところの厳密なる儀式たるものであり、それへの準備措置としても、憲法改定は、抜きがたいプランとなつてゐる。改憲への野望を託して、着々、強じんな一本の糸の如く、八年來維持されてきた憲法調査会活動は改憲派に対する政治的結集の表裏を与え、組織してきた事実を注目しなければならぬ。六月に予定されている調査会最終答申は改憲派よりするところのデモンストレーションである。一面「調査会答申待ち」という名分で、改憲（案文改悪）への政治的措置を具体化することを避けて通ることを正当化できたが、答申後は、その時々の方調保、情勢に応じて政治的措置を明らかにしなければならぬ段階に入ることでもある。

(6) 四、五月における「日韓外交正常化」交渉の綱印——批准阻止斗争を、憲法改悪との関連（梁九案問題を中心）を明らかにしつつつと闘いぬくことは、六月調査会答申阻止斗争を展開するための巨大な物質的条件を準備するであろう。私は、以上、当前する情勢の大まかな見通しと、その問題点をのべたが、これを諸潮流批判（社共等々）を含めてよ

り詳細に論じることと、我々の任務を具体的に明らかにすることは、次号にまわしたい。

以上



## マル学同中核派はどこへ行く

革共同全国委員会批判

檣 原 均

△はじめに▽

革共同全国委員会の黒田寛一を中心とするグループと主として旧プリント系でしめられている政治局との分派斗争が各々の機関紙「解放」と「前進」の紙上でもつて公然と斗われはじめてから一年がすぎさるうとしている。この間「前進」中核派の姿勢が、昨年八月の反戦集会、十一月の全自代において大衆的に確認された。<sup>(註)</sup>

そして、また「前進」紙上においても、「民主連合政府論批判」や情勢分析が語られはじめた。

しかしながら一方、「反帝反スタの立場の徹底化」「革命的なマルクス主義」等々が同時に無内容に展開されており、それは特に解放派との論争において、「反帝反スターリンニズムの放棄」「スターリニズムに転落した山本派（解放派）の新理論」（「前進」五二―四竹中論文）などに見られるごとく、「革命的マルクス主義」の名のもとに黒田批判が展開されている。

△革命的マルクス主義の本家、黒田をたたくのに「革命的マルクス主義」でもつてなされるこの批判は黒田寛一のサークル主義理論的頹落を指適しえたとしても、前進派自らがその理論的

思想的立場に無自覚であることを示すものでしかない。

解放派が「革命的マルクス主義」からの逃亡であり、反帝反スタの放棄であると勇ましくも主張する前進派自身の行為が、実は「革命的マルクス主義」の放棄であること、したがって彼らはいずれ自らの思想的立場を整理せざるを得なくなることを、以上を論証するのがこの小論の課題である。

△ 前進六六号（六一年八月二五日）  
「全学連二八中委における学生共産主義者の任務」と題する論文においては、

「まず『プロレタリアートによる学生の獲得』ということについてわれわれ学生戦線における斗いは労働戦線における斗いに従属する。われわれ学生戦線における斗いは共産主義的人間の創造とその結果体としての細胞の建設を第一義的任務とし、

(A) いわゆる職業革命家の育成、(B) 労働戦線へ送りこまれる部隊 (C) 革命的イデオロギー、インテリゲンチヤの創造、(D) 中間階層へ送りこまれる部隊、(E) 国家諸機関へ送りこまれる部隊のいずれかに将来的には配置されていかねばならない。一」ということが書かれている。このような学生運動論は、昨年十二月に開

かれた「全学連主流派フラクション」では大巾な変化をみせている。その議案は、一般的にプロレタリアートによる学生の獲得を語つた後にそつとつけ加えている。

だが戦斗的学生運動の意義を、このような革命的主体の形成という面だけにするわけにはいかないのである。特に労働運動の後退という現実にあつては、学生運動それ自身の果す社会的意義は極めて大きいのである。

これは云い古されたことであり、我々にとつては当然のこととして受けとられているが、マル学同にとつては革命的である。というのは、自己のプロレタリア党のための斗争の論理の他に学生運動の論理、それ自身の意義を語つたところにあるのである。彼らは天上から地上へ第一歩を踏み出した。

日共に対する政治的評価の開始や、情勢分析の開始は彼ら自身が何と云おうとそのことを実証している。

### △分派斗争の意味するもの▽

階級の激動期ならともかく、大管法斗争の過程で進行した全国委員会の分派斗争を理解するには、日本における反スターリニズム運動の発生時期にまでさかのぼることが必要である。

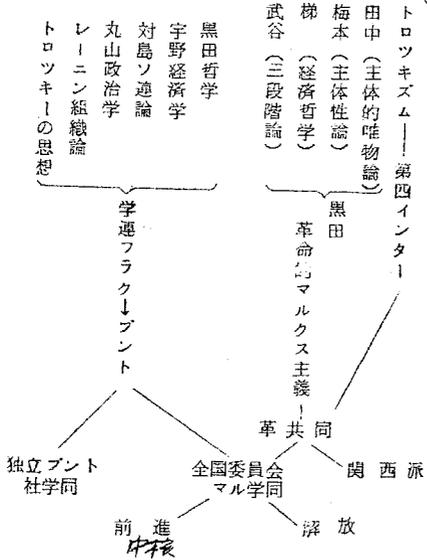
「三つ子のたましい百まで」のたとえどおり、反スターリニズム運動の三つの潮流は生まれるときに逆命の星をその小さな背に荷つていた。その一つはトロツキズムの継承者であり、第四インター日本史観に結集する人達であつた。もう一つは初期の段階ではトロツキスト達と日本革命的共産主義者同盟を結成した、弁証法研究会に結集する黒田寛一を中心としたグループであつた。彼

らは戦後唯物論を総括するなかで、一つの立場「実践的唯物論」を基礎にした「革命的マルクス主義」を打ち出した。最後に学生運動を展開するなかで運動そのものによって反スターリニズムを教えられたグループ、いわゆる「学連フラク」があつた。この学連フラクが中心になつて形成した共産主義者同盟は、複雑な現実が生み出したがゆえに混血児(註)であつた。

この三つの流れは今もたえることなく続いている。だが、その後のきびしい階級斗争の試練のなかで、第四インターの路線を固守したトロツキスト(革共同関西派、社会学レフト)は砂漠の中のワンのように、いまや消えさるとする小集団に転落した。共産主義者同盟は、その雑種性の故に、安保斗争で巨大なエネルギーを発揮しながらもその後分解せざるを得なかつた。一方「実践的唯物論」を展開し、「革命的マルクス主義」「反帝、反スター」の旗をかかげた弁証法研(探求派)のグループは、現在の革共同全国委員会へと拡大し、そのもとに安保斗争の鬼子共産主義者同盟を結集したのであつた。「革命的共産主義」の勝利、全国委員会にとつてハッピーエンドに終るかにみえた革共同全国委員の拡大は実はその内部矛盾を激化させたのであつた。混血児にも思想が、そして雑種ゆえの強烈な思想があつたのである。

現実の階級斗争の中で生まれた混血児は現実の斗いの中でその本性を表わす。革共同全国委員の拡大は革共同によるブントの獲得ではなく、実は革共同とブントとのもたれあいすぎなかつた。大管法斗争の過程で自分の渠に生みこまれたホトトギスのヒナにけり落されたウグイスのように「革命的共産主義者」は革共同全国委員会から追い出されたのであつた。これが革共同全国委員の分

派斗争の原因と結果である。これを論証するために、我々はしばらく現実からはなれ、黒田哲学の世界をのぞかねばならない。



黒田寛一に対する哲学的批判は、すでにつくされている。彼の哲学は完結した一体系であり、それがさらに、現実によつて破産を宣告された以上もはやこの観念的体系が哲学史のなかでどの位置を占めるかという学問的興味が残されているのみである。しかしながら「前進」マル同中核派がこの死者のカバネでもつて自己を武装するのを見るときどうしてもどこでも一度黒田哲学にふれておく必要がある。

黒田の問題意識は、公認マルクス主義(スターリニズム)が全く一つの体系、公式、そして又国家の支配の道具に化してしまつたこと(註1)に対する反逆を出发点にし「人間主体の問題の唯物論的把握、説明」によつてこの問題にせまろうとした。その問題意識自体は高く評価されるべきであるが、その後、彼自身の言葉をかりるならば、「梅本主体性論をバネとした梯哲学の唯物論的改作と発展……」(註2)から「……プロレタリア的実存においていかに階級的自覚が獲得され、革命的実践への主体的バネがいかにして形成されるかの論理……」が追求されはじめたとき、すでにその未来は決せられていたといえよう。

△革命的マルクス主義と反帝・反スター  
その形成

ともあれ、世界的に見ても、公認マルクス主義に疑問を感じた人々が「源泉への回帰」を呼び、特に初期マルクスに研究の目を向けたこと、マルクスが急進民主主義者からマルクス主義者へと移行した軌跡に光をあてるなかで唯物史観の形成がいかになされたかを見ることは当然のことであつた。(註3) 公認マルクス主義における人間の欠落、客観的な物質としての人間ではなく、生きた、活動し、考える主体としての人間が、公認マルクス主義にとつてはどこまでも位置づけられないこと。このことへの反省の

ためにはマルクスの思想形成にまでさかのぼつての追求がなされねばならなかつたのである。

(註1) この問題に関する黒田の指適は、一つの成果として評価されねばならない。

彼は『連環唯物論』を以下のごとくまとめている。

「(1) 史的唯物論における『生産』概念の一面化、『物質的財貨の生産』へのその矮小化」すなわち、生産は同時に人間生活の生産であることの無視。

「(2) 生産力や生産関係などの諸カテゴリーの単なる関係概念化」「概念それ自体の実体化」によつて概念によつて表わされていた実体が喪失する。

「(3) 生産諸力からの労働対象や(いわゆる「生産用具」に属さない)労働手段などとなるものしめだし」

「(4) 生産力、生産手段、技術などの被階級性あるいは歴史的社会的被制約性の抹殺」スターリンの言語学論文。

「(5) 土台と上部構造とを一対一的に対応させつつ、それらを機能させるにすぎない単純無比な機械論の形成と発展」

「(6) 法則の物神化論(一九五二年)」(マルクス主義の形成の論理P、十一―十六)

だが批判は批判としては無力である。それは実践として提起されねばならない。黒田の論理はこれにとどまらずなおも進んでゆくが決定的なことは、彼の追求は結局哲学の土壌を離れることが出来なかつた。ここに「政治家」黒田寛一の悲・喜劇がある。

(註2) 「この課題(人間主体の問題の唯物論的把握)の理論

を展開し、最後に前衛組織論として完結する(註5)のである。

(註1) 彼はこの後に、マルクス主義の主体的把握の構造、即ち、マルクス主義の継承について書いて置いている。「あくまでも二〇世紀現代の歴史的現実と学問的状況に深く足をふまえて(場所的立場の確立)それらが提起する現実的および理論的な諸問題を解決せんとする実践的なかまえ方をとることを出発点とするのでなければならぬ。そしてまさにかかる課題を実現するために、われわれは、現在の現実そのものの根底にひそむ本質的なものへの下向的分析と同時に過去への反省を、マルクス主義形成の歴史的過程への反省をなしとげることによつてそれを主体化しつつ、おのれ自身を革命的プロレタリアートとして階級的に自覚し、自己変革をなしとげ、このことを通じてこの自覚内容の学問的対象化として史的唯物論を再構成するでなければならぬ。無自覚な現在存在としてのプロレタリアあるいは非マルクス主義者としてのおのれを現実の階級斗争への参加を媒介としつつ真実のコミュニストとして創造してゆくという、行為的現在におけるこの実践的にして理論的な主体的反省(下向分析として意義をもつ)の認識Ⅱ思维過程において、マルクス主義の歴史的形を現在の再生産するでなければならぬ。」(マルクス主義の形成の論理P二二―二三)

(註2) 「……そしてさらにマルクス経済学学的確立へ、という学問的研究の根底には、つねに若きマルクスが直観した人間性外とその現実的止揚にかんするイデオロギーがうめかれているのである。このイデオロギーの具体化としてのマルクスの学

的自覚は、極本克己の主体性論や梯明秀の経済哲学によつてあたえられ、武谷三段階論、技術論を媒介として私なりの立場が形成されていったのだつた。」カッコ内は筆者。

(プロレタリアの人間論理P、八)

(註3) 初期マルクスの研究方法には大別して二つの流れがある。一つはレーヴィット、マルクス主義をヘーゲルからニーチエに到る哲学史の一つの過程とみなす立場である。

もう一方は、ルカチチ、ルフェーブルらのマルクス主義の形成に視点をあてる立場である。

(2) その展開

戦後の「異端」哲学者達のこのような問題意識の内では黒田は、マルクス主義の追体験的把握という路線にそつて「唯物史観を史的唯物論として再構成する」課題にとりかかつた。その方法的根柢が、「史的唯物論の形成とその原型」に述べられているものであり「特定の思想とその形成をその創造主体の立場において再現することであり、この創造主体においていかなる精神的苦闘と学問的探求がなしとげられたかの全体像を論理的——歴史的、そして心理的なさまざまな角度から実存的に照明することにこそある」この作業のなかで彼は「疎外論」の重要さを発見し、(註2)(註1)かくて「疎外論」をバネとしたマルクス主義の再構成がはじめられるのである。そしてそれは「社会観の探求」のなかで展開された歴史観、根源的な社会的生産の疎外形態が、社会的生産の歴史的な現実形態であること、を確立し、(註3)それはさらに進め階級意識論であるプロレタリアートの自覚の構造の解明へと進められ(註4)さらに後に階級斗争をプロレタリアの人間の論理か

間的生涯がきづかれてゆくのである。」(同右書P四五)

註1での彼の展開とこの指適はそれぞれ「展開」としてそして又、「指適」として正当に評価されねばならない。だが黒田が、このような認識にもとずいて、いかに彼の「マルクス主義」を展開したかというこの評価はこれと別でなければならぬ。彼はさらに「一歩すすめて」云う。

「そして、『私有財産の主体的本質』としての労働の把握と、『私的所有の実践的止揚』によつて実現さるべき共産主義社会における労働の本質形態の哲学的分析——このようなプロレタリアの生存の場所的分析はマルクス哲学の主体的な性格を集中的に示すものであり、したがつてそれなしには唯物史観の形成も、経済学学的学問的確定への展望も決してきりひらかれなかつたであろうところのものなのである。逆に云えばマルクス・エンゲルスの唯物史観と経済学学的根柢にうめかされてゆく根本的な理論として、労働の経済学Ⅱ哲学的分析は確立されるのである。」(同右書P五八)

(註3) 黒田の決定的な誤りゆひはここにあります。第一歩をふみだす。「九三社会的生産の本質形態は、すでに明かにしたように(二六をみよ)生産と所有との根源的な統一に立脚する生産様式です。このようなものとしてそれは、所有形態として集団的な所有であり、したがつて無階級的な社会構成です。これは歴史上の現象としては、原始共産体における生産様式に照応するのです。この根源的な社会的生産の疎外形態が社会的生産のさまざまな歴史的な現実形態なのです。」(社会観の探求、理論社版P九四)

このような思想に対し、梅本克己は、こう云っている。

「マルクスが明らかにしたことは歴史の提供した課題のなかで、分業と私有財産のもとでは、人間の自己対象化はどのような疎外形態をとるかということであり、したがってまたそこに設定された一般的予見は、疎外からの労働の回復のなかに人間回復の基本的前提があるということだけである。そしてこのことは、矛盾の論理がそこで止揚されるなどということの意味しないのであつて、そのようなことをすれば再びヘーゲルへの逆もどりでである。」（哲学における前衛性の問題、戦後日本の思想第一巻P二七七）

（註4） 以上のような歴史観と疎外観の上で、彼はドイツイデオロギーから資本論までのマルクスの労作を「現在の立場所立の立場においていかに再把握し主体化してゆくべきかの論理」（同右書P一〇）を以下に展開するのである。

註ろで指適した黒田の誤びゆりは、その展開にしたがつて拡大再生産されている。

「労働市場における賃労働者の直接的な日常的直観が、いかにして彼に敵対する資本そのものを現実的に止揚せんとする意志（高揚され、かつ彼らが組織され、動員され、実現されるか）——こういうプロレタリアの階級的自覚と斗争の論理が、出発点としての社会的生産の自己展開においてとらえかえされねばならない」（プロレタリアの人間の論理P二四）

「資本論の背後にひそむマルクス思想体系の構造の把握」という現代的な課題の遂行は、プロレタリアの歴史的自覚と階級斗争という史的唯物論の核心的な問題への主本的反省に

ほかならず、世界革命への確固たる信念を自己の支柱へ移し入れることに他ならない。」（同右書P二六）

さらに進んで彼は階級斗争の根本である「賃労働者の物質的自覚の現実的根拠」を現代的に再把握するための論理として以下のように展開する。

「……あるいは資本制に定有するためには労働力を商品として販売しなければならぬというこの労働市場の現実——かかる現実の感覚、その認識において、賃労働者は自己自身の疎外を反省せざるを得ない。……この感性的直観をバネにして、彼は労働市場の直接性における自由契約にもとづく平等な商品交換の虚疑性を認識せざるを得ないのであり、労働力の売買は資本制の生産関係の結果に他ならないことを不可避的に反省せしめられるのである。」（同右書P一〇二）

そして、プロレタリアートの歴史的自覚の本質として、

「いいかえれば、賃労働者としての自己疎外における自己分割の生きた直観は、かかる自己分割の止揚のための前提たる疎外されない生産的労働者としての生産的労働者という労働者の本来的な姿への物質的反省（二分析的 downward という経験的反省）を媒介として賃労働者の自己分割の歴史的自覚へ、すなわち資本制の生産判断が生産判断の疎外された一つの形態であることの自覚へ（上向的総合という概念的構成）高まるのである。」（同右書P一〇五）

（註5） プロレタリアートが何故革命的階級としてあらわれねばならないかという問題の論理的根拠として「出発点としての社会的生産からの存在論的向上展開は、分析的 downward の過程

であらわにされた生産様式——社会経済構成の歴史的な個別諸形態（あるいは生産判断の歴史的独自性）をば、根源的な社会的生産の疎外された諸形態として概念的に把握せんとするプロレタリアの自覚過程として意味をもつ。……それは（史的唯物論を主体化すること）社会的生産の歴史的諸形態の階級の本質をば、根源的な社会的生産においては統一されてきた生産と所有との本質的な関係が機械的に分裂した、その疎外された諸形態としてとらえかえすと同時にかかる疎外を変革せんとする革命的自覚を深めてゆくことである。」（同右書P一二五）

黒田が何と云おうと、これらの理論が若きマルクスの経哲手稿より一歩も出ていないことは読者にとつて明らかである。その内実はマルクスが具体的現実への批判として展開した資本論を抽象の世界へふたたびもどしたものにすぎない。労働者階級の主体性は現在への批判として、具体的に展開されねばならない。その作業の前提としての資本論の抽象化は一つの評価すべき対象となり得ても、黒田の場合、それが、かの歴史観と疎外観に支えられているがゆえに、抽象の世界にとどまり、そこから抜け出すことが出来ないのである。

### (3) 「革命的マルクス主義」と「反帝・反スタ」と前衛党

「革命的マルクス主義」という言葉は無自覚に語られている。だが、それは黒田にとつては、前節に展開したような意味においてそうであつた。前節の註において、私は長々と引用したが、それは「革命的マルクス主義」の姿を讀者の前に彼の言葉によつて示そうとしたからである。

まとめてみよう。「革命的マルクス主義」とは、マルクス主義の主体的把握をその出発点とし、人間疎外とその現実的止揚に関するイデオ（疎外論）の具体化としてそれは獲得されねばならない。そして、それは、歴史的現実形態が根源的な生産の疎外形態であるという「歴史観」に支えられて「プロレタリアの人間の論理」として、現実には展開されるのである。

「革命的マルクス主義」は、階級斗争の現実的根拠についてこの語りかける。すなわち、賃労働者は労働市場の現実において自己自身の疎外を感じ、そしてそれをバネに生産的労働者という労働者本来の姿を反省し、（下向分析）そこにおいて過去の本源の蓄積過程において、自己が暴力的に生産手段から分離されたことを知り、資本の現存が、直接的には自己の疎外された労働の対象化の帰結であることを自覚し、資本制の生産が一つの疎外形態であることを自覚し（上向展開）そして、彼は資本主義社会の変革に主体的に立ち上ると。

だが、「主体的唯物論」を自称する黒田は、このような「革命的マルクス主義」の提起によつて、まさにその「主体性」の問題すら明らかにされなかつた。前節註5の彼自身の語るところによつても明らかのように史的唯物論の主体性とは現実社会をその疎外された形態としてとらえる（具体的には学習）と同時にこの社会を変革せんとする革命的自覚を深めてゆく、というまさに重要な「自覚」の問題が何ら説明されることはなかつた。「プロレタリアの革命的自覚」の源では、即自的労働者から向自的労働者への移行の構造が明らかにされているが、その実現のためには、その構造とは無縁な抽象的な「自覚」が必要であつたのだ。



かねばならなかつた。この動ヨフの根本は何であつたか。それは本質的には「革命的マルクス主義」と反スタマルクス主義との斗争であつた。「革命的マルクス主義」は現実には、一つの政策としてあらわれた。それはプロレタリアの自覚を促進すべき前衛党の建設であり、抽象的な党建設のみが彼らの路線となり、これが革命運動とされた。

しかし現実には複雑であつた。学生運動にはそれ独自の論理があり、又小ブルの運動（原水禁運動）にもそれ相当の論理があつた。これらをただ一つの抽象的な党建設の論理でなで切ることは出来ず、具体的な運動が発展する度に「革命的マルクス主義」と現実との間の矛盾は深化していつたのである。

「反帝・反スタ」路線も試練にかけられた。全国委員会がまだ一つの小さなサークルであり、「反帝反スタの旗色を鮮明に」と叫んで自己満足にひたつていた間とはもかく現実の運動を前にして彼らとはまどつた。前衛党は彼らの頭の中に存在し得ても現実には存在し得ず、したがつて反帝・反スタをどう実現するかという問題がいつに彼らの政治生命にかかわる問題であつた。

「反帝・反スタ」が何かを明らかにしたが、「反戦斗争」であつたことは皮肉であつた。前進七三号は反戦斗争の二つの偏向について語り、（九州における大衆的ではあるがズブズブの斗いと東京における反帝反スタの反戦斗争）つづく七四号で、この二つの偏向の克服として「大衆運動のただ中において、革命的共産主義者は、反帝・反スタの立場において具体的な斗争戦術を提起し宣伝と煽動をくりひろげ……」と展開した。

だが、こうした事態は、政治活動にたずさわるには、抽象的確々運動の思想的力量の弱さの表現であつた。だが三年間の期間は無駄には過ぎていない。歴史は反スタ諸潮流のどの部分が続くかをすでに立証しようである。

反スタ運動が単にインテリ、学生の間だけにとどまらず、労働者階級との結合へと進んでいる現在、どの思想が勝利するかは早急に見定められ、その思想を強化しなければならぬ。黒田をほうむる作業はその一環を荷うものであらう。

さて何度も指適したように、今度の分裂で特徴的なことは中核派が、自己の思想的立場に全く無自覚であることである。中核派には二つの行先しかない。「革命的マルクス主義」への転落か、我々との共通の道への前進か。この問題に無自覚なままに過ぎるならば、中核派は現実そのものによつて分解させられるであらう。

(以上)

認ではなく、その時の主体と客体の状況を分析した上での具体的な政策として常に打ちだされねばならない、という政治活動のイロハを教えるものでしかなかった。「反帝・反スタ」の立場において……といった解答は解答にならなかつたのである。

このような矛盾は、大管法斗争の渦中で、全学連の政策をめぐつて爆発したのであつた。分裂は、統一戦線戦術の適用の上に大衆斗争を展開するか、それとも閉鎖的、セクト的サークル主義にとじこもるかという形式となつてあらわれた。

こうした過程の産物である分裂は、それゆえ、それ自体は正しい指適、「解放派はサークル主義であり、黒田はボケた」の上の中核派が安住するならば第二の分裂があらわれるであらう。

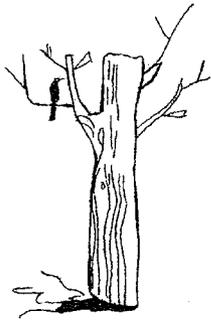
分裂の根底にあるのは、「革命的マルクス主義」をめぐる対立であり、それは、現在の落ちぶれた黒田に過去の黒田を対置することによつては矛盾は何ら止揚されず、ますます拡大するであらう。

それゆえに、中核派にとつては、安保斗争の総括にまでさかのぼつて自らの思想的立場を再検討することの必要性があるのである。

分裂の契機はすでに内包されていた。それは当事者が考えている以上に深刻な問題であつた。

黒田哲学が反スタ運動の導きの糸となつたことは評価されねばならないが、今ではもうその命はつき、「歴史のくづかご」へ打ちすてねばならないときが来ている。

反スタ運動がまだ弱い段階で、その主体が、純粋マルクス主義的部分と粗什実践的部分へ両極分解したこと、このことは反ス



「革マル」的残シから脱脚せよ  
政策なしの学生運動

『前進一六五号 岡田論文批判』

檜原均

先に検討したように、マル同中核派は、その「革マル主義」による武装を語りながらも実は「革マル主義」からの離脱であった。前進新年号はこの立場に無自覚であり、混乱を重ねていることを示している。

私はここで、「京都社学同の深まり行く危機、絶えまない中間主義的動搖にメスを」と題した岡田論文を検討するなかで、彼らの動搖ぶりを見てみたいと思う。

彼はまず、京都府学連の運動の危機について語っている。そしてその指標として、大衆運動の動員力、運動の荷い手の社学同の危機の表現としての市会事件、最後に民青との分裂をあげている。そして京都社学同の問題点として、「一、帝國主義とスターリン主義に対する対決を回避した極めて中間主義的本質にあり、第二にプロレタリア革命のための闘いの中で学生戦線における闘いを位値づけ得ず……労働運動と学生運動との機械的結合を夢見ていることである。さらに第三に……それから（日本階級斗争の危機的現象）の真の突破口——を切りひらきえず帝國主義的反動の強化に対する批判の貫徹——を切りひらきえず帝國主義的反動の強化に対する小ブルジョアの恐怖にみちた反発を急進主義運動とし

共産主義運動は、労働戦線における闘いの前進を基礎としながら学生戦線においても飛躍的前進を推進しようとしている」と大ぶるしきをひろげた。こうした言葉が「階級斗争の現実」という題目のもとに語られるとき、私は思わず、どこかの政党的綱領を思い出してしまふ。それはさておき、彼は、労働者階級の斗争と学生運動の契機について、諸斗争への学生の組織を通じ「学生大衆全体を政治的、思想的にプロレタリアートの方向に組織することである」とか、「学生運動の自立性などという小ブルに急進主義者の觀念から運動を解き放ち（プロレタリアートの解放）という根本的な問題を活動家に見開かせていく……」ことが革命的共産主義者の主権という題目で語られている。

中核派の諸君は今さら、学生に、「プロレタリア的人間の論理」を教育し、「プロレタリアの立場に立たせること」をプロレタリアートのヘゲモニーであるなどという無内容なことは云うまい。ではここでプロレタリアートの方向に組織するということは、現時点ではいかなる政治、組織方針として提起されるのか？

今井若は書いて「学生運動は戦闘的労働者の闘いを励まし、一定の政治的支援を与え、労働運動の先頭的翼と日和見主義的翼との分裂を推し進める一つの助けとなること出来よう」これが彼の長々とした論文のなかでの唯一の学生運動の具体的な役割である。とするならば、中核派は、学生大衆運動を展開しなければならぬ。それもプロレタリアートのヘゲモニーのもとに。そしてこの解答は実に、「学校細胞建設」である。細胞建設は大衆運動の先頭に立つたかでないならばならない。一方大衆運動はプロレタリアートのヘゲモニーのもとに、強固な学校細胞のもとに斗

て燃発させることの延長線上に「革命」を想定して安心してしまっているのである」（『前進一六五』）という三点をあげている。

だが、「帝國主義とスターリン主義に対する対決」にしても、「プロ革命の一環としての学生運動」も「日本帝國主義のバクロと社共に対する批判の貫徹」も、抽象的に語られるだけでは全然無意味であり、問題は我々主体の思想的、組織的力量と、客観情勢に対する分析を通じて、具体的な政策として、提起されねばならないのである。むしろ「革命的マルクス主義」の立場からすれば、抽象的に言葉をならべるだけでよかつた。なんとならば、それは黒田寛一とそのエビゴーンの頭の中の革命だつたからである。マル学同中核派はこうして「空論主義的セクト主義と訣別」（マル学同京大支部「流れに抗して」）したはずであつた。

それでは彼らはどういう政策を提起するのか。岡田若はそのことについて何も語っていないので、同じく前進誌上となりの今井論文と、手もとにある「流れに抗して」（京大支部機関紙）から、彼らの政策らしきものを拾つてみよう。

「全学連の七月再建を断固闘いとう」と題した今井論文は、決意のみがあつて政策が明らかでないが、まず、「……革命的

われねばならない。なんとならば、「学生運動をプロレタリア運動の一環として展開する」ということは、学生戦線におけるプロレタリア前衛組織の政治的、思想的、組織的活動を媒介してのみ可能である」（『流れに抗して』）からである。中核派は早くも悪循環につきあたつた。

中核派は何故悪循環につきあたつたのか？ それは、前衛党建設の現段階が総括されていないからである。「革命的マルクス主義」に立脚した前衛党は、黒田寛一の頭の中で「プロレタリア的人間の論理」が完結されると共に成立した。党のための斗争を提起しながらあたかも党が存在しているかのようにふるまつたのはそのためである。だが、今回の解放派と中核派の分派斗争において「頭の中の党」は中核派によつて、無自覚であるにせよ、破壊された。中核派はまず、自己の現段階での党形成の到達点を明らかにし、そこから学生運動に対する政策を出さねばならない。

中核派の諸君は色々説明し（もちろん「革マル」に立脚するならば、理解できないのが当然だが）ている学生運動の自律的展開の論理こそ、このような視点から提起された我々社学同の現実的な政策だつたのである。一九六二年九月一五日発行の共産主義十二号P二二—二三には自律論を以下のごとく展開している。

「従つて、新たな社学同は、自律的な学生運動としての性格をおびる。それは一応、労働運動と独立した所に学生運動を展開しようとするものであつた。だがそのことは、決して労働運動と切断されることを意味するものではない。現実には学生運動のありかたは、何よりも労働運動に影響されるからである。『自律的』であるには逆に、労働運動への理解をもち、常に全体的な政治情

勢の中に学生運動を位置づけることを意味する。」

我々は安楽以後のブンドの崩壊とそれを吸収したマル学同のセクト主義、そして一にぎりの我々関西ブンド、社会学、という主体的力量の確認と、しかしながら大衆的反党斗争の必要性という客観的情勢より、学生大衆運動の再建と独自のイデオロギー活動、政治宣伝（烽火の発行）を通じての党形成をめざしたのである。その際、自律論とは、何も、セクトものようにそれを誇りにするのではなく、そうならざるを得ない（労働戦線でのとりくみの弱さ）ということをやつたまでであり、抽象的な「プロレタリアートによる学生の獲得」などというオブラにすぎるとは、情勢の展望と運動の発展の見通しの科学性を、唯一の党派性としたのである。

このような立場を「小ブルジョアの立場」と云う今井君は、前衛党が確固として存在していると考えているのか、それとも、悪しき「革マル主義」の立場に立つのか？ いずれにしても本人自身がこの問題に無自覚なことはまちがいない。

さて、横道が長くなつたが、前の岡田論文にもどらう。しかし横道するなかではつきりしたことをまず整理しておこう。中核派の人達は、おこがましくも自らを前衛党と名の人はいないであろう。とするならば、岡田君が、反党反スタの徹底化だとか、プロレタリア革命の一環としての学生運動などという無内容なことを言っていることは、次の場合の二つである。彼が、「黒田革マル」に逆もどりしたか、それとも、自分の立場が何も分つていないか、これが現在の中核派の最大の問題点であり、矛盾として潜在しているものなのである。

我々社会学同内部の学習を中心とした二重三重の組織化による活動と、活動家を結集した学習会が当面の組織方針であり、そして労働者と社会学同盟員とのコミュニケーションの確立は、学生活動家を真の革命家へと成長させるであらう。ここ数ヶ月のとりくみを経て、京都府学連はまたたびその姿を諸君の前に現わすであらう。

さて、岡田君は、民青が分裂行動をとつたことをあげ、反スタ中間主義という批判をあびせかけた。だが、「無知が役に立つたためではない」東京にいる岡田君はともかく、京大のマル同の諸君までが、民青との分裂を鬼の首をとつたかのように反スタ不徹底の材料にしようとするとき、我々は「もつと現実を見よ」といいたい。

我々が一一、一斗争において、民青の分裂策動を封ずるため、徹底して、彼らに追隨したのは、先に述べたような府学連の運動の危機的ななかにあつて、運動の統一こそが特殊に重要であることを学生に教育するためであり、実際統一をめざして、運動の発展はあり得ないからである。民青は我々の呼びかけにもかかわらず、一一、一を分裂させ、さらに自治会選挙期間中の斗争も、我々の一一、五の提起に対し、故意に一一、七を設定した。だが選挙の結果はまさしく民青は分裂活動のためにほろろに敗北したのであつた。しかもさらに重要なことは、民青京大班のなかで、分裂の動きがはじまつたことである。これこそ我々がこれまで運動を統一し、そのことによつて民青に思想的影響を与えつづけてきたことの結果である。民青に対する我々の組織戦術は、何らあやまつていないし、いわんや反スタが不徹底だ、という何のことも

このような彼のおまさが、府学連の運動の危機を語る際にも問題の所在をボカしてしまつてゐる。彼の論旨ははつきりしないが、ようするに運動の危機は、社会学ではのり切れず、中核派のみが斗いえるという主観的決意表明を行なつてゐるにすぎない。そして、彼らは関西ブントが労働戦線で行きつまつた……などというあらぬデマによつてこのことを立証しようとしているのである。このような思考法は、悪しき「革マル」の伝統であり、こうした思考から一刻も早く脱脚してほしいものである。

さて、京都府学連の運動が危機にあること、このことを我々はいかしくもしなかつたし、そのことに絶望を感じたわけでもなかつた。我々は、何よりも「危機」はいかにして形成されたか、ということをや科学的に分析しなければならぬのである。

危機を構成する基本的要因は、日韓も、ポラ潜も、のびのびになつたことに具体化される情勢の固着化であり、そして、一方で既成指導部によつて圧殺され、一方で情勢に規制された大衆運動の不発がそれである。こうした階級情勢が、戦斗的な京都の学生運動に対し、既得権である市会すわりごみに対してすら全員逮捕で応えるというはげしい弾圧を生み、これが附随的要因を構成している。

さらに主体的には労働運動へのとりくみが限られてゐることであり、このような主体的力量の現段階が、はじめにあげた外圧を強烈に受けるなかで、動員数の減少と、政治的ニヒリズムの発生をみたわけである。

だが、革命家は危機の中できたえられるのである。我々はこの危機を分析するなかで、これをばねかえす体制をすでに確立して

がわからぬ忠告を聞くまでもないのである。岡田君の第二、第三の問題提起は我々を歪曲してはなほだしいものであり、また紙数の上からもここでは答えないし、又その必要もなからう。

最後に憲法斗争について岡田君はあたかも我々が、市民主義者のごとく論じた。日本帝國主義打倒の日本プロレタリア革命のための闘いの中で安楽斗争、憲法斗争を闘いぬくのでなく「憲法斗争の道をおつての革命」というのでは……

我々は貴重な紙面をさいて、言葉の遊びをしているのではない。プロ革命のため、闘いの中で……というこのあいまいな概念はいつたい何を言おうとしているのか。我々は日本プロレタリア革命達成のための当面の政治方針として憲法問題を提起しているのである。逆に岡田君はこのあいまいな表現で何を語ろうとしているのか？ 早く「革マル」の残シから抜けてもらいたいものである。

結論として、中核派の諸君、我々との討論をよびかけるのもよいが、まず私たちの思想的立場を整理してほしいものである。むろん諸君自身がなし得なくとも、その矛盾は、中核派の第二、第三の分裂となつて具体化するであらう。ちようどブントがそうであつたように。

(一九六四年、一月二十一日)

## はじめに

イギリス（一九六二年、国会突入斗争）、イタリア（一九六二、六、一七、金屬労働者のスト）、フランス（一九六三、三、一四、炭鉱プロレタリアートを中心とするゼネスト）、西ドイツ（一九六三、四、一五、金屬労働者戦後最大の斗争）と、資本主義の心臓部を一掃した、一九六二―六三年の階級斗争の大波は、すこしく、なりを秘めているように見える。一九六四年の元旦の現在、

この巨大な怪物が、再び大声を張り上げるまでのほんのわずかの時間に、済まさればならない基本的課題があるようだ。一九三〇年代、一九四五年―四九年の『人民戦線』のイメージが、「トレーズ」の胸に「トリアツチ」の脳裏に、いつもこびりついており、その古びた、サビついた「刀」で敵と「兵隊ごっこ」をしようとしているからだ。

一九六二―六三年のイタリア、フランスの炭鉱プロレタリアートを中心とするゼネストと金屬労働者の激しい斗いは、トリアツチ、トレーズに、二度も敗けた「兵隊ごっこ」を思い起させたのだ。スターリン主義の安定期の奇形児トリアツチカウツキー主義（一九四〇年代まではカウツキー主義程度だったが、現

在では、もつとも、ベルンシュタイン主義にまで落ちていたのだが）からの、革命的左翼（レーニン主義）の歴史的必然とその方向について、イタリア革命斗争の歴史的総括を行うことが、緊急の課題であらうと思われる。

レーニンは、度々語っている。「ボルシェヴィキは、プロレタリア革命のジャコバン党員である。」と。トレーズは、この文章を読んで、ジャコバンを探しに出かけた。そして、とうとう、見つけ出した。

『ヨーロッパの諸国民を、いま一度進歩と自由と平和の道へ導いて行くものは民主主義的フランス、人民戦線のフランスとなつた一七八九年のフランスである。』と書こびいさんで、「赤旗」の横にジャコバンのまねをして「三色旗」を高々とかがけてよるこんだ。そして叫んだ。「人民戦線は革命ではない。」「インタ」の歌声は「マルセイエズ」に代つた。

トレーズは、本物の「ジャコバン」（一七八九年）を見つけて出し、しまつたのだ。

トリアツチは、いちばやく、スペインでそれをまね、一九四三年からの「イタリア革命」では、本当に「三色旗」を「赤旗」よりも大切にし、「三色旗」の旗のもとに集まれと叫んだ。

「ボルシェヴィキは、新しい綱領と新しいスローガンとそれを

もつて、ロシア革命のジャコバン派とならねばならない。」（全集九巻四八）「メンシェヴィキの方は、シロント派であり、シロント派になるだろう。」（全集七巻、四〇九）

本物のジャコバンになつたつもりで「赤旗」よりも「三色旗」を大切にするトレーズ、トリアツチは、「現在のシロント派」である。彼らは「過去」を代表する。

「現在のジャコバン派」の登場は、歴史的必然であり、「未来」を代表する。キューバのカストロは、フランス大革命のジャコバン派にあげられ、「現在のジャコバン派」をキューバ革命で証明したのである。キューバ共産党が、「平和革命」の夢を見ている間だ。

イタリアにおける左翼反対派グループの躍動は、一九六〇年のシエノアの大ストライキ斗争から一九六二年、トリノを中心として斗われた金屬労働者の大ストライキにかけて顕著化している。イタリア共産党毛沢東派が、ナポリ、トリノ、ミラノ、シエノヴァ等に五万―三万存在していることは、中ソ論争を契機としてはいるものの、新しい階級斗争の波に対してトリアツチ主義が対応出来ないことを表現している。

『職場ではこんなことを云っている。今までの年獄の協約だつた。今後のもつとひどい絞首台の協約だ、と。』

そして、組合官僚の命令を無視してサボタージュに入る。斗いは特に、金屬、鉄鋼、電機で強い。しかし勿論、全体としては社会の支配下にあり、革命的な組織の活動は―おれたちもまだそうなのだが―限られている。『労働者の語る内容は、トリアツチが囁りもの入りで、「勝利／＼勝利／＼」と宣言した「金屬労働者の団体協約更新の爲の斗争」（一九六二年六月―七月）の内幕を示している。

「第四インター系トロツキスト」「サンデイカリスト」も北部工業都市でひしめきあつていられるといわれている。

トロツキストになつたといわれる「共産主義青年同盟」はどうか。彼らはトロツキーから革命的側面を引き出そうとせず、むしろトリアツチの「うけ売り」でトロツキーを切りすてているにすぎない。グラムシの評価も、傾向としては、「妥協期ウカイ期」に於ける否定的側面をうけ入れていられる。

これらのうごめいている左翼反対派の中から「ジャコバン派」が「誰れか」をさがしあてる事に現時点の我々の仕事があるのではない。

我々がなすべきことは、「イタリア革命運動」の総括を通じて、次の様な問題への接近を行うことである。

①「一九二〇年革命」に現われた、プロレタリアートのヘゲモニーによる社会主義革命（ブルジョア民主主義革命でない）の条件。すなわち、プロレタリア革命に於ける二重権力の問題（トリアツチ主義者は、つごうよくこのことをわすれている。）生産管理の革命的意味、プロレタリアートの武装。

帝国主義段階に於ける（イタリアではかなり特殊だが）農業問題（いわゆる南部問題）

世界革命の挫折と、コミンタールの妥協的政策ウカイ作戦期と、グラムシ思想。

②「人民戦線」と、二重権力の歴史。「人民戦線」は、「ロシア革命一九〇五年」に於けるメンシェヴィキであり、「ドイツ革命、

一九一八年に於けるカウツキーである。「人民戦線」は、何を生み出したか。

①一九四三—一九五〇の「イタリア」革命期に於けるトリアツチの指下。

武装革命によるプロレタリア革命を放棄して『三色旗万才』

「フランス革命のジャコバン」現代のジロンド」「イタリア革命」から受けつぐべきものは何か。

それでは、第一番目の課題から始めよう。

I、一九二〇年イタリア革命  
—一九二〇年イタリア革命の教訓を学ぶ為には、一九〇〇年—一九二〇年の階級斗争をふり返つて見なければならぬ。—

第一期 (一九〇〇—第一次大戦迄)  
北伊では、一九〇〇年から、資本主義は急速に発展した。北都大都市では、プロレタリアートが政治的組合の組織を作り、ブルジョアジーに対し、ストライキの武装を使う事を知っていた。ポー平原に於ても、農業プロレタリアートの大集団は、伝統的な社会政治関係を打ち破るものとなつて来た。資本主義的大農経営により農業プロレタリアートは、農業労働者同盟、協同組合を作つた。

革命的部分のインシヤテブでゼネストが宣言された。ミラノでの宣言は一瞬にして全イタリアに伝わつた。イタリアに於ける最初のゼネストである。

四日間は、全国的な混乱であつた。特に衝突事件のあつたところは、ミラノ、ジェノヴァ、トリノ、ヴェネツィア、ヴェローナ、クレモナ、グレッツィヤ、ボローニヤ、ローマ、ナポリであり、ジェノヴァでは、三隻の軍艦、ナポリでは、二隻の軍艦と歩兵二個連隊が派遣され、いずれも都市は軍にゆだねられた。イタリアのプロレタリアートは、社会党の日相見の指導を乗り越えた。社会党指導部は、ベルンシュタイン主義にしがみついた。ミラノのゼネストを指導したサンデイカリストはソレル主義(革命的サンデイカ)を受け入れていつた。

イタリアプロレタリアートは、その戦斗性をいかに発揮させた。サンデイカリストは、そのエネルギーを充分に指導した。社会党指導部(ベルンシュタイン主義)は、全く混乱に陥つた。ところが、両者が、逆転する時が来た。一九〇八年、農業プロレタリアートの暴動である。

『戦斗的であり、攻撃精神に満ち、不正にがまん出来ず、数世紀間もかれらに拒否されていた経済的福祉のひとつからでも望みあるいは、社会主義又は、革命の原始的な救世観念に元気づけられた農業労働者の大集団は、あいつぐ大ストライキの主役となり、このストライキを通じて規律と団結のプロレタリア的意識を獲得した。』(トリアツチ伝)

二八〇〇〇名の抵抗連盟(農民)と三〇〇〇〇名の地主の農業協会の対決であつた。改良派の指導する労働総同盟も、農業労働者同

農民も戦斗的革命的にきたえあげられていつた。農業プロレタリアートは大ストライキを展開していつた。国家機構は、組織された二大群衆のこの二重の圧力のもとにきしんだ。』(トリアツチ伝)『新しい世紀とともに、支配階級は、階級同盟、階級の政治的プロック、すなわち、ブルジョア民主主義という政策をとりはじめた。』『彼らは、賃金と労働組合の自由、とに關して改良主義的政策をとる資本家労働者の工業プロックをとつた。』(「南部問題」グラムシ)、ブルジョアジーは、農業をすてて、プロレタリアートをかかえようとした。しかし『よく観察すれば、一九〇〇—一九一〇年の過程に、社会主義者と労働者との運動に於ける最も根本的ないくつかの危機が訪れていることがわかる。大衆は、改良主義指導部の政策に対して、自然発生的に反発したのだ。』(「南部問題」グラムシ)

資本主義が、帝國主義階級に突入すると新たな階級斗争の激化をもたらした。  
一九〇〇年、ジェノヴァ労働評議会閉鎖に抗議して海陸の労働者を巻き込んだストを皮切りに、一九〇一年には、一四〇〇件の争議、一九〇二年には、トリノのガス会社のストライキに対して軍隊、鉄道プロレタリアートの合流によつて兵をもつて向へうつたが解決せず、ブルジョアジーは譲歩した。

一九〇四年九月十五日ミラノから、ゼネストが開始された。九月九日および十五日にそれぞれ、サルデーニヤ島のブツンエルおよびトラパニの近村カステツツツに鉱山労働者や農民の騒乱があり、出動した軍隊との間に殺傷があつた。軍隊の人民に対する殺害事件は深刻な印象を与えた。ミラノで労働評議会が開かれ、

盟もストに反対した。  
パルマの労働評議会(サンデイカリスト系)が、ストライキを指導した。

『サンデイカリストのデ・アチプリスは、パルマの労働評議会がたてば、全国の評議会も呼応し、容易にゼネストにまでもつてゆける」と計画したが、全国ゼネストにはならなかつた。解決の方途を失つた罷業は二カ月もつづけられたので、しだいにパルマも孤立した形となつた。そうすれば、争議も、又暴動的な様相を帯びざるをえなかつた。……改良派は罷業者を見殺しにした。』  
警察は、労働評議会を占領した。サンデイカリストは敗北した。しかし、農民の革命的戦斗的、伝統は残つた。社会党指導部は敗北をサンデイカリストになすりつけた。

以上で、イタリアプロレタリアートと農民が、革命的情熱と攻撃性と戦斗性を証明した第一期がおわる。

一九一四年の第二期までの間に、『ジュリツテイ(政府)は、銃をかついでいる肩を入れかえる。……すなわち、ブルジョアジーと労働者の同盟に代つて、ブルジョアジーとカソリックの同盟が出来る。カソリックは、この場合、北部、中部イタリアの農民大衆を代表している。』(「南部問題」)、社会党は、サンデイカリストの脱退によりますます右傾化を強め、サンデイカリスト(脱退した)は、「国家主義」への移行を始める。

第二期 (一九一四—反戦赤色週間、一九一五—トリノ反戦武装市街戦、一九一七—反戦、蜂起)

第一期の特徴が、「わんぱく小僧がボウ切れをもつてあばれまわった。」とすれば、第二期の特徴は、「ませた、高校生が機関銃をめぐらめつぽうに打つ。」ようなものであつた。下手をする

と殺されるかもしれない。第二期は、一九一四年、反戦ゼネスト暴動の「赤色週間」で始まつた。『社会党と労働者の間には、意識されなかつたにせよ、心理的な離反が生じていたことはたしかであつた。』(社会党の右傾化)そして、労働者は不満の解決を自然発生的な暴動に求める傾向を示していた。一九一四年の「赤色週間」は、このような性格をもつていた。『イタリア社会運動史、山崎功』

事件の始まりは、アウグスト、マゼッティとアントニオ・モロニニという二名の反戦兵士の処罰であつた。前者は、戦争反対で上官を銃撃し、後者も戦争反対で非合法活動をしたという罪に問われたものである。

処罰に対する抗議が、アナキストや共和主義者から発せられた。警官との衝突に死傷者が出た。

社会党と労働者同盟は、ただちにゼネストを指令した。各地で騒乱が生じた。エミリア、マルケ、ローマーニヤ地方では、暴動になつた。アンマーナ、ラヴェンナ、フォルリ県は、完全にアナキスト、サンディカリスト、社会主義者、共和主義者の手の中に入り、鉄道従業員のストも手伝つて、交通、電信、電話は断られた。

暴動者は、市役所、教会、停車場を荒らし、放火した。銀行も大商店もおそわれた。王は逃亡した。共和国の樹立が宣言された。各地に行動委員会、斗争委員会、革命委員会が作られ、騒乱をさ

わめた。しかし事件は、ただこれだけであつた。自然発生的であり、アナキシーな斗争であつた。社会党は前衛としての資格を完全に失つた。

一九一四年のこの「赤色週間」は、一九一五年のトリノの反戦ゼネスト武装市街戦に受けつがれる。アナキシーな市街戦は、トリノの革命的プロレタリアートの組織された市街戦に発展する。社会党指導部は、高まつて来た「参戦熱」に対して、政府が参戦したらどうするを決定する会議を、一九一五年五月十九日ボローニヤで開く事になつた。トリノの労働者は、ゼネストが決定されるものと思ひ、十九日夜からゼネストに突入した。全市は、まひ状態になつた。『大群集が労働評議会の建物の附近に集まつた。群集は、市の中央へ向つて行進を始めたが、軍の騎兵隊に阻止されるところとなり、ついに騒乱した。兵士と警察官は労働評議会を襲撃し、労働者はバリケードを築いて応戦した。相互に死傷者が生じた。』『情勢におどろいた社会党指導部は、反戦行動を各地方支部の自主的な判断にまかせるという決定を出した。そのなつては、どの支部も罷業に入るものではない。ことに戦争準備で充実した軍隊が積極的に参加した事実を見せつけられた今、力関係に於て、すでに敗北が予想されたからである。トリノの労働者は孤立し、うちのめされ、翌二十日罷業を中止して職場に帰つた。』(『イタリア社会運動史』山崎功)

この斗争は、「イタリア革命」の中核、トリノの革命軍を強く訓練した。トリノの老大な革命的大衆だけでなく、トリノの社会党や金属労働者同盟の中に新たな革命的共産主義グループ「グラムシ」のグループを生み出したのである。トリノのゼネ

ストと市街戦のあと、政府は、労働者階級を脅かすために、産業動員委員会と工場内部委員会の設置を考えた。

産業動員委員会は、各県におかれ、県庁、企業体、労働機関からの三代表による委員会で、生産増進に関する協議会であり、それ以降、三者会議というファシズム組合の基本的概念に発展していくものであつた。ところが、一方の工場内部委員会は、革命的発展を遂げるのである。工場内部委員会は、『各工場に全労働者による委員会を作り、給与や、労働時間、衛生設備について、資本家、軍代表と交渉する。』ものであつたが、後には、『イタリア革命』に於ける『ソヴェト』、『工場協議会』に発展するのである。

一九一五年のトリノのゼネスト市街戦は、来るべき『イタリア革命』の頭脳(グラムシのグループ)と心臓(トリノのプロレタリアートの革命的エネルギー)と、鉄腕(工場内部委員会)を生み出したのである。

一九一五、トリノの反戦ゼネスト市街戦は、一九一七年八月トリノの反戦ゼネスト蜂起に受けつがれた。『軍部による工場支配は、工場を軍事的規律におかれた為、工場内の労働は耐え切れぬものになり、……ストライキをしようとしたが、組合指導部におさえられて譲歩した。しかし、八月二一日には、全トリノのパン屋にひとかけのパンも発見出来ぬ状況になつた。……すでにロシア革命は伝はられていた。』(『イタリア社会運動史』)八月二十一日ストに突入した。「パンを与えよ」は「戦争をやめよ」となり、「政府を倒せよ」に発展した。「ロシアのようにやるろ」が労働者の気持になつた。二十二日トリノは二分された。

市中央部は、役人と兵士に占領され、市の郊外にかけては、労働者が占領した。『トリノの労働者は、帝國主義とイタリア軍國主義に反対して、武器をとつて蜂起した。この蜂起は、一九一七年八月二十三日に起つた。五日間、労働者達は、市の街頭で斗つた。蜂起軍は、小銃、手榴弾、機関銃を持ち、市のいくつかの地区を占領することにさえ成功し、政府諸機関と軍指令部のある中央地区の占領を再三再四こころみだ。』(『トリノ工場評議会運動』グラムシ)民衆は、バリケードをきずき、壕を掘り、有刺鉄線をいくつかの地区にはりめぐらし、そして、それに電流を通じ、五日間、軍と警察の攻撃を全部しりぞけた。五〇〇名以上の労働者が死に、二〇〇〇名以上の労働者が重傷を負つた。』(同上)しかし、自然発生的蜂起だけがそこにあつた。プロレタリアートの頭脳は、革命の経路に欠け、計画された蜂起を実行出来なかつた。

五日の後に、労働者は完全に孤立化した。労働者は自滅した。一九一四トリノの市街戦が、くり返された。しかし、二度のゼネストと蜂起の中で、トリノプロレタリアートは、より強固な鉄腕をもち固結した。より大規模に武装し、長くもちこたえた。プロレタリアートの頭脳「グラムシグループ」は、激しく練えられた。工場内部委員会は、徐々に革命の内容を持ちつつあつた。ブルジョア民主主義支配の『タガ』は、ギンギシとゆるんだ。だが、他方、『大衆の不満の激発を革命的に指導出来なかつた為、ファシストにより激闘の労働者市民をうばわれていた。ブルジョア政權をはげしく非難し、現状打破を訴えるムソリーニに大衆は、引かれていつた。一九一九年三月ミラノで、ムソリーニを

中心としてサンディカリスト、退役軍人、一部の国家主義者など  
が、「ソヴェト」を組織した。

ブルジョアジーとプロレタリアートの二重権力が、プロレタリ  
アートとファシストとの二重権力に置きかえられる萌芽が、す  
でに一九一八年頃から急速に進められていたのだ。

そんな事にはおかないしに、プロレタリアートは、「一九二  
〇年、イタリア革命」の序幕を演じていった。

### 第Ⅲ期 (一九一九年連統的スト、一九二〇年四月ト リーノの斗争、一九二〇年九月工場占拠

#### 「イタリア革命」

第Ⅲ期(一九一四→一九)の特徴が、「不良高校生が、がむし  
やりに機関銃をぶっぱなした。」とするなら、第Ⅲ期の特徴は、  
「敵の体に機関銃弾をぶち込んだとたん、味方の裏切り者によつ  
て背後から打ち倒されたようなもの」である。

一九〇〇年から二〇年間、激しい訓練できたえ上げられたプロ  
レタリアートは、最後の総決算をはじめた。自国帝国主義打倒、  
社会主義革命へと。

この第Ⅲ期、一九一九→二〇年に敢る「イタリア革命」期に、  
プロレタリアートの一翼とした断固とした指導部は、ロシア革命  
を手引きに頭脳をみがいていた。グラムシグルーパは、北伊金属  
労働者を中心とする中核に革命的規律とプロレタリア独裁を教え  
込んだ。プロレタリアートは「工場内部委員会」と「工場協議会」  
に「ソヴェト」を見ていた。

### 一九二〇年一月北伊交通労働者のストライキ。

このようにブル制度を、あざけりわらうようにプロレタリアー  
トは、革命への序曲を、終え一九二〇年四月トリーノ金属労働者  
(革命の中核)にバトンを渡した。

一九二〇年九月「イタリア革命」工場占拠斗争への最後の準備  
を、一九二〇年四月トリーノ金属労働者のゼネストは、支えた。  
一九二〇、四から一九二〇、八月二十一→九月二十二までは、連  
続的な、大波の到来であった。

一九二〇年四月トリーノの金属労働者(フィアット工場)の争  
議が三月二三日から始まった。トリーノを中心とするピエモンテ  
地方の金属労働者が参加した。

『金属労働者同盟と産業界同盟の間には、一九一九年二月、八  
時間労働制と賃上げについての原則的協定が成立したが、それが  
いつまでも具体化されなかつた為、四月の抗議ストとなつたわけ  
である。』

トリーノの工場主は「工場閉鎖」を宣言し、政府の応援を得て  
「工場協議会」弾圧の措置にでたため、紛争は、全労働者の防衛  
のゼネ・ストに発展した。

トリーノの全労働者が参加した。『(工場協議会と工場占拠)  
『十一日間の斗争(金属労働者にとっては一カ月)の後、一九  
一五年五月、一九一七年八月の時と同様、トリーノの労働者の孤  
立となつて敗北し、紛争は四月二十六日に完全に落着いた。』

(同上)

トリーノ金属労働者を中心とする社会党内共産主義フラクショ  
ンは、改良主義者から大衆を完全に分離させた。だが同時にピエ

『各経営は職場にわけられ、各職場は持場に分けられる。各持  
場は、労働の一定の役割を果す。各持場の労働者は、指令の権限  
を持つ代表者一名を互選する。各経営の代表者集会在工場評議会  
を形成する。この委員会が互選によつて執行委員会を形成し、こ  
から互選執行委員会政治書記の集会在中央委員会を形成し、ここ  
から互選の作成、計画の承認、個々の経営の提案の採用、個々の労働者  
の提案の採用、全運動の一般的指導の為の研究を行う。』(「工  
場評議会運動」グラムシ)。自国帝国主義打倒、プロレタリア独  
裁、社会主義革命は、この「工場評議会」に「ソヴェト」を権力  
とするプロレタリアートの蜂起内乱以外に道は、ないことをプロ  
レタリアートは知っていた。

「革命」(一九二〇年九月)への序曲は、一九一九年から一九  
二〇年四月のトリーノ労働者の斗争までである。

一九一九年四月十五日、ファシストの「アヴマンティ」新聞社  
焼打ちに対する抗議のゼネスト。一九一九年五月四日鉄道従業員  
のスト、北伊金属労働者のスト。次いで、一九一九年六月七月ロ  
ンバルデーア地方の金属工の賃上げスト、又、ロマーニヤか  
ら始まつて、リグリア、トスカナ、エミリアと全土にわたつて  
食糧危機からんでの騒乱。

一九一九年七月二十二、ソヴェトロシアへの資本主義諸国  
の干渉に対する抗議のゼネスト。他方、農業プロレタリアートは、  
一九一九年全般にわたつて、ラツイオ、アブルツツイ、プリア、  
シチリア地方に、主として、帰還兵士の農業労働者による「未耕  
農地の占拠」斗争が続発した。

モンテ地方以外では、改良主義者によつてゼネストはおさえつけ  
られてしまつた。

ゼネストは戦後最大のものだつた。十一日間の斗争は全ピエモ  
ント地方の政治的経済的機能を完全に「マヒ」させた。

続いて、一九二〇年五月一日、メーデーのデモで王宮警備兵に  
殺された二名の労働者の葬儀にさいして、トリーノは再び、ゼネ  
ストに突入した。政府と資本家は、一九二〇年四月と同様、「工  
場閉鎖」で反撃した。

重要産業に於ける、あいつく政府資本家の「工場閉鎖」に対し  
て、労働者階級が「工場占拠」を行つても、全く不思議ではな  
かつた。

一九一九年九月、五〇万の金属労働者は、「工場占拠」で攻撃  
を開始した。

四月と、五月のゼネストは新たな質的転換を勝ち取つた。「革  
命が始まつた」のである。

「工場協議会」による「生産管理」と武装蜂起の権力奪取のみ  
が、プロレタリアートの唯一の進むべき道であつた。

そして、プロレタリアートは、前進した。

斗いの経過を追つてみよう。  
イタリア全土を震撼させた一九二〇年九月の金属労働者の罷業、  
五〇万以上の労働者を動員して工場占拠にまで発展したこの罷業  
は、四月のゼネストの延長であつた。四月のゼネストは交渉を再  
開する約束で妥結した。交渉は、七月十五日から再開されたが、  
政府とファシストの支援で強硬になつた資本家は、さきに到達し  
た原則的協定さえも承認せず、ついに交渉は、八月十三日に打ち

りとなつた。

追い込まれた金属労働者同盟は、八月二〇日、翌日から意業に入る事を宣言し、もし資本家が「工場閉鎖」で攻撃するならば、労働者側は、「工場占拠」で反撃すると表明した。資本家側は、これに対して、二十一日から公然と攻撃を開始した。三〇日には、ミラノのローリオ工場を閉鎖宣言した。金属労働者同盟は、中央委員会を招集するまでもなく、「工場占拠」で反撃を開始した。八月三十一日の夜、ミラノでは一六〇、トリノでは主要工場の大半が早くも労働者によつて「占拠」された。九月一日には、ミラノを中心とするロムバルディア地方、トリノを中心とするピエモンテ地方の工場が占拠された。更に九月二日には、ロムバルディア、ピエモンテにならつて、全国の金属工場が労働者によつて「占拠」された。だが、『どのように政府の転覆と労働者階級の権力掌握が、実際に生じるかについては、大多数の労働者は、明確に言うことは出来なかつた。唯、一つのことだけはたしかであつた。すなわち、プロレタリアートは、すでに敵の主要陣地を所有し、しつかりと手に握つてゐるというのであつた。第一の最も重要な措置は、すでになされたのであつた。』イタリア帝國主義ジュリッテイ政府のローマに対して、プロレタリアートは、ミラノを中心とするロムバルディア、トリノを中心とするピエモンテを手に入れた。トリノはローマに対して、「プロレタリア政府」の役割を一部のにはたした。

『もちろん労働者は、全部通常の仕事をづけることは出来なかつた。

一部は、警戒の役についた。……他の一部は、武器の生産に

中央委員会』↓「市委員会」の労働者権力のもとに、「生産管理」と「武装」を行い、トリノ、ミラノを中心とする全金属労働者と「イタリアの大部分の産業工場」労働者を「同志」とし、「事實上の労働者政府」をトリノに置いていた。

このプロレタリア権力に対して、イタリア帝國主義、ブルジョアジー、ファシストは、官僚化した組合機関と社会党指導部を「恐迫」し、「だきかかえ」ながら、一万「ファシスト」を武装させ、「トリノ」の「プロレタリアートの武装」に対決させた。『敵は攻撃を準備し、トリノを攻撃する用意をした。黒シャツを着た(スクワドリスティ(ファシストのテロ団))の最初の集団が出現しはじめ、その内、強力な軍隊が集集された。』『工場占拠の間、軍隊は武装をととのえてポー河の橋の最も重要な金属工場とを見おろす丘の斜面を占領してゐた。夜になると、そこから、時々、機関銃が、工場の建物に砲火をひらいた。その建物の角や屋根の上には、労働者の監視隊の詰所が横顔を見せていたが、そんなときには、警戒のサイレンが鳴り、皆起上つてわり当てられた部署についた。』(「トリアツチとの対話」)

プロレタリア権力とブルジョア権力との斗争は、「ぐんくん」と頂点に達つてゐた。

その時、プロレタリアートの足を「ぐいぐいと引つぱる者」がいた。官僚組合機関と、社会党指導部であつた。

内部から「反革命」が進行した。決定的変更が来た。『金属同盟や労働者同盟の改良主義者の決定的な反対という形に於て。』(イタリア社会運動史)

九月十日〜十一日社会党と労働者同盟の指導者はミラノで協議し

努めた。武器は、工場が攻撃されたときに防衛するためにも、又、明日にでも現在政府を転覆し、労働者農民の政府樹立を可能にする。出口をつくる為にも必要であつた。

トリノだけでも数日の内に数千の手榴弾が作られ、そのほか多くの工場では未完成ではあつたが、大砲の銃や機関銃が作られた。工場占拠から十日の内に、全イタリアの労働者は強力に武装された。……(「トリノの一労働者の思い出」マリオ・モンターニャーナ)労働者は武装蜂起の準備を進めていたのである。一方「生産管理」は、『少なくともトリノでは、いたるところで、労働のリズムも生産のリズムもほとんど平常どおりであつた。ファイツトでは、「占拠の月」生産された自動車数は、前月の七〇%に達した。』(同上)

しかし、全イタリアの金属労働者が、「工場占拠」を作り、「生産管理」によつて生産を続けている限り、電力、ゴム、化学製品、皮革といつたものが欠乏した。電力、ゴム、化学製品、皮革の資本家は、供給を拒否した。ところが、電力、ゴム、化学製品、皮革のプロレタリアートは、革命的な連帯精神を発揮して、一週間の内に「工場占拠」を決定したのである。『国の大部分の産業工場が労働者の手に握られた。』が、その生産品を誰れが購入するかの問題が残つていた。

仮りにそのような問題が解決されたとしても、問題の本質は解決しなかつた。

すなわち、権力奪取の問題である。『生産管理のプロレタリア独裁の領域に移行させる問題である。』(「終戦後」グラムシ)プロレタリアートは、「工場内部委員会」↓「工場協議会」↓「

た。ジェンナリを含む「革命派」は、生産管理を全産業に及ぼし、ブルジョア政権打倒の斗争に転化せよと主張した。これに対して「改良主義者」の支配する総同盟は、斗争は経済斗争であるとして真向から反対し、総同盟(改良派)の意見が通らねば、「手を引く」とおどかした。「蜂起に自信のない社会党指導部」は、譲歩した。

『すべての味方から見はなされたトリノプロレタリアートは、自己の力で、単独で国家資本主義及び、政府権力と直面することをおこなうべきでなかつた。警察の部隊が、トリノにおしよせた。市の包囲の戦略地点に大砲と機関銃が配置された。これらすべての準備がなされ軍が配置につくと、資本家は労働者を挑発しはじめた。この重大な斗争の局面にさいして、プロレタリアートが挑戦をうけることをためらつたのは事実である。しかし、激突が避けられないとわかつたとき、労働者階級は、勇敢にその防衛線から出て、最後の勝利まで戦い続けることを望んだのであつた。』(「工場評議会に対する攻撃」グラムシ)

一方、懐柔政策のたくみな、ジュリッテイ(政府)は、「総同盟」とうまく取り引き出来ると思つた。

労働相ラブリオーラと「総同盟」のダラゴナ、「金属同盟」のプロツツイと協議した。①一〇〜二〇%の賃上げ、②労働者の産業管理を法案として国会に提出する。③資本家の報復措置は禁ず、この三点が解決条件であつた。

九月二十一〜二十二日の金属同盟全国会議は、トリノの革命のプロレタリアートの激しい反対をおし切つて、賛成一四八四七〇。

反対四二一四〇。棄権五〇一九をもつて「解決案」を採決した。労働者は、武装解除された。(一九二〇、九、二六)

プロレタリアートはブルジョアジーに重傷を負わせながら「ぐんぐん」と最後の決戦(蜂起)場に進んでいったが、味方の裏切りによつて、あえなく力つきた。一方ブルジョアジーは、重傷を負つて最後の「とどめ」を出来なくなつて来た。ブルジョア民主主義は、もはや、国家の幻想性を維持出来なくなつて来た。この死にそうになり重傷をおつているブルジョア民主主義に代りうるのは「ファシスト」だけであつた。

「ファシスト」は、改良主義者のなまぬるい指導にやゝのさした、戦斗的労働者市民をすでに一九一八年から組織した。

「革命」によつて、ブルジョア政府とプロレタリアートの指導部が完全に重傷を負つて立ち上れぬ時、唯一、ムソリーニのみが、巨大独占体と教会をバックにして、『無政府化し、絶望化した戦斗的労働者と市民』を味方にして、プロレタリアートに最後の「とどめ」を行うのである。

ジョリツテイ政府と革命的労働者との内乱(一九一九→一九二〇、九)は、革命的労働者と「ファシスト」との内乱(一九二〇、一〇→一九二二、一〇)に変わった。黒シャツ「攻撃隊」に対する労働者の「人民突撃隊」の内乱期である。

「ムソリーニ」は、ブルジョア国家を救う唯一者として、巨大独占体、大地地主、王、軍から、陰に陽に支持され、彼らの敵、革命的プロレタリアートと貧農を破壊するのである。

黒シャツ「攻撃隊」の巨大な物質力の前、重傷を負つた「突撃隊」は、負けていくのである。

最後のとどめは、ムソリーニの「ローマ進軍」(一九二二、十二八)によつてなされた。「ファシスト」との内乱に敗れた革命的プロレタリアートは、想像に絶する困難な「非合法活動」を展開していかねばならなくなつた。その困難の中で、「共産党」は、スターリン主義の害毒に犯されていくのである。

この二〇世紀の偉大な、イタリアプロレタリアートの革命斗争は、ロシアのプロレタリアートによつて、打ち開かれプロレタリア世界革命の一環であつた。革命のロシアは、国際プロレタリアートに、勝ち取るべき社会主義革命の「見本」を示した。「ヴオルシエウイキ」は、全権力を「ソヴェトへ」とさげんだ。彼らは、「プロレタリアート独裁」に成功したのである。カウツキーを頭とする国際的日和見主義は、「メンシエウイキ」を通じて「民主主義か独裁主義か」とわめきたてた。だが、未来は「ボルシエウキ」のものであつた。

彼らは、「帝制のロシア」を押し、「社会主義革命を表現させたのである。」

一九〇六年レーニンに述べている。  
「ロシアに於ける革命は、ブルジョア革命ではない。なぜならブルジョアジーは、ロシアの現在の革命運動の推進力を構成していないからである。」(全集十一巻四二五)「今日の革命で勝利するように社会民主主義プロレタリアートを援助し、彼らを支持し、又、ただちに実施されうる変革の限界を規定することの出来る階級とは、一体どの階級か? この階級は……農民である。」(同三八六)このように、レーニンは、民主主義革命と社会主義

代えられる。

それ故に、次に「イタリア革命」の総括と、「グラムシ」の批判的検討に移ろう。

十七世紀のイギリス革命は、ブルジョアジー郷土(「長老教会派議会」軍)と、プチブルジョア農民(「士官代表評議会」軍)との二重権力を生み出した。

一七八九年フランス大革命は、ブルジョアジーの「国民会議立法会議」と、第三階級の最下層市民農民の「パリコミュニオン」との二重権力状況を生み出した。

一八七一年のフランス革命はヴェルサイユの抑圧者と、武装したパリの「コミュニオン」の二重権力であつた。

一九一七年のロシア革命は、ブルジョアジーの「臨時政府」と「ソヴェト」の二重権力状況であつた。

一九一八年のドイツは、「国民議会」(ブルジョアジー)か「評議会政府」か、に革命の方向はかけられていた。

国家の誕生以降、支配階級と被支配階級の非和解的対立は、二重権力状況を通じて革命を生み出して来た。

一九二〇年の「イタリア革命」もその例にもれてはいない。ジョリツテイ政府は、ローマに陣を張つて、資本家と、軍部とファシストをあやつり、トリノを中心とするプロレタリアートの武装「協議会」(「労働者政府」の胚芽)を攻撃した。

トリノを中心とする全イタリア金属労働者と主要関連産業の労働者は、「工場内部委員会」と「工場協議会」による「生産管理」と「武装」によつて、ブルジョア国家の根幹をおさえ、来るべき「武装蜂起」の時期をうかがつて来た。

革命を段階的に区別したり、具体的条件、階級諸関係の生きた現実から離れて労働同盟の形態、その獲得維持の政治的方法を、ドグマ的に固定する考えとは無縁であつた。このことを理解しえない石頭と、レーニンは同じ「労働主義独裁論」(スターリン等)を清算する為に一七年四月にはげしく斗わなければならなかつた。このように、レーニンに於ても言われた『永続革命』(「農民運動に対する社会民主党の態度」『全集』第九巻、二四一→二四二)を「ヴオルシエウイキ」は実行した。

ところでイタリアでは「新しい世紀とともに、支配階級は、……ブルジョア民主主義という新しい政策をとりはじめた。」

(「兩部問題に関するいくつかの主題」グラムシ)  
プロレタリアートのヘゲモニーによるブルジョア民主主義革命でなく、プロレタリアートは、直接に社会主義革命に行かねばならなかつた。すでに一九一八年にドイツプロレタリアートは、先進資本主義國に於いて、社会主義革命を証明するのに失敗して来た。「カウツキー」は、「革命の生み出した革命的側面」を見るのでなく、敗北革命の示した否定的側面を合理化していた。

その様な犯罪的な行為が、「現在のイタリア」及び、全世界の「トリヤツチ主義者」によつて行われている。

一九二〇年「イタリア革命」の革命的側面を「見ず」否定的側面から出発する「現代マルクス主義」者が、全世界で、労働者に「改良のありがたさ」について「説教」をしている。その説教も、権威をつけて「グラムシ」の名が、とどめとなく出て来る。

「グラムシ」の革命的側面は、返り見られず、否定的反動的側面が強調されるか、あるいは、革命的側面は、改良的言葉に置き

先進資本主義國に於ける「現代革命」の中心思想を一九一八年のドイツと同様ここイタリアでも見る事が出来る。

ブルジョアツターの「工場閉鎖」攻撃に対して、プロレタリアートは、「工場占拠」(ロシアでもあった。)と「生産管理」(イタリアで初めて行われる。)で反撃した。(ところが十五年間スターリン主義者は、ブルジョア國家復興の為に用いたのだが。)

「工場内部委員会」と「工場協議会」が、その実権を握つた。「工場内部委員会」は、ロシアの「ソヴェト」とは少々異つていて、「ソヴェト」は普通の労働組合そのものが、階級斗争の過程で、「プロレタリアートの権力機関」に変わつていつたのだが、「内部委員会」は、普通の合法的労働組合とは別個に、「工場内の各組織で(職場で)、組合員又は、非組合員を問わず、全労働者が、職場代表一名を秘密投票で選出する。」「イタリア社会運動史」

「古い革命の都市大衆に比較して、ロシア・プロレタリアートが無限に成熱して来たという点に、ロシア革命の基本的特殊性がある。」「(ロシア革命論)トロツキー」とトロツキーが指している様に、「ソヴェト」は、労働組合と全く別個に出生しなくてよかつた。ところが、先進資本主義國イタリアのプロレタリアートは、社会党指導部「ベルンシュタイン改良主義者」から、目的意識的に、自らを分離するために、「工場内部委員会」の非合法性が必要であつた。このことは、先進資本主義國に於ける「ソヴェトの萌芽」が既成指導部の支配する「労働組合」とは別個に、中ば非合法的に、組織されねばならないことを示している。(これは第二次大戦後の革命期には、合法化し、ブルジョア化してしまつたので新たに「扇動秘密委員会」が必要になつたの

だが)

この「工場内部委員会」と、その集約組織である「工場協議会」が、実行する「有史以来はじめて……の……生産管理」を「プロレタリア独裁の領域に移行させる問題」(「トリノ工場評議会運動」グラムシ)の「カギ」は、プロレタリアートの「武装」

「軍事力とそれを行使する戦術のテツテイ性にかかつていた。ジャコパンの徹底的支配こそ「カギ」である。ジャコパン派もその革命性を最後まで貫徹出来ず、プロレタリアートと敵対し、「ル・シャブリエ工法(労働者の団結権、スト権の禁止)を堅持し(イタリアに於ける近代國家の形成と発展の上での政治指導の問題)」た事が命取りになつたのだ。

「又、組合機関のあらゆる官僚的メカニズムとの斗争が緊急に必要である。」「(ミラノの社会党大会)」とグラムシがじたんだふんでくやしがつた改良主義者からの革命的プロレタリアートの分離及び指導(「自然成長性と意識的指導」グラムシ)も、「革命的高揚期」「激動期」に於ては、「知的道德的ヘゲモニー」に重点が置かれることは、むしろ非常な危険性をもつ。なぜなら、背教者になる以前のカウツキーは、「プロレタリアートの革命斗争に於ては、軍事的方法が用いられたブルジョア革命斗争の場合と比べて経済的、立法的及び、道德的圧力の方法が、物的方法、すなわち、軍事的方法に勝るであろう。ということはあるべきことだ。」「(「権力への道」)更に、イギリス、ドイツなどの様な民主主義制度が大きく発展している時、それを基礎として議会選挙で多数を獲得し、権力を握ることを語つている。「激動期」に於て「知的道德的ヘゲモニー」が「

軍事的ヘゲモニー」に勝ると考へるなら決定的な誤りである。

「革命期は、いわゆる平和的發展の時期、経済的諸条件が深刻な危機をよびよせることもなく強大な大衆運動を生み出すこともない時期と、次の点で区別される。すなわち、革命期には、斗争の諸形態が、不可避的にはるかに多種多様なものになるとともに、大衆の直接に革命的な斗争が、議会や定期刊行物等々に於ける指導者の宣伝、煽動活動よりも重きをなすということが、それである。」「(ロシア革命の評價によせて)」と、レーニンは、激動期に於いては、「軍事的ヘゲモニー」が決定的であることをいつている。「一團が勝利をおさめるには平和の時期から、戦争を細心に技術的に準備しておかなければならないといわれるようになったが、それと同じことが政治技術のなかにも生じた。」「(『「集団的人間」あるいは「社会的順応」の問題」グラムシ)

このことは、一般的に言えることである。しかし、政治的激動に於ける「知的道德的ヘゲモニー」の重視の傾向は、「軍事的ヘゲモニー」の決定的重要性を忘れさせる傾向をもつている。

「革命斗争の生産管理の、プロレタリア独裁の領域に移行させる問題」(「終戦後」グラムシ)が、限界をもつたのは①「生産管理」

「知的道德的ヘゲモニー」重視の傾向、と②「この重大な局面に際して、プロレタリアートが挑戦をうけることをためらつたのは事実である。」といわれる「軍事的ヘゲモニー」軽視の傾向であり、同時に③「農民との同盟」の失敗であつた。

①「生産管理」の思想は、グラムシにあつては、「知的道德的ヘゲモニー」の主要なモーメントであつた。グラムシは、次の様に類別している。

「ある社会集団は、それが、武力で訴えても、「一掃」ないしは服従させようとする敵対諸集団を支配する。そして、近親諸集団と同盟諸集団を指導する。」

グラムシは、「東方」のボルシェヴィキをも想ひ起している。「支配権」「軍事的ヘゲモニー」。一方又、「ある社会集団は、統治権を獲得する以前にすでに指導的でありうるし、又、むしろ指導的であらねばならぬ。(これが権力獲得そのものについて、主要な諸条件の一つである。)、その後、その社会集団が権力を行使する時、そしてなおも、その権力を固く保持するならば、その社会集団は、支配権を握る事になる。しかし、かれらは、なお、「指導的」でもありつづけねばならないのである。」「(イタリアに於ける国民と近代國家の形成と発展の上での政治的指導の問題)グラムシ)グラムシは、ここに「西方」革命のイメージをえがいている。「生産管理」は、この指導的「知的道德的ヘゲモニー」の決定的要素なのである。

彼は、第一次大戦から始まつた「ブルジョア社会の荒廃」を立てて直そうと考へていた。一九二〇年二月二十一日「オルディネ・ヌオーヴォ」に於て、「分配の資本家的体系は、政治権力という名の盗品売買者によつて準備された武力による略奪と化した。資本家は生産の分野から遠ざかつた。産業の管理は、無資格な、無責任な輩の手中に落ちた。いまや労働者階級だけが労働を愛するもの、機械を愛するものである。

労働者階級が生産を支配しており、それ故社会の主人である……新しい生活、新しい発展の力を社会に注入することが出来るのは、生産性に対する英雄的努力だけだからである。」「(工場労働

勤者「グラムシ」

グラムシが、その様にいつている時、未だ、「工場占拠」は、全然行なわれていなかった。(これから七カ月後に行われた。)彼は明らかに「生産管理」を権力奪取以前における「知的道徳的ヘゲモニー」の主要な要素として展開している。もちろん、「生産管理」は、「現代革命」に於ける主要なモーメントの一つである。しかし、「権力奪取」以前に於ける労働へのこの様な絶讃は、「知的道徳的ヘゲモニー」重視と「支配権」「軍事的ヘゲモニー」軽視の傾向を持つている。ちなみに、一九三〇年代の「人民戦線のフランス」は何を示したのかを考えて見たまえ。第二次大戦後のイタリア、フランス、イギリス、ドイツ、日本……も同様に、「生産管理」は、ブルジョア生産様式の復興のみ役立つたにすぎない。一九四七年、ゼネストの爆発にあつたため、ルノー工場の前に来て、「賃上げよりも生産復興が重要だ、斗争よりも平和を。」と叫んだ時の内閣内務大臣、トレーズ共産党書記長の、反革命ぶりを想い起してもみよ。「生産管理」は、「権力奪取」期に於いて「過渡的政策」としてのみ提起されねばならない。しかし「イタリア革命」は来るべきプロレタリア革命では、このような戦斗形態が予想されることを念頭におかなければならないことを示した。

② 「軍事的ヘゲモニー」について、カウツキーは一九〇六年に次の様な問題提起をした。ブルジョア革命に於ては、「軍事的ヘゲモニー」が勝つたが、プロレタリア革命に於ては「知的道徳的ヘゲモニー」が勝つという事はありうべきことだ、と。(トリアツチは、カウツキーの慎重な学者ぶつたところをとびこえて、

ル、士官代表評議会の軍隊」それに対する「クロムウエルの軍隊」というふうな諸階級のちつぽけな「軍事的ヘゲモニー」の対立ではなく、プロレタリア革命期は、「巨大なブルジョア常備軍」に対する、「老大なプロレタリアートの軍事的ヘゲモニー」の「ガツブリ四つ」の斗いとして展開されて来た。又、「来るべきプロレタリア革命では、このような戦斗形態が、予想されることを念頭におかねばならないことを示し、(「ロシア革命の評価によせて」レーニン)ている。

プロレタリアートのヘゲモニーによる社会主義革命(ブルジョア民主主義革命ではなく)としての一九二〇年の「イタリア革命」を、そのような視点(「軍事的ヘゲモニー」)から見ることを忘れようとするものがある。「人民戦線」主義者は、その代表である。「生産管理」を讃美するが、それを「プロレタリア独裁の領域に移行させ」ようとはせず、(「軍事的ヘゲモニー」を忘れて)ブルジョア社会に貢献する。あるいは、「社会民主主義者ベルンシュタイン主義者」が、つてこないからといって、「革命期」に於いても「大衆へ」という「妥協期」の戦術を用い「革命的戦術を通して多数を」という革命的戦術を放棄してしまふ。

「一九二〇年イタリア革命」は、先進資本主義圏に於ける「ソヴェト」方式の革命を一九一八―一九一九年のドイツと共に証明した。そして又、「工場協議会」による「生産管理」(一九二一年にはコミンテルンに普通のなものとして受け入れられるのだが)を、「有史以来はじめて……実証」(一四月のストライキ)グラムシ)した。だが、イタリアプロレタリアートの輝かしい伝統(一九一四年赤色週間、一九一五年市街戦、一九一七年蜂起)「武装

プロレタリア革命に於いては「知的道徳的ヘゲモニー」が勝る。そして平和革命のみが唯一の道であると言いきつてしまつているのだが)我々は、ブルジョア革命に比べて、「プロレタリア革命期」には、斗争の諸形態が不可避にはるかに多種多様なものになる」という意味に於て「知的道徳的ヘゲモニー」が、ブルジョア革命期に比べて、プロレタリア革命期に於てはより重要視されねばならないことを認めねばならない。

だが、プロレタリア革命期に於いては「知的道徳的ヘゲモニー」が、「軍事的ヘゲモニー」に勝るといふ結論には、達する事は出来ない。むしろ逆に「革命期には」「大衆の直接に革命的な斗争が、議会や定期刊行物等々に於ける指導者の宣伝、煽動活動よりも重きをなす。」すなわち、プロレタリア革命期に於いても「軍事的ヘゲモニー」が「知的道徳的ヘゲモニー」に勝るといふ結論に達する。

一九一八―一九一九年のドイツ革命は、「ノスケの反革命義勇軍」に対するプロレタリアートの軍事的劣勢によつて、その決定的時点で敗れねばならなかつたし、一九三〇年代のスペインは、フランコの強力な反革命軍に対して革命軍の劣勢として最後の敗北していつた。又、第二次大戦後のフランスも、ドゴール軍に対して革命軍の劣勢であつた。(もちろん、スペインと同様「人民戦線」方式そのものに敗北の本質的な要因はあつたのだが)むしろ、カウツキーとは逆に、プロレタリア革命期に於ける「軍事的ヘゲモニー」は、「現代革命」に於ける決定的モーメントである事を知るのである。ブルジョア革命期に於ける様に「王の軍隊」に対して、「ブルジョアンの長老議会の軍隊」それに対する「プーチン

蜂起」を証明しなかつた。その原因を「統一戦線」が混れていたといつて合理化してはならない。むしろ、八月三十一日から九月二十六日まで「革命の頭脳」トリノは、「この重大な斗争の局面にさいして、プロレタリアートが挑戦をうけることをためらい」ビッドなダイナミックな戦術を提起しえず、プロレタリアートに大胆に進むべき方向を示せなかつた意識性の欠陥と指導の問題にも大きな原因がある。それは、「軍事的ヘゲモニー」の喪失ともいえることである。「一九二〇年」のイタリアは、我々に「軍事的ヘゲモニー」とその意識性の決定的重要性という教訓を与えてくれた。

③ 「一九二〇年」のイタリアが教えてくれた次の事は、「農業問題」である。すなわち、プロレタリアート独裁への道に於ける「農民」との関係であり、「工場占拠」と「農地占拠」との結合の問題である。

「トリノとピエモンテ地方のゼネストは、組合機関と党自体の怠慢、抵抗に対して斗つた。しかし、この斗争は、大きな教育的意義をもつている。なぜなら、それは、労働者と農民の実践的統一が可能であることを証明したからであり……。」(「ミラノの社会党大会」)グラムシは、この事を、一九二〇年一月にすでに次の様に理論化していた。「北伊プロレタリアートが、資本家的クサビから自己を解放するならば、北部の銀行及び、寄生的生産主義に隷属されている兩部の農民大衆をも解放するであろう……労働者の独裁を打ち立てる事によつて、工業と銀行を掌握する事によつて、プロレタリアートは地主に対す、悲慘に對する農民の戦いで、農民を支援する為、国家組織の無限の権力を

もちいるであろう。「はかならぬトリーノ共産主義者こそ、( )  
かれらは、ただ二階級の連帯行動に従属するものとして土地分配  
を主張していた。』『奇蹟信者』どもが大土地領地の機械的な分  
配に期待する種々の幻想に対して警戒していたものだ。』(『オ  
ルディネ・ヌオーヴォ』一九二〇、一、三)と。そして彼は、「  
農業問題」に全然興味を持たず「農地占拠」を見殺しにして来た  
社会党指導部(ベルシニウタイン改良主義者)を批判した。と同  
時に「工場占拠」と「農地占拠」を、分離し、工業プロレタリア  
ートとの同盟を否定し、「農地占拠」を孤立化させたサンディカ  
リストを批判した。

この様な、「農業問題」に対するグラムシの理論は正しい。  
一七世紀イギリス革命で、「クロムウェル」は農民との同盟に  
成功し、一七八九フランス革命で、ジャコバン派は「パリ」と農  
民との結合に成功した。一八四八年、七一年のフランスプロレタ  
リアートは、農民との同盟に失敗した。ジャコバンによつて土地  
を与えられた農民は保守反動化していたのである。

一九一七年のロシアに於ては、プロレタリアートのヘゲモニー  
による農業プロレタリアートの「支配」は正しく実行された。  
「労働者と農民の同盟は、プロレタリアートと農民という異なつ  
た階級ないし、党の合同であると解しては断じてならない。』(レ  
ーニン「全集」十一)「農民に対するわれわれの態度は、不信  
でなければならぬ。われわれは、彼らと別個に組織しなければ  
ならぬし、農民が反動的な、ないしは、反プロレタリア的な反対  
勢力となつて現われる程度に於て、これと斗争する決意をもた  
ねばならない。』(レーニン「全集」六卷)

だ。ところが、トリアツチの言つた事には「工場と農地は国家の  
財産だから明け渡せ」だと。

以上「一九二〇年のイタリア」から「二重権力」「工場協議会」  
「生産管理」「武装」「蜂起」「軍事的ヘゲモニー」と知的運徳的  
ヘゲモニー「農業問題」「農地占拠と工場占拠」について、「  
現代革命」の問題として発展させねばならないものを、グラムシ  
の部分的検討を通じて行つて来た。

しかし「一九二〇年のイタリア」と「グラムシ思想」(一九二  
六年以降をも含めて)が、より実りあるものとして評価される為  
には、一九四三→一九五〇年の「第二次イタリア革命期」の中で  
再検討されねばならないし、又、「現在のイタリア」を通して見  
なおさねば「一般のおもいつき」に終つてしまふだろう。  
それ故に、次に第二次大戦後の「第二次イタリア革命」期に移  
らねばならない。

この「第二幕」は、「一九一七→一九二三」第一次世界革命の挫  
折「期」(一九三〇年代第二次世界革命の敗北)期につく、「第三  
次世界革命の裏切り」が演じられた。

この「第二幕」は、すでに、一九三〇年代、フランスとスペイ  
ンの「人民戦線」で練習すみのものであつた。  
それ故に「第二幕」に入るまえに、フランスとスペインに於け  
る「幕間の練習」を見ずにはおれない。

一九二〇年のイタリアでは、ビエモンテ地方のゼネストは、「  
工場占拠」と「農地占拠」がプロレタリアートのヘゲモニーで斗  
われた事を証明した。二〇世紀初頭から、イタリアの農業プロレ  
タリアートは、「革命的であり、攻撃精神に満ち、不正にがまん  
できず、……社会主義又は、革命の原始的な救世観念に元氣づ  
けられた農業労働者の大集団は、あいつく大罷業の主人公となり  
……。(トリアツチ伝)一九〇八年バルマの大雪騒ぎを起  
し、「一九九年全般にわたつて、ラツイオ、アブルツツイ、プリマ  
シチリア地方に主として帰還兵士の農業労働者により未耕農地を  
占拠」(「イタリア社会運動史」一五五)し、「イタリア革命期」  
には、ビエモンテの農業プロレタリアートと南部農業プロレタリ  
アートは「農地占拠」を展開した。

グラムシは、「南部問題に関するいくつかの主眼」で「工場占  
拠」と「農地占拠」の結合を正しく総括した。『穏健派に有効に  
反対するためには、行動党が、農民大衆、特に、南部農民大衆と  
結びつかねばならないこと(社会党指導部は放棄した)氣質とい  
う外面的「形式」(サンディカリストはまさにそれだけだつた)  
からだけでなく、特に経済的、社会的内容によつて、「ジャコバ  
ン党员」であらねばならぬことは明白である。』(「近代国家の  
形成と政治指導の問題」)と。彼は、「プロレタリア独裁」の問  
題としてそれを提起した。

ところが「現在」では、トリアツチによつて全くねじまげられ  
てしまつてゐる。

第二次大戦後の革命期の「工場占拠」と「農地占拠」にプロレ  
タリアートと貧農は突入した。「革命的伝統」は再び発揮されたの

## II 『人民戦線』 ジャコバンからシロンドへの転落

「現代革命」の「神秘さ」を、「人民戦線」の「思い出」がま  
すます「深淵な」ものとしてゐるようだ。

いわく『ブルジョア独裁でも、プロレタリア独裁でもない「新  
しい民主主義」の出現。』『現代に於ける「労働者政府」は「人  
民戦線政府」である。』等々。

現在ヨーロッパ諸国の共産党を中心とする全世界の共産党の大  
多数が、「トリアツチの夢」「人民戦線」を、目の色を変えて  
さがしもとめている。そして、「人民戦線」は、「現代型の革命」  
であるといわれる。それ故、「人民戦線」の「歴史的な位置」づ  
けをコミンテルンの指導との関連で見なければならぬ。同時に、  
「人民戦線」が生み出したといわれる諸問題、「人民戦線政府と  
労働者政府」「新しい統一戦線」「新しい民主主義」「平和的  
議会的移行」「生産管理」「義勇軍」等々を検討しなければなら  
ない。

第二次大戦後の「第二次イタリア革命」及びイタリア階級斗争の  
現状を見る為の不可欠の前提でもある。

まず「人民戦線」の歴史的な位置づけをコミンテルンとの関連で  
しらべてみよう。その為には、「人民戦線」にいたるコミンテル  
ンの歴史を概観することから始めねばならない。コミンテルンの  
指導(スターリン主義)におち人つてから、( )をぬきにして「人民

戦線」を語ることは出来ないからである。

一九二三年に起つたドイツの革命的高揚ガクセン蜂起が、ター  
ル・ハイマー、ブランドラーの裏切りの右翼政策によつて、十  
月革命を生み出した戦後の国際革命の波にとどめがさされると、  
資本主義の一次的安定の時期がはじまつた。

ところが、一九二四年四月、西歐諸国共産党に対して一揆主義  
の極左的政策を唱導していたスターリンは、一國「ことにロシア  
のような農民国に於いて社会主義を達成することは不可能である。  
この為には、いくつかの先進国の統一的努力が必要である。』  
（「レーニン主義の基礎」一九二四年版ロシア版）と言明し、ジ  
ノヴィエフも一九二四年二月二〇日国際赤色救援会の会談の席上、  
全ヨーロッパの情勢は、次の様であると述べた。「われわれ  
は今や、どんな短期間にせよ、表面的平和さえも、如何なる種類  
の小康状態をも期待してはならない。……ヨーロッパは決定的  
事態の段階に入りつつある……ドイツは明らかに尖鋭化する内  
乱に向つて進みつつある。……」（「ブラウダ」一九二四年二  
月二日）又、一九二四年三月二六日、コミンテルン執行委員会は  
ドイツ共産党にあてて書き送つてゐる。「一九二三年十月、事態  
のテンポの解極を誤つた為、党は非常な困難に會つた。しかし  
ながら、これは一つのエピソードにすぎない。基本的評価は、依  
然として前と同じである。』（「ブラウダ」一九二四年四月二〇  
日）「ドイツ共産党は、従来通り、労働者階級を武装する仕事に  
その全力をつくすことを継続しなければならぬ。……」（「  
ブラウダ」一九二四年四月十九日）と決論され、一九二三年一〇  
月ドイツ革命以降の資本主義の相対的安定期は、無視され、コミ

ンテルン第五回大会（一九二四年）に於いて、スターリンは、ド  
イツ十月蜂起を、その無用性の確證として、統一戦線戦術（一九  
二一年コミンテルン第三回大会でトロツキーによつて提唱された）  
をボイと投げすてしまつた。

同時に「フアシズムと社会民主主義は、（その指導層を問題と  
するが）第一帝国内部競争及び、この競争に対する労働者  
の最初の斗争によつて弛緩した近代資本主義の右手と左手である。」  
と規定することによつて社会フアシズム論に最初の基礎を与え、  
プロフィンテルンを文字通り「赤色組合主義」におとし入れ、「  
統一戦線」を否定することによつて、一九二〇年初頭のフアシズ  
ムに対する演説的敗北を準備したのだつた。

だが、スターリンとコミンテルンは、フアシズムの攻撃と、一  
九二四年エストニア蜂起の失敗等々によつて、西歐のプロレタリ  
アトへの信念を失つてしまひ、ようやく、戦後資本主義の安定  
期に気がつき、逆に一八〇度転換してしまつた。

一九二四年十月（スターリン「レーニン主義の基礎」一九二四  
年版ロシア版）で言明してゐた「世界革命」「一國社会主義建設  
不可能論」は、すてさられ、「一國社会主義」の理論を発表した。  
同時に「平和共存」が置かれた。そして、一九二五年四月には、  
トロツキー、ジノヴィエフ、カールネフ、クルプスカヤ、その他  
の多数を押し切つて「一國社会主義建設論」と「平和共存」をソ  
連共産党の政策とした。

同時に、一九二四年までがなりたてられていた「一揆主義の極  
左政策」讚美と「統一戦線」の否定も、何の給格もなく「ボイ」  
と一八〇度転換され、ツプツプの「統一戦線」におきかえられた。

（ところが、「社会フアシズム論」は、依然、底流に流れ、あの  
悪名高いコミンテルン第六回大会（一九二八年）の「第三期」の  
極左戦線、「社会フアシズム」論に再びうけつがれていくのだが）  
ドイツ革命（一九二三、十）の敗北以降の戦後資本主義の安定  
期を判断出来ず、「一揆主義」に走つた、コミンテルンとスター  
リンは、資本の側の全面的反動攻撃におどろきのさおのき、西歐プ  
ロレタリアートへの信念の喪失のあまり「世界革命」の旗をおろ  
し、「平和共存」と「一國社会主義建設」の新理論を打ち立て、  
同時に「統一戦線」否定から、ズプツプの「統一戦線」へと一八  
〇度転換してしまつたのである。これらのスターリンの大転換は、  
正しかつたのか、根本的に誤つてゐる。彼は、「世界革命」の挫  
折から、次の「世界革命」の間のやむを得ぬ「妥協期」||「安定  
期」||「迂回期」を、絶対化することによつて、マルキシズムを放  
棄したのだ。

一國社会主義の観念は、必然的に克服しなければならぬいろん  
な困難を過少評価し、すでに達成された業績を、一切のマルクス  
主義理論を踏みかじつて、最大に誇張することにならざるを得な  
い。

『同志諸君、これは、エンゲルスが、彼の「共産主義の基本的  
諸原則」の中で打ちたてたプロレタリア革命の綱領である。諸君  
は、この綱領の九〇%がすでに、われわれの革命によつて実現さ  
れたことを理解されるだろう。……エンゲルスは、上にあげた  
綱領をもつプロレタリア革命は、唯、一国内だけでは決して成功  
することは出来ないといつた。だが、事實は、新しい帝國主義の  
条件の下では、このような革命は、その最も基本的な部分におい

ては、たつた一国内だけですでに遂行されたということを示して  
いる。なぜなら、われわれは、我陣に於いて、この綱領の九〇%  
を遂行したからである。』（一九二六年十一月、ソ連共産党十五  
回大会「反対派と党内の情勢」スターリン）  
これは、全くのワソである。このことは、以降、スターリンの  
エビゴネン達によつて、社会主義は完成したとか、社会主義か  
ら共産主義へ移行してゐるとか、マキャベリーの的に合理化されて  
いる。

もちろん、いかに困難であろうと、一國で、権力を獲得したプ  
ロレタリアートは、社会主義建設に全力をかたむけねばならない  
ことは当然である。しかし、「努力せねばならない。」という  
ことは、「努力すれば社会主義建設が出来る。」ことを意味し  
ない。「高度資本主義に於けるプロレタリアート」との結合||國  
際革命に到る「迂回」期に於いては、「一國で権力を獲得したプ  
ロレタリアート」にとつては、全く困難な時期であり、イバラの  
道を進んで、プロレタリア独裁を維持し、社会主義建設の方向に  
全力をつくして進まねばならない。だが、社会主義建設の達成は、  
一国内では実現することは出来ない。国際貿易からの封鎖、軍事  
的干渉、農民の反乱、プロレタリア民主主義の破壊を切り抜ける  
為には、一高度資本主義国のプロレタリアート」との結合||國際  
革命のみがその道を開くことが出来るのである。

又、「一國社会主義」は、最も公然とした、露骨な社会愛國主  
義である。  
世界革命は、ロシア一国内の経済建設の利益の為に犠牲にされ、  
コミンテルンと各國共産党は、世界革命の展望の下に各國で革命

を達成することではなくて、ソ連の防衛と、その為のスターリンの外交政策の為の道具となつた。いや、むしろ、ソ連の防衛は、赤軍と資本主義政府との協定にたより、コミンテルンと各国民衆は、ソ連の日常の外交政策の道具と化してしまつたのである。

「一九二一年、コミンテルン第三回大会で確認されたような世界革命の必然化を具体化させる情勢の後退は、レーニンをして、小農が圧倒的多数として存在する社会での社会主義建設に立向かわしめることとなつた。それは、レーニンから、トロツキーに至る流れでは、やむを得ぬ妥協であり、一つの大きな迂回であつた。トロツキーは、たとえそれが、一年、三年、四〇年の迂回にして、迂回は迂回であり、世界革命への徹底的な、シヤコパン主義的な追求こそが、本道であることをうたへた。レーニンも、又、同様であつた。」（「革命の伝統の火を掲げよう」「烽火」第二〇）

スターリンは、「世界革命への徹底的シヤコパン的な追求」をすてた。

一九二五年にあつて「極左」から「極右」へ転換したスターリンの試練の第一号が来た。一九二六年イギリスプロレタリアートのゼネストであつた。一九二六年のヨーロッパ、プロレタリアートの斗争は、イギリス炭坑労働者の斗争とウィーン武装労働者の革命的蜂起にかけられていたのである。

一九二六年五月三日、ロツクアウトにこたえて立ち上つた、イギリス炭坑労働者の斗争は、六〇〇〇万のイギリスをとらえる巨大なゼネストに発展した。イギリスの全活動は、完全に、労働組合の手におかれていたのである。しかし、最初からこのストライキを

ンとゾハールンは、おくめんもなくそれを行つたのである。

一九二五年から始まつたこのような右翼的路線は、イギリスプロレタリアートの革命的ゼネストとともに、第二次中国革命を決定的な皆滅の破壊に導いた。

コミンテルン第二回大会によつて採択されたテーゼの中で、レーニンは「後進国に於けるブルジョア民主主義的な解放運動を共産主義の衣でつつもうとする企てに対して、断固たる斗争を遂行しなければならない。」「共産主義インターナショナルは、植民地ならびに後進国の民主的ブルジョアジとの一時的な同盟にはいるべきである。だが、それと融合してはならないし、プロレタリア運動の独立的性格を絶対的に保持しなければならない。たとえそれが幼児の形態であるとしても」と断言した。一九二五年、上海ゼネストを契機に第二次中国革命は開始された。スターリンとコミンテルンの中国政策は、「四民プロック」（労働者、農民、都市プロレタリア、民族ブルジョアジの同盟）の上に樹てられた。

「中国の（蔣介石）革命軍は、中国労働者と農民の自己解放のための（革命的）斗争の最も重要な要素である。」（「革命的な青年学生、青年労働者、青年農民——これらは、七里靴をもつて革命を前進させることのできる力である——もしそれが国民党のイデオロギーのもとに服するならば」）（「中国革命の展望」スターリン）こうして「四民プロック」を守るために、中国共産党は、無条件で国民党に加入し、その規律に服し、内部での活動を禁じられた。

そして、ブルジョアジと將軍を刺激して、おどろかさないうちに、モスクワの特別指令で、労働運動は共産党によつて制限さ

「純経済斗争」と声明して、ゼネストの絞殺をはかつていたイギリス労働組合総評議会の右翼的指導部は、九日にわたるストライキのち、ブルジョアジの圧迫に屈して、五月十二日にゼネストの停止を指令した。しかも労働組合の國際的統一の促進」を目的にうたつた英露委員会を通して、イギリスプロレタリアートへの直接的妥協と共同斗争を行つて、ソヴェトプロレタリア政府は、ストライキの全産業への拡大と、労働者大衆の闘争に非難の声をあけていた裏切り幹部と斗つて出来なかつたばかりか、このような、裏切りのちでさえも、右翼的指導部に支持を与え、七カ月にわたつてストライキを斗つた炭坑労働者の革命的斗争をも悲劇的な敗北にみちびいたのであつた。

のみならず、二七年四月のベルリン会議に於いては、ソヴェト政府は、労働組合評議会こそが、イギリスプロレタリアートの「唯一の代表者」たることを承認し、イギリス労働組合運動への不干渉を誓約したのである。

まさに、これらの誤りの根源は、スターリンの民族共産主義と、右翼的ズブズブの「統一戦線」のあらわれである。このような、スターリンとゾハールンの行動は、「イギリス労働者を裏切り、二六年のゼネストを殺した労働組合幹部の意志に反するストライキ労働者大衆には、今後一切支持を与えない」ということを宣言するものである。（トロツキー）

改良主義者が、前へと進むときには、何時でも、一時的協約は、彼らとなされてよい。しかし、運動の発展におどろいて、彼らが叛逆を行うときに彼らとプロックを維持することは、叛逆者の犯罪的黙認又は裏切りをゲエールでおおろことに等しい。スターリ

れ、農民運動は弾圧された。

スターリンとその現地代表ボロジンによつて完全に武装解除された「第二中国革命」は、再三再四の蔣介石國民黨の血のクーデターの中で潰え去つた。

「第二中国革命」を敗北させたスターリンとコミンテルン指導は、一九二七年八月、この極右的政策から、突然最も極左的政策に切り換え、二七年十二月、一片の電報指令によつて広東武装蜂起を命令し、惨虐な敗北によつて数千の広東プロレタリアートを血の海に溺らせた。

戦後『第三期』の極左戦術が始まつたのである。

コミンテルン第六回大会（一九二八年八月—九月）では、この極左への転換が押し進められた。

資本主義世界の「全般的な根本的危機は……ますます深刻なものとなり、」「植民地でも本國でも、新しい革命的高揚の前夜」にあり、大衆の中で社会民主党の權威が失墜し「「ここでもこの分野でも、労働者大衆の左翼化と革命的な活気との明らかなる兆候が見られる」（スターリン）

一九二五年以降の右翼的偏尚時代にこつそりしまい込んでいた「社会ファシズム論」が復活され、全戦術の根底となつた。「社会民主主義的ブルジョア労働党」に対して、いよいよ斗争を尖锐化しなければならぬ。「社会民主主義は社会ファシズムである。」「社会ファシヨ的労働組合幹部との統一戦線」は「裏切りだ」とされ、その代りに、最後通謀の一下からの統一戦線が、プロフィンテルンの「赤色組合主義」が公然と露骨に提起された。

一九二五―二七年の右翼的ズプズの「統一戦線」から「社会ファシズム論」による事実上の「統一戦線」の拒否に転換した。同時に、世界革命戦略の放棄と、「一国社会主義論」が確立され、「二段階革命戦略」と「一国社会主義」の綱領が、最終的に確立された。一九一七年レーニンが自ら廃棄した「労働者と農民の民主的独裁」のスローガンが再びもち込まれた。

ニューヨーク株式市場の崩壊にはじまった二九年の大恐慌は、全世界をふるえあがらせた。資本主義のタガは、一つ一つはずれていった。「国際情勢のカギは、ドイツ」にあつた。第一の決戦は、ドイツで斗われた。二〇世紀における世界革命の第二の波が来たのである。

一九二三年、サクセン蜂起にタール、ハイマー、ブランドラーなどの右翼日和見主義的戦術によつて敗北して以来、ドイツ共産党は、彼らを追放することによつて逆に左への偏向を生み、セクト主義的傾向を一直して保持してきたのであつたが、一九二四年コミンテルン五回大会で端的にあらえられ、二八年の六回大会で確定された、「社会ファシズム論」「下からの統一論」によつて補強され、当時、セクト主義、最後通牒主義のとりこになつていた。「トロツキーは、共産党とリプクネヒトや、ローザの虐殺者どもとの、そしてそれ以上に、パーベン政府が労働者連を押しさせるためにそのままの地位に残してあるツェルギーベル氏や警察長官どもとの統一行動を、大真目になつて求めている。トロツキーは再三再四論文によつて、ドイツ共産党と社会民主党の幹部と幹部との交渉を要求して労働者をわきへそらせようといふ企てた。」(テイルマン、一九三二年九月ECCI第十二回総会の

トライキ斗争が展開され、九月一日から一日まで二十七日間に六九九のストがあり十万人の労働者が斗つた。

そして一月三日にはベルリンの交通労働者が五日間のストライキに突入した。孤立したストは流血の弾圧に屈したが、危機の一層の深化は明白であつた。いたるところで武器をつた労働者とナチの青年行動隊との武力斗争がはじまつていた。一九三一年四月から、三二年四月までのブリューニング内閣、四月から十一月までのパーメン内閣、十一月から三三年一月三十一日ヒットラー政権出現までのシエライヒャー内閣は、すべてこの歴史的決戦の前の不安動揺を極めたボナパルティスト的独裁政権であつた。それはヒットラー・クーデターの切迫をつけるものであつたが、またこの企圖を阻止し紛争するための準備の極めて貴重な時がわずかながら残されていることを示すものでもあつた。

ところが、ドイツ共産党は、これらのボナパルティスト内閣を、これこそファシスト政権であるとか、こんどこそは、いよいよ純粋なファシスト独裁であるといひ、それを否定するものは全て裏切りの日和見主義者であるといひ、それを否定するものは全て裏切りの日和見主義者であるといひ、ファシズムがファシストクーデターで次々に倒されていくといひ、しかも主要な敵は社会ファシストであり、又、別にヒットラー・ファシズムがあるというように、労働大衆の頭を完全に混乱させ、真のファシストクーデターの危険から労働大衆の目をそらせてしまつた。

だが、事態の緊迫化に驚いた共産党と社会民主党の下部の組織では、指導部の方針を無視して、「反ファシスト斗争委員会」を結成した。この動きはたちまち、両党の労働者大衆の間に反響を見出したが、共産党指導部は、党の規律にかけて、これを禁止

演説「共産主義インターナショナル」誌、十七、十八号、一三二巻)「トロツキーは、そのパンフレットの中に「ナチズムは、どうして破ることが出来るか?」という問に對し、相もかわらず、たつた一つの答えを与えている。いわく、「ドイツ共産党は社会民主党と協定しなければならぬ」と。トロツキーは、この協定を結ぶことこそ、ファシストに對してドイツ労働者階級を救う唯一の道であると考へている。共産党は、社会民主党と協定を結ぶのでなかつたら、ドイツ労働階級は、十年、二十年の間絶望である」といふ。これこそ、完全に破滅したファシスト、反革命家の理論である。

この理論こそは、トロツキーが反革命宣伝にさされたこと数年來にでつち上げた理論の内でも、最も悪質な、最も危険な、最も犯罪的な理論である。」(一九三二年九月、ECCI第十二回総会のテイルマンの演説)と。トロツキーの共産党と社会民主党は、統一戦線を組め、という警鐘は完全に無視され、ファシスト反革命とされた。

そして又、一九三一年十月、ドイツ共産党の三巨頭の一人であるレンメンは、国会に於て、「ひとたび彼ら(ファシスト)が政権を掌握したら、プロレタリアートの統一戦線はたちまち樹立されて、あらゆるものを掃蕩して去るであらう。……われわれは、これらのファシスト紳士諸君を恐れはしない。彼ら(ファシスト)は、他のどんな政府よりも早く逃げだしてしまふであらう。」と演説した。

一九三二年四月、プロシア選挙でナチは一躍第一党になつた。九月には、パーベン・シュライヒャの緊急令に對して、激しいス

してしまつた。

こうしてコミンテルンは、世界の運命が決せられつつあつたドイツに於いて、何百万のプロレタリアートの大衆的組織との「統一戦線」を執拗に拒否し、全力をつくして妨害し禁止した。

一九三二年七月の国会選挙にヒットラーのナチスは、一三七〇万票獲得(社民党七〇万票、共産党六三〇万票)し、二三〇名の国会議員を出したが、これはナチ党の絶頂であつて、同年十一月の選挙には、議席を一九六名に減した。共産党は、これを歡呼したが、トロツキーは、今こそヒットラー・クーデターが切迫したのだと訴へた。「こうしたデマゴギー運動(ファシズム)は、一瞬も一点に止まることは、出来ない。停止は、分解と崩潰を意味する。拡大のテンポが、ゆるむ時こそ、ヒットラー・クーデターの危険の瞬間である。おそろくは、パーペンを含む連合政府の合法的スクリーンによつて政権を得る可能性がある。だが、一旦政権を握つたら、国家権力をもつて、ファシスト暴徒を即刻武装させ、労働階級への攻撃に投ずるであらう。ヒットラーが政権を握つたという急報をうけとつた瞬間、ドイツプロレタリアートを救援するため、赤軍は即刻動員されねばならない」と。

悲しいかな、トロツキーの「予言」は、的中した。一九三三年一月三十一日、ヒットラーは、パーペンを副首相とする連立政府によつて、政権を握つた。ドイツプロレタリアートは、騒然たる内に、決定的指令のくだるのを待ちあぐんだ。西歐の労働者階級の眼は、クレムリンと赤軍に向けられた。英仏をはじめ各国の政府とブルジョアジーは、息をのんで動かなかつた。その時スターリンは、ベルリン駐在の大使を通して、ソ連は、ドイツの内政に

一切干渉しないと保証した。まさにこれは、開始されようとしていた労働者階級に対する弾圧と虐殺を思うぞんぶんとフアンストに言つてやつたことを意味した。

ヒットラーは、三月一日、国会議事堂を焼き打ち、テールマンはじめ共産党の指導部を逮捕した。

三月五日、西欧共産党は、ろうばいして、「全世界の労働者へ」のアピールを発表、今迄の「社会ファシズム」や「下からの統一戦線」には一言もふれず、各国共産党に対し、「社会民主党の中央委員会」に「統一戦線」を申し込むべきことを指令、「統一戦線」が実現した場合には、「共同活動の間は、社会民主主義団体に對する一切の攻撃を放棄する。」ことを指示した。これは、レーニン、トロツキーの「統一戦線」の原則（コミンテルン、三、四回大会）を逆の仕方、即ち、それまでの極左的セクト主義から右翼的日和見主義の方向で放棄するものであった。

（我々は、ここに、来るべき右翼的日和見主義「人民戦線」の出発点を見る事が出来るのだが。）

もはや、混乱の極に達した共産党は、決定的な決戦の指令を行うことは出来なかつた。五月一日ヒットラーの攻撃は、徹底的に展開された。一切の反ファシズム的分子は、襲撃され、逮捕され、拷問され、撲殺され、共産党、社会民主党の指導機関は破壊された。

こうした間にも、コミンテルンは、ドイツ共産党の非合法活動の発展と労働者の革命化をしきりに善言を言ひ、ドイツ労働者の革命的蜂起は、今や切迫したと盛んにわめきたて、敗北を否定し、ドイツプロレタリアートを冒険的な盲動的一揆主義にかり

たてた。「フアンストは一刻だけの天下である。」「明日でなかつたなら、今から二、三カ月の内に反乱を準備する用意がある。」「とひつきりなしくりかえした。指導部の政治的自己保存のため

マルクス、エンゲルスの伝統と、最高の組織を誇り、窮蹙のよろに鍛えられた団結的精神をもち、あらゆる点に於いて、ヨーロッパ最強のドイツプロレタリアートは、こうして、トロツキーがはじめ予想した内乱が起らなかつたばかりか、その組織的訓練の故に、遂に最後まで、自然発生的な抵抗を完全に一つも試みずに終つたのである。三〇年代の世界革命のカギ、ドイツプロレタリアートの階級斗争の展開とその壮大な敗北は、彼ら指導部（スターリン主義）に、この認識と決意が全く欠けていたことを、数百万の革命的プロレタリアートの血の犠牲によつて暴露した。

三〇年代の世界革命の「第一の決戦」は、プロレタリアートの完敗に終つた。

三〇年代の「資本主義の死の苦悶」は、フランスに「第二の決戦」の舞台を作り出した。「現代革命」の花形、人民戦線のフランスである。

一九三四年、二九年恐慌の波及の比較的浅かつたフランスでも、資本制生産は、崩壊の一途をたどり、危機は成熟した。

農民は、流通機構を失い、大独占企業の「生産コスト下げ」は、労働者の生活水準を極度に悪化させた。プロレタリアートの斗争は熾烈化し、中間の絶望と暴力化は始まつた。三三年以來、右翼は、急速に台頭し、「アクションフランセーズ」「火の十字団」は、武装して、市街に登場し出した。もはや、権力を失

つた、社会党と急進社会党と中心とする、過渡的中間的政府は、内閣の交替ばかりをやつていた。

パリ市内では、「アクションフランセーズ」「火の十字団」と「社会ファシスト」への「尖鋭な斗争」を至上命令としていた。

「共産党」のデモのうずが、迫り来る決戦をつけるかの機であつた。二月六日ガラデイエの信任動議が議会で審議されていくとき、数方の右翼ファシストのデモが議事堂前に結集し、夜になつて暴動化してなぐり込んだ。二〇〇人の暴徒と一人の警官が殺された。このデモには少数の共産党員も参加していた。共産党は、「ガラデイエの人殺し」と攻撃した。ガラデイエは、翌日辞職した。

「火の十字団」は「最初の目的は達成された」と公言した。

多くの労働者は、「二月六日事件」をファシストの暴動と見て、斗争の叫びを上げていた。共産党は「社会ファシズム論」の放棄を迫られた。二月七日に社会党は二月十二日ゼネストを呼びかけた。共産党は九日になつて受け入れた。二月十二日空前のゼネストとデモが展開された。「人民戦線」戦術は著一步を踏んだ。

三四年七月社会共の「行動統一協定」が結ばれた。コミンテルンは、モスクワ外交政策の変化（ドイツとの絶縁とフランスへの接近）にもなつて七月の執行委員会幹部会でこの戦術にはじめて承認を与えた。そして、コミンテルンは、

一九三五年五月には、フランスの地方選挙の直前に、フランスのファシスト組織「火の十字団」の一員であつたラヴアル外相の突然の訪ソを受け入れて「仏ソ相互援助条約」を締結し、フランス独占資本の代弁者、「フランダン内閣」に承認と支持を与えたの

であつた。

そればかりでなく、英伊間の協定を前提としてのフランスからの軍事援助をひきかえに、無条件的なソヴェト側の軍事援助の責任を約束し、フランス共産党にフランスブルジョアジーへの接近を強迫したのである。「反ドイツ反ファシズム民主主義統一戦線」（「人民戦線」それは革命ではない。と。）が、それである。

一方、フランス国内では、トレイズを中心として、三五年七月には急進社会党左派までを含む「反ファシズム人民戦線」の結成に成功した。この年の革命記念日七月十四日、パステューエ広場のデモは四〇万の参加する空前のものとなつた。「人民戦線」は、今や人々の熱狂するところのものとなつた。三六年五月の選挙は右左の決戦であつた。「人民戦線」派は、「人民戦線綱領」を掲げて斗つた。空前の勝利であつた。

社会党一四六（④四五）共産党七二（④六二）急進社会党（④四二）など、「人民戦線」派は絶対多数を獲得した。六月四日、レオン、ブルムを首班とする世界最初の「人民戦線政府」が成立した。時あたかもフランス資本主義は最大の危機に直面していた。かかる危険を突破するにどの様な「指導」「意識性」がなされたのか。

トレイズ、フランス共産党書記長は、「反ファシズム統一戦線の確立に全力をつくそう。」「一九三四年六月二十六日、で次の様に言つた。

「労働者農民の政府によつて、我々は次の綱領を実現する。」「ソヴェトすなわち、労働兵士委員会による民主主義」「地区、地方ソヴェトに眞の権力を与える。」「資本家から工場、銀行、

大不動産所有、独占販売機構を無償で没収する。」「大土地所有者の支配を打ち倒す、我々は彼らの土地を無償で没収し、勤労農民に引き渡す。」「七時間労働制、失業をなくす。」「我々は、権力を獲得する。権力獲得は、統一戦線を不断に広げ、一戦一戦と闘いを進め、遂には、武装蜂起を起すことよつて成し遂げらる。』

「我々は権力を獲得する。それは、我々の斗争を組織し、(工場、事務所、停車場、村、兵官などに) 未来のソヴェットの萌芽である数多くの統一戦線委員会を作り出すことよつて。」「我々は、権力を獲得する。それは、蜂起の機関であるソヴェットの内部にプロレタリアートの軍隊と都市農村の同盟軍を固く結集する事によつてなされる。』と。これらは、もちろん、一般的には正しい。一般的すぎるほど。しかし、他方、フアシスト「アクションフランセーズ」「火の十字団」は着々武装を増大させていた。プロレタリアートは、一刻のゆる余もなく「蜂起の機関であるソヴェット」に「権力」を移し、「自衛の機関、労働者義勇軍」を創設し、危機の突破にそなえることが、まず第一の任務である。ところが、トレーズは、一九三四年七月の「行動統一協定」に於いて、「この共通の行動に際して両党は、これに忠実なる組織又は斗士に關する一切の攻撃又は、批判は差控える。』と宣言して批判の自由を放棄した。『同盟者に対する批判の完全な自由の維持』というコミンテルン第三、四回のレーニン、トロツキーの「統一戦線」の原則は放棄された。プロレタリアートは改良主義へ数歩進んだ。

三六年一月、トレーズによつては、「資本主義の枠内で実現出来る最低綱領」と特徴づけられた人民戦線の綱領は、フアシスト団体の解散を含む八項目の「自由のヨイゴ」及び、国連を通じての集団安全保障、非武装平和への努力、軍縮、秘密外交の抑制、仏ソ条約同様のもの各國への拡大など七項目の「平和のヨイゴ」からなる政治的要求とともに、次の様な経済的要求をかかげた。『週労働時間の短縮』『都市農村に於ける大規模な公共土木事業の即時実施』『農産物価格の修正』『農業共同組合の援助』『フランス銀行の国営化』『軍需産業の国営化』『資本輸出の統制』等。これらの「経済民主化」的諸方策は、これらの社会主義者が危機の根源である金融独占資本主義の極点に達した諸矛盾をどの方向で解決するかという見通しを全く欠いており、その場しのぎの社会政策を羅列したにすぎないことをしめしている。

明らかに、この期のフランス資本主義は、ブルジョア國家権力の再生産過程への直接介入による國家独占資本主義か、あるいは、全社会的な計画的意識の生産によつて解放するか、以外に脱出の道は、ありえないことを示していた。「人民戦線綱領」は勝利したプロレタリア権力が当初に採用すべき過渡期の経済政策の萌芽をも含んでいた。だが、全社会的な計画的意識の生産による解放は、唯、プロレタリア独裁の下でのみ可能である。

「人民戦線政府」内で、「同盟者に対する批判の完全な自由の維持(コミンテルン第三、四回「統一戦線」)をし、一九三四年六月二六日トレーズが提起した「綱領」をプロレタリアートの中に浸透させ、プロレタリアートの強力な大衆行動を背景に、資本家に対する一層断固とした方策をもつていどみ、この「政府」の階級的性格を「反フアシズム」の國民的民主的なものでなく、正し

く、プロレタリア的なものとして鮮明に打ち出し、「ソヴェット」武装した「労働兵士委員会」に「権力」を移し、「武装蜂起」に備える事が「ジョコバン派」への道であつたらう。ブルム内閣は、労働者大衆の斗争の圧力のもとで「人民戦線綱領」を実行に移して行つた。『四十時間労働法の制定』『小麦統制局の設置』『フランス銀行の改組』『軍需工場の国有化』等。しかし、このような「人民戦線綱領」も限界に來ることは目に見えていた。なぜなら、フランス共産党は、プロレタリアートの前進的な革命的な斗争をおさえまわつていたのである。

フランスプロレタリアートは、搾取の強化と相次ぐ弾圧、フアシストの暗躍に斗争への決意を固め、「人民戦線綱領」の実現を要求して果敢な斗争に立上つた。一九三六年六月、フランス六〇〇万の労働者がゼネストにたち上つた。労働者は「工場占拠」を行つた。「工場占拠」は、「ソヴェット」の萌芽『「ストライキ委員会」』『「行動委員会」(「人民戦線委員会」)が行つていた。

『作業場から作業場へ、工場から工場へ、地区から地区へ、都市から都市へと、「行動委員会」(「ストライキ委員会」)は相互に連絡を確保し、都市毎に、産業毎に、区域毎に、協議会を招集し、最後にはフランスの全行動委員会の大会を開け。』『「人民戦線」と行動委員会「トロツキー」』『「二〇〇家族」(ブルジョアツ)の参謀本部に対して、プロレタリア革命の参謀本部と作戦を要する。』『「フランスの革命は始まつた」トロツキー』

「工場占拠」に突入したパリプロレタリアートは、革命の進むべき第一段階を本能的に知つた。だが、その時、すでに「ジョロンド派」に落ち下つたトレーズは、

「人民戦線は秩序であり、大衆によつて課される社会的平和であり繁栄への復帰である。』(「人民の子」トレーズ)として、パリ労働者の手を抑えたのである。「ソヴェットの萌芽」ストライキ委員会「行動委員会」による「工場占拠」は、『結局のところ「二〇〇家族」の要求の下に社会党員である内務大臣は、元老院に於いて、ストライキ参加者による工場、店舗、農園の占拠は許さない』と宣言された。「人民戦線政府」は、自らの足を一本たたき切つた。そして、そのことは、もう一本の足もつかれはてしまふことを意味していた。

「人民戦線政府」は、國民購買力の増加によつて経済復興をなし、均衡財政を維持しようとした。だが、それは急速な物価騰貴で挫折した。フランスの価値下落にブルジョアツは資本逃避をもつて応えた。フランス銀行の金保有高は、急減し、三六年九月には、国防上最低限度とされた五〇〇億フランに接近した。人民戦線は壁に突き当たつていた。

突破口は二つに一つであつた。第一の道は、「人民戦線政府」内で「同盟者に対する批判の完全な自由の維持」をし、一九三四年六月二六日、共産党の提起した「綱領」を情勢との関連でプロレタリアートの中に浸透させ、プロレタリアートの「工場占拠」と「農地占拠」を指導し、「ストライキ委員会」を「労働者代表ソヴェット」にまで組織し「二〇〇家族」の参謀本部に対して、武装したプロレタリアートの参謀本部を対置させる。

そして、「人民戦線」の階級的性格を「反フアシズム」の國民的民主的なものとして鮮明に打ち出し、ブルジョアツとの決戦

をいどむ。

第二の道は、嚴重な為替管理の実施が平価切下げであつたが、前者はフランスでは不可能であり、結局平価切下げのみが残された道であつた。だが、このことは、フランスが資本主義の道に決定的に帰ることを意味した。社会民主主義は道を見失つた。共産党は、第一の道も出来ず、第二の道も出来ず、ドイツでの戦後インフレの経験にもとづいて、平価切下げに絶対反対したにとどまつた。「人民戦線」は、道を見失つた。道を見失つたことは、資本主義への急速な決定的な回帰を意味していた。

九月に行なつた臆病な平価切下げはなんの効果もたらさなかつた。その間に軍事費、公共土木事業などによる財政赤字は激増し、財政危機が迫つた。

三十七年三月五日ブルム内閣は遂に、「人民戦線綱領」の一時「休止」を宣言した。ブルジョアジーの反撃によつて、恐慌状態に入つた六月ブルムは退陣した。

その後、シヨータン内閣（急進社会党）第二ブルム内閣と、第二、第三次と「人民戦線政府」が続いたが、その行き先きは、国家独占資本主義への推転と、第二次帝国主義戦争へ人民をかりたてたにすぎなかつた。三十八年四月のダラディエ内閣（急進社会党）の成立と、一〇月一日の急進社会党の人民戦線正式離脱によつて人民戦線は形式的にも崩壊した。プロレタリアートは、三〇年代の世界革命の第二の決戦にも敗れた。

この「旧来の多くの立場を海中に投じて」実現された「人民戦線戦術」は、それでは、「新しく天から降つて来たのか、地からわいて来たもの」なのだろうか。

見えた。ところが、王権を打倒する過程で、長老教会議会の軍隊は、新しい勢力に変化していつた。新しい勢力とは、独立教会派ブルジョア農民であつた。彼らは新國家機関「兵士、士官代表評議会」（「扇動者」）を創設した。独立教会派は、長老教会派ブルジョアジーに対決した。

クロムウエルに指導されたブルジョア農民の代表「士官代表評議会」の独立教会派軍隊と、ブルジョアジーの長老教会議会の軍隊は、戦闘した。第二の二重政権が生まれた。クロムウエルのブルジョア軍が勝つた。クロムウエルの独裁が確立した。だが、その斗争の過程で新たな革命的部隊が生まれていつた。ブルジョアジーの最下層軍隊の下層階級は、平等論者（革命の最左翼派）の指導のもとに、クロムウエル（ブルジョア上層層軍隊の上層）に決戦しようとした。だが、この第三の二重政権は、発展しなかつた。なぜなら、革命の最左翼、平等論者は、次の歴史の方向を持ち得なかつた。歴史は、クロムウエルで限界を示していた。クロムウエルは、間もなく、平等論者を一掃した。フランス大革命は、民衆のバスチーユ占領後、国民会議に布陣したブルジョアジーのバリと僧侶、官僚、軍隊の上層部に依拠した旧王権のコブレツとの二重政権を生み出した。ここからの出口は、ヨーロッパの反動諸政権によるブルジョアの代表的廃棄か、又は、王政に対するギロチンのみであつた。パリイとコブレツは、決戦せざるを得なかつた。

だが、戦争とギロチンにいたるさき新しい革命勢力が益壞した。第三階級の最下層市民のバリ、コミュニケーションと、その同盟者農民の判乱である。

「三三年のドイツ革命」の敗北から、共産主義者が、全く心を新たに人れかえて、歴史に立ち向つたものだつたのだろうか。「現代マルクス主義者」が言う様に「旧来の多くの立場を海中に投じて」スターリンのドグマから大衆を解放し、「平和的議会的移行」「新しい民主主義」「ファシズムか民主主義」「新しい統一戦線」をそして「共産主義者は祖国を愛する」ことをマルクス主義の輝かしい一ページに書き加えるべきなのであろうか。我々は、これらの問題を慎重に検討しなければならぬ。なぜなら、「現代マルクス主義」理論は、更に、「武装革命の否定」「ソヴェト型革命の否定」「二重権力思想は古い」「新しい多数派」「巨大独占体の民主的管理及び国有化」と、花々しく展開されているからである。これらの問題提起の根源は、なによりも、「二重権力」思想の理解の変化に根ざしているといわれている。それ故、「二重権力」思想の歴史的総括を前提として「新しい問題」提起にとりかからねばならぬ。

まず、十七世紀以降「人民戦線」に致する主要な革命を概観して見よう。

十七世紀のイギリスの革命は、内乱の形式による激烈な過渡期をもつた。二重政権の明白な実例を示している。

特権階級、貴族監督に依拠していた王権に、長老教会議会の支持されたブルジョアジー、郷土は、対決した。王権は、オックスフォードに軍隊をかまえた。ブルジョアジーは、ロンドンに軍隊をかまえた。公然たる内乱が始まつた。ブルジョアジーは勝利した。王はとらえられて運命を待つた。

長老教会議会議派ブルジョアジーは、単独支配を確得したように

最初パリ諸区は依然として尊敬すべきブルジョアジーの支配するコミュニケーションに対決した。一七九二年八月十日、暴動によつてパリ諸区（第三階級の最下層市民）は、コミュニケーションの支配権を獲得した。この革命的コミュニケーションは、立法議会に反対し、遂に国民議会に對抗した。

なるほど、結局ジャコバン派の独裁は、国民議会の独裁と結合する。だが、一体どんな国民議会議と、昨日までテロで支配していたジロンド党を一掃した後の国民議会議——縮小され、新しい社会的力の支配に適合させられた国民議会議である。この様な二重政権を通じてフランス革命は、その頂点に達した。だが、歴史に忠実であり、徹底した戦術で未来を代表したジャコバン派も、未来を代表するパリのプロレタリアに敵対した。スト権の禁止と結社の自由を禁止した。ジャコバンは自らの生命を断つた。

一九一七年のロシア革命は、どの様なものだったのか。ロシアブルジョアジーは、第一次大戦中ツァー、ラスプーチンと抗争し、あるいは協力しつつ、政治権力を強化していた。

それは、帝政の敗北に乗じながら、ゼムストヴオ連盟や、市会連盟、軍事産業委員会によつて、老大な権力を集中した。それは、莫大な国家資源と、経済的支配権を独立に握つていて、本質的には二重政権であつた。

それ故に、二月の革命において、帝政は、内部分解——官廷革命を起し、ブルジョアジーに権力を自発的に「譲渡」した。一九一七年二月、リヴオフは、ツァーの手からでなく、ケレンスキー、チハイゼ、スハノフの手から「全権力を受け取つた。しかし、彼らが、それを受け取つてから、二日目には、早くも新しい二重政

権がはじまつていた。労働者階級の非公式な、政府、「ソヴエト」が生まれた。ブルジョアジーの臨時政府と労働者階級のソヴエトの対立がはじまつた。

だが、この二重政權は、特異であつた。それは、権力を目指しての階級間の斗争の結果としてではなく、ある階級による、他の階級への権力の自発的「譲渡」の結果として創設されたものである。これは、レーニンが一九〇六年述べた様に「ロシアに於ける革命は、ブルジョア革命ではない。なぜならブルジョアジーは、ロシアの現在の革命運動の推進力を構成していない。」（「全集」一巻四二五）といわれるものであつた。社会主義革命が始まつた。ヴォルシエヴィキは、権力をソヴエトに移し、憲法制定議會をブルジョアジーの暴露に利用し、あるいは、それ自身に敵対した。武装した蜂起の機關ソヴエトにより十月は準備された。世界革命の突破口が開かれた。この波は、最初にドイツの海岸をおそつた。高麗資本主義國に革命が起つた。一九一八年十月二十日英軍との交戦のための出撃命令拒否にはじまつたウイリウムスハーペンの水兵の判乱は、十一月三日キールに帰港した第六艦隊の水兵によるデモ、武装衝突水兵評議會（レーテ）の成立（四日）と発展し、キールの判乱は、数日にして全國へ波及、ほとんどすべての港町に労働評議會が樹立されて行つた。地方、ハプスブルグ帝國の崩壊から連合軍の侵入の直接の脅威にさらされた中部ドイツは、社会民主党、独立社会民主党指導下に行われた反戦デモが武装デモに発展し、遂に、十一月七日には、ミュンヘンに労働評議會が樹立された。ベルリン革命が各地方の蜂起を一つの革命として完成するであらう。

十一月から十二月にかけての一連の民主共和的諸政策、休戦の締結とともに「人民委員政府」と「労働評議會執行委員會」の間の締結により、実権は完全に「人民委員政府」に移行せられていった。

十二月十六日、四八八名の代表者で開かれた「ドイツ全國労働評議會」(ここには、スバルタクスは十名しか入りえずリブクネヒト、ローザは選出されなかつた)は、圧倒的多数で労働評議會を廃棄し、國民議會選挙を一月十九日に行ふことを決定した。十一月九日の革命の過程で生み出され、革命派が、ロシアに於けるソヴエト、と同様に革命の権力しようとした。労働評議會は、こうして、自らの手で命を断つた。

独立社会民主党右派の「カウツキーとフィールファーディング、オーストリアのマックス、アドラーは、デモクラシーとソヴエト制度を「結合」し、「労働評議會」もこの構成中に包含すべきである」と提唱した。それは、陰然ないし、公然の内乱を國家制度の構成部分にすることを意味したのである。これ以上に奇妙なユートピアを想像することが出来るだろうか？（「ロシア革命史」トロツキー）

ところが、想像するだけでなく、実行しようとしたものがある。トレーズであり、トリアツチ、デイトロフ、スターリンであつた。それは、「人民戦線戦術」という名がつけられた。それは、不可避免的に敗北の運命をになつていた。では、なぜ敗北は不可避免的なのか。敗北の中から何を生み出したのか。

トレーズ、トリアツチ、デイトロフ、スターリン等は、一九一八年のドイツ革命に於けるカウツキー（独立社民右派）である

九日ベルリンは蜂起した。革命の幕は切つて落された。皇帝は退位した。十日、ツイルクス、ブツシュで開かれた第二回「ベルリン労働評議會」大会は、革命のこの最も重大な問題を決定する為が開かれた。すなわち、ブルジョア独裁（敗北）へあとつさりするか、プロレタリア独裁へ断固として、前進するかの分れ目であつた。

シャイデマンの共和國宣言以来革命の阻止を主要な任務とするに至つた社会民主党は、まず、独立社会民主党との連立政府（「社会主義者」による政府として）の樹立によつて労働評議會から権力を奪ひ取ることを第一の目的とした。

革命派「革命的オプロイテ」（独立社会民主党左派とスバルタクス）は、実権を労働評議會におき、政府を監督せよ」と主張した。「一人のシャイデマンも政府においてはならない。……君達を四年間も裏切りつづけてきた連中と手をつなぐことは出来ない。資本主義とその手先きどもを倒せよ」十日の「ローテ、フアーネ」（スバルタクスの機関誌）はこう叫びかけた。

だが、五時に開会されたベルリン労働評議會大会は、すでに社会民主党の優勢を示していた。連合政府（「社会主義者」の政府）に実権を渡せと主張する社会民主党が勝利した。

社会民主党三名、独立社会民主党三名、計六名による「人民代表委員政府」が設立され、一方実権を握るべき「労働評議會執行委員會」を、革命的オプロイテで独占しようという革命派の意図は敗れ、革命的オプロイテ六名、社会民主党八名、兵士評議會四名（その大半は、社会民主党派）計二十四名の構成となり、二重権力はいずれも、社会民主党の実権の下におかれた。

と言つた。

いや、一九一八年のカウツキーだけでなく、歴史上革命は、こういう人物を常に生み出して来た。フランス大革命は、シロンド派を生み出した。彼らブルジョアジーは、バスチュ占領以降のブルジョアの「パルクミューン」を基礎にした「國民會議」に権力をもつた。だが彼らは、一七九二年八月十日、革命的な第三階級の最下層市民の蜂起によつて敗れた。革命的第三階級の最下層市民「ジャコバン派」は、新しい革命的「パルクミューン」に権力を移し、立法議會、國民議會に反対した。だが、國民會議にジャコバン派は参加した。二つの上流身分に対して圧倒的多数をもつて。

「その結果は、どうだつたか？ ヴァンデ地方の反乱、亡命、將軍達の裏切り、僧侶の陰謀、五〇万に及ぶ地方行政区の判乱、封建的ヨーロッパ連合軍の進攻」（「國民議會か評議會政府か」ローザ、選集四巻）であつたのだ。

又、ロシア革命に於けるメンシエヴィキは、ソヴエトを基礎にしながら國民議會による政府に権力を移す。それが出来ない間は、連立臨時政府をもつて代行しようとした。だが、メンシエヴィキは、國民議會をボイコットし、「全権力をソヴエト」に移すヴォルシエヴィキに打倒された。ヴォルシエヴィキは「権力」を獲得した。

ロシア革命に於けるヴォルシエヴィキ右派、シノビエフも、シロンド派である。十月革命の二週間前に、彼らは、次の様に言つた。「即時武装蜂起を宣言する事は、党の運命はもとより、ロシアと國際革命の運命をも唯、一回のサイコロふりにかけるものだ。」選挙に対する、我党の見通しは、すばらしい。ボルシエヴィキ

が、正しい戦術をもつてすれば、憲法制定議会に於て三分の二又は、それ以上の議席を取れる。」「我々の社会的存在の中に舟底を深く下したソヴェトを破壊することは、不可能である。憲法制定議会自身は、その革命的活動をたゞソヴェトの上のみに備くことが出来る。憲法制定議会がソヴェト―それは、我々が目指す国家機関の結合型である。」「（現情勢について）一九一七年十月十一日）この様な、蜂起反対、憲法制定議会の多数派をノといつた位きことは、十月二十五日のペトログラード蜂起で吹き飛んだ。

吹き飛んだはずのメンシエヴィキやシノビエフ、カメネフは、一九一八年のドイツで生きかえつた。シャイデマン（社会民主党）やカウツキー、ヒルファディング（独立社民右派）として。このよ様な、腐り切つたシロンド派に対して、ローザ・ルクセンブルグ、カール・リブクネヒトのジャコバン派（スパルタクス）は、「全権力を労兵評議会へ」と叫んだ。だが、ローザ、リブクネヒトは敗北した。

十一月十日、ベルリン労兵評議大会は次の様に決定した。社民党三名と、独立社民三名による人民代表委員会政府（「社会主義者」の政府）と、オプロイテ六名、社民六、兵士評議会四（大半は社民）による労兵評議会執行委員会の設置。これらは、まさにカウツキーの言う、「デモクラシーとソヴェト制度との結合」であり、シノヴィエフ、カメネフの「憲法議会とソヴェトとの国家機関の結合型」であつた。シロンド派が勝利した。が、同時に革命の挫折であることを彼らは気がつかない。

人民代表委員会政府が、一連の「民主共和制」「社会主義的」は、眠つていない。ファシストに最初に攻撃された方が、我々にとつては、一層有利である。そうすれば、労働者階級を共産党の周囲に結集させることになるであろうから。……私の情勢判断では、ドイツ共産党は、抑制すべきであつて、これを押し進めてはならない。』そして、九月ドイツ共産党はサクソニーの社会民主政府に―共同戦線の為―参加すべしという指令をうけた。トロッキーは、革命的情勢は、成熟した。ドイツ共産党とコミンテルンは、権力獲得のための決定的斗争に起たねばならぬ。もしも、この機を逸するならば、長期にわたり、二度と立ち上れないほどの打撃をこうむるであろう、と叫びつづけた。

『……同志トロッキーは、中央委員会（一九二三年九月の全体会議）の会議を前に中央委員会の全員に深刻な不安を与える演説を行つて、ドイツ共産党の指導部は無価値である。ドイツ共産党の中央委員会は、連命主義や麻酔等にしみこまれていくといつた。それから同志トロッキーは、ドイツ革命は、失敗しなければならぬであろうと断言した。この演説は、全員の空気を沮喪させた。だが、大多数の同志は、この罵倒演説は、全体会議で起つたドイツの革命とはなんの關係もないちよつとしたエピソードの爲起つたもので、決して客観的情勢に一致するものではないと考へた。』（一九二四年一月、ソ同盟共産党誌録一四頁）だが、不幸にして、トロッキーの警告が、完全に客観的情勢に一致していたことを証明した。革命は、一戦もまじえずに惨虐な敗北を喫した。九〇〇〇の労働者が投獄された。レーニン死後のコミンテルンはヴォルシエヴィキ・ジャコバンの資格を失つてしまつた。一九二三年革命の前に、広汎なプロレタリアートと半プロレタリア

諸政策をとると共に、「労兵評議会執行委員会」と「人民代表委員会政府」との締結により、実権は、「人民代表委員会政府」に移されていつた。このことは、革命の敗北を決定的にした。以上、

我々は、フランス大革命、ロシア革命、ドイツ革命に於けるジャコバン派とシロンド派を見て来た。あらゆる情勢の特異性と多様性にもかかわらず、シロンド、メンシエヴィキ、シノヴィエフ、カウツキーには、たゞ一つの法則が存在する。「コミューン」「ソヴェト」を形式的には認めるが、実権を「憲法議会」「臨時連合政府」に移す。彼らは、古いもの、遅れたもの過去に依存する。それに対して、ジャコバン、ヴォルシエヴィキ、ローザには、情勢の特異性と多様性にもかかわらず、一つの法則が存在する。実権を「コミューン」「ソヴェト」に移すこと。彼らは、新しいものは、進んだもの、未来に依存する。レーニン死後のコミンテルンは、ジャコバンを失つてしまつた。シロンドのスターリンは、ジャコバンを殺すか、黙殺した。スターリンは、一九一七年の初めヴォルシエヴィキ右派（シロンド）だつたのだが、レーニンの四月テーゼ以降、レーニンにもくもくといつたが、レーニン死後、一九二三年には、はやくも、シロンドに帰つてしまつた。一九二三年八月、ドイツの革命的危機が、まさに最高頂に達せんとした直前、スターリンは、ドイツ情勢について、シノヴィエフに次の様な書簡を送つた。『（現在の段階において）共産党は、社会民主主義なしに権力を奪取すべきであろうか？ 彼らは、その為に成熟しているだろうか？ 私の考えでは、これは疑問である。もしも、今日ドイツに於て、政権が倒れ、共産党が、これを掌握するとしたら、彼らは、崩壊してしまつたらう。ファシスト

大衆の運動が工場委員会の周囲に結集しはじめ、それは、直接の権力斗争前の時期にロシアのソヴェトが引きうけた機能を主として果たした。決戦は近づいた。

だが、スターリンとドイツ共産党の情勢判断は、「ドイツ共産党は抑制すべきであつて押し進めてはならぬ。」であつた。「工場委員会」―「蜂起の機関」に権力を移すのでなく、「ドイツ共産党はサクソニーの社会民主政府に―共同戦術のため―参加すべし。」であつた。この事は「最も危機的な瞬間に二つの革命的センターを作ることであり」「流れの途中で馬を乗り代える」ことであつた。

レーニン死後のコミンテルンはスターリン主義に毒されつづけた。シロンド、メンシエヴィキ、カウツキー、スターリンが残つた。二重権力思想は、「憲法制定議会とソヴェトの結合」という「奇妙なユートピア」に変えられた。

トレーズ、トリアツチ、スターリン、デミトロフの「人民戦線」戦術は、このような歴史的運命を持つて登場した。

今や、我々は、「人民戦線」戦術の敗北の不可避性と、それが、生み出したものについて、検討せねばならぬ。

一九三四年六月二十六日、トレーズは次の様に言つた。「労働兵士委員会」に「真の権力を与える。」そして「資本家から工場、銀行、大不動産所有、独占販売機構を没収し」「大土地所有者の土地を没収し」「勤労農民に引き渡す。」「我々は権力を獲得することによつて成し遂げる。」「（「反ファシズム統一戦線の確立に全力をつくそう」トレーズ）又、デイシトロフは一九三五年コ

ミンテルン第七回大会で次の様に言っている。「この政府（「人民戦線政府」）は、究極的な救いをもたらすことは出来ない。それは、持取者どもの階級支配を転覆する能力がない。だから、この理由により、究極的にファシスト反革命の危機を除去することは出来ない。従つて、社会主義革命の準備を進める必要がある。ソヴェト権力、そしてソヴェト権力のみが、その究極的な救いをもたらすことが出来るのだ。」（国民文庫八九九〇）

「人民戦線政府」から「革命の政府」への転化は、いかんして可能か？ デイミトロフは、その「転化の形態」を追求すべきだと主張した。そして「右翼日和見主義者達は、ブルジョアシーの独裁からプロレタリアートの独裁への平和的議会的移行という幻想を労働者の間に植えつける目的で、両独裁の間に特別な民主主義的、過渡的段階をおこうとつとめた。」これは、ベテンである。（トリアツチは、この「ベテン」を主張していた。「スペイン人民戦線」に於いて、統制、この「情勢」によつて必要とされる一定の根本的な革命的要求の実施」すなわち「生産の統制、銀行の統制、警察の解体と武装した労働者民兵によるその代置等」を要求するものである。と、トレイズ、デイミトロフのこれらの主張は、一般的には正しい。だが、あまりにも一般的すぎた。危機の根源である金融独占資本主義の極点に達した諸矛盾をどの方向でどのスピードで解決し止揚するかといった見通しを欠いており、その場しのぎの政策の羅列にすぎなかつた。それ故、それらを実施する段になると、革命的なものが、ぬけ落ちて、どうでもいいものだけが実施されるのである。

「労働兵士委員会」やその「武装」は、かけ声だけに終り、「

小麦減制局の設置」や「四十時間労働法の制定」にやつきになつた。と同時に、一九三四年七月の「行動統一協約」に於て、「この共通の行動に際して両党は、これに忠実なる組織、又は、士に關する一切の攻撃又は、批判を差控える。」とトレイズは宣言し、共産党の独自性と社民への批判の自由を放棄した。

もはや、問題は「統一戦線政府」の分裂を防ぐこと、共産党が社民の位置に下つて、統一を阻み、「人民戦線政府」に実権を移すことによつて、人民戦線綱領（「資本主義の枠内で実現出来る、最低綱領」）を実現することに移つた。「人民戦線綱領」の実施にあたりフランス共産党は、過大な要求を出すことなく、妥協によつて統一を守ろうとし、逆に社会党が急進的な要求を出すというところもあつた。例えば、一九三七年一月に社会党のC・A・Dは、共産党に対して、銀行と大産業の国有化を目的とする政權カクトク斗争を共同で行おうと提案した。これに対して、共産党幹部は「革命的状況でない。」と拒否した。「ソヴェト、すなわち労働兵士委員会」に「権力」を移し、「蜂起の機関であるソヴェト」による「武装蜂起」によつて「権力を獲得する。」という三四年六月の主張はどこかえ忘れられ、「人民戦線政府」に「権力」を移し、「人民戦線綱領」（「資本主義の枠内で実現出来る最低綱領」）を実現することに、重心がかけられた。これは、まさに、メンシエウイキの主張であり、ヴォルシエウイキ右派の主張であり、一九一八年十一月十日ドイツ革命の成否を決した日の、シャイデマン（社会民主党）であり、カウツキー（独立社会民主党右派）の主張である。もう一度、一九一八年十一月十日のドイツを想い起して見よう。

革命派（ローザ、リーナクネヒト等……）は、実権を労働兵評議会に置き、臨時革命政府を監督せよと主張した。（これをフランスに置きかえて見よ。）社会民主党、カウツキーは、臨時革命政府に実権を渡せと主張した。改良派が勝つた。彼らの意見が実施された。社民三、独立社民三による「人民代表委員会政府」（「人民戦線政府」と読め）が設立され、オプロイテ六、社民六、兵士評議会（社民大半）四による「労働兵評議会執行委員会」が設立された。二重権力は、いずれも社民党の実権の下に置かれた。革命は、決定的時点で、挫折した。しかし、改良派は、それに気がつかず、「一連の民主共和制的、「社会主義」的諸政策（「人民戦線綱領」と読め）を実施するとともに「人民委員政府」と「労働兵評議会執行委員会」の間の締結により、実権は「人民委員政府」に移行していったのである。これらのドイツの悲劇は、十八年後のフランスで、共産主義者の名のもとに行われたのである。

「人民戦線、それは、革命ではなく、又、月並な選挙運動でもなく、共和主義的諸制度の枠内に於ける中広く進歩的な政策——大部分の社会的範疇に確実な結果をもたらさしめる——の可能性である。」と説教したトレイズは、三六年六月フランス六〇〇万の労働者がゼネストに立ち上り、「工場占拠」を広汎に展開し、「ストライキ委員会」や「ソヴェト」の萌芽に権力を移し、「人民戦線」を更に一層つき進ませようとした時、「人民戦線は、秩序であり、組織と平静における累進であり、大衆によつて課される社会的平和であり、繁栄への復帰である。」（人民の子）として、パリで労働者の手を抑えた。トレイズは、プロレタリアートの革命的方面と決定的に敵対した。その彼に残された道は、中間

層ブルジョアシーとの統一の強化以外にはなかつた。すなわち、フランス資本主義への決定的な回帰のみが残されていた。そして彼はそれを実行した。「われわれ共産主義者はわれわれの祖国を愛する。」「問題は共産主義がファシズムかではなくて、ファシズムか民主主義か」（「人民の子」トレイズ）でなければならぬ。フランスは「その共和主義的伝統、その平和への愛着、その愛國主義、その物質的安泰、これらのものを、外国の指揮下にあるフランスのファシズムによつて脅かされている。」（「人民の子」）「自由で強く、幸福なフランス」「インター」は、「マルセイユズ」でおきかえられ、「三色旗」は「赤旗」と並んで立つた。三七年三月五日ブルム内閣は、遂に「人民戦線綱領」の一時「休止」を宣言せざるを得なかつた。その後、ショイタン内閣、第二ブルム内閣、タラデイエ内閣と、第二、第三、第四の「人民戦線政府」は続いたが、彼らが行いえたものは、國家独占資本主義への試行錯誤の推転と、第二次帝國主義戦争へ人民をかりたてただけだつた。

「人民戦線」戦術は、一九一八年のドイツと同様その敗北の不可避性をもつ運命にあつた。「精神のつばさは、自由に羽ばたくことが出来ても、なかなか肉体のつばさは、思うようにならぬ。」ものだ。

だが、「太陽は、刻々に傾いてゆく。もう一日が終るのだ。日は西の國へ行つて、又新しい生活をうながすだろう。」と宣言して、「新しい民主主義」「平和的議会的移行」「二重権力思想は古い」「新しい國家」「新しい労働者政府」「新しい統一戦線」「新しい愛國主義」が、誕生した、と鳴り物入りで登場して来た

ものがある。「生命の中から新しい生命を作るのは、新鮮な力を持つ生きた血でなければなりません。」と。それらは、本当の「新鮮な力を持つ生きた血」なのか。

「二重権力思想は古く」なつたのたろうか。事実上の二重権力は存在した。すなわち、ブルジョアジー、ファシストの「二〇〇家族」の参謀本部に対する、「ストライキ委員会」、「行動委員会」、「ソヴェトの過渡的形態」が、それであつた。むしろ、トレーズは、そのようなプロレタリアートの自己権力をおさえつけた。(三六年六月のフランスのゼネスト、工場占拠をおさえつけた。)

「新しい労働者政府」は「人民戦線政府」に権力を移したことに革命の敗北の決定的要因があつたのではないのか。

この「新しい労働者政府」は「人民戦線政府」はコミンテルン第三回大会で提起された「労働者政府」と基本的に同じ(ディシトロフ)なのか。コミンテルン第三回大会「戦術に關するテーゼ」は次の様に言っている。「共産主義者は、又、プロレタリアートの独裁の必要を今だ認めていないところの労働者、すなわち、社会民主主義的、キリスト教的、無党主義的、サンディカリスト的労働者などと一語に行動する覚悟を持つてゐる。かくして、又、共産主義者は、一定の保証の下に於いて、非共産主義的労働者政府を支持する覚悟をもつてゐるのである。しかしながら、共産主義者は、あらゆる事情の下に於いて、プロレタリアートの独裁のみが労働者階級に眞の解放を確保するということを労働者に公然と解明するものである。」コミンテルン第三回大会は、ここで、労働者内閣統一戦線を言っているのであつて、中間層「國家資本主義的ブルジョアジー」との統一戦線をいっているのは絶対的

ない。ところが、「人民戦線政府」は、労働者と、中間層と國家資本主義的ブルジョアジー(國有化を中心とする)との連合政府であり、その上に、トレーズは「同盟者に対する完全批判の自由の維持」(コミンテルン第三回大会「統一戦線」の原則)を放棄し、プロレタリアート独裁のみが、労働者階級に眞の解放を確保するということを労働者に公然と解明することを放棄し、「工場占拠」斗争と「武装」をおさえつたのである。このことは、「人民戦線政府」をますます中間層、國家資本的ブルジョアへの依存を高めるよりほかになく、事実上の「二重権力」の萌芽を自らの手でつみとることを意味した。

プロレタリア民主主義に止揚することができる。

「人民戦線」戦術は又、権力奪取以前に於いて「國有化」を生み出した。これは、局面の力関係からすれば、一九二〇年「イタリア革命」に於ける「工場占拠による生産管理」のようなものである。権力奪取以前に於いて、資本家の資本を没収することとは、「事実上の奇妙な二重権力状況」に於て、國有化を行うことが出来ることを証明したが、(第二次大戦後のイギリス、イタリア、フランス等)同時に決定的な誤りを含んでいた。すなわち、プロレタリアートの「工場占拠」をやめさせ、中間層、國家資本的ブルジョアと國有化することは権力奪取の道を閉じて、國家資本主義的政策を行うことであり、革命的プロレタリアートを分散させ失望させ、ブルジョアジーとファシストに、反撃の時を与えてやつてゐることを意味した。一九一八年十一月十日以降の「人民代表委員政府」の「民主的共和主義的社會主義的諸政策」と同じ役割をはたすのである。

は、「一九四三年→五〇年イタリア革命」と無関係には、始まり終らないだろう。なぜなら、間奏曲の主人公が第二幕を演じるのだから。それでは始めよう。

### Ⅲ 第二次「イタリア革命期」と「トリアツチ主義」

まず、一九四三年から一九五〇年までに「イタリア革命」がたどつた段階を概観して見よう。

ハツキリ三つの主要な時期がある。

第一期。一九四三年三月五日から一九四三年十月まで。ファシズム打倒ゼネラルストライキと、ファシズム軍、王の「宮庭革命」の時期。

第二期。一九四三年十月から一九四五年四月二五日まで。内乱期。人民の武装蜂起の時期。

第三期。一九四五年四月二五日から、一九五〇年末。憲法制定議会の時期。祖國復興への時期。革命の挫折期。

### 第一期

ギリシャ戦の敗北以降自信を失つたムツソリーニが、プロレタリアートに鉄腕をくらわされ、ファシスト、軍、王が内部分解(一種の「宮庭革命」)を演じる時期

「一九四三年三月の前夜、我國の情勢は、ムツソリ

第二幕は、間奏曲とたぶん無関係ではないだろう。「人民戦線」

一ニよつて約束されたものは全く異つていた。飢えに悩むる賃金と糧給、あらゆる民主主義的自由の抑圧。ファシストの侵略戦争などがイタリア人に「太陽のあたる場所に席」を確保する為、ムツソリーニによつて提示されていた。』（このゼネストを組織最高責任者、ウムベルト、マツソリーニ）

「市場に、商店に生活に必要な食料品は、完全に姿を消した。』（「グリッド・デ・スパルタルコ」一九四一、十）

一九四二年八月から始つたファシズムの政策への抵抗は、全イタリアに生じ広がり、遂には、騒乱、ストになつて来た。

ファシスト政府は、四三年二月から、パンの割当てを五〇グラムから一〇〇グラムに引下げた。賃金凍結を布告したばかりか、雇傭労働者に対して、月一二〇時間分、一日五時間分の賃金しか支払えない事を宣言した。こういう事態は、労働者に、経済的不満を戦争と直結して考えさせるようになった。一九四三年二月後半、ファイアットのミラファイオリ工場、ラゼツテイ工場では、ゼネストの準備が始められた。トリノは戦斗体制を組んだ。

一九四三年三月五日、ゼネストが開始された。トリノのファイアットの主要工場が第一歩を踏んだ。三月六日、トリノの主要工場が続いた。……五日に開始されたゼネストは、一週間後十万人の労働者を参加させた。一九二時間の支払、食糧配給の増加、戦争終結……。十三日以降ストは、トリノから全ピエモンテ地方に波及した。三月二十四日ミラノの主要工場は、トリノの救援に立つた。二五、二六、二七日、ミラノから全ロムバルディア地方にストの波はおとづれた。この波は又、シエノヴァに達し、遂に北伊から発して全イタリアをおおい包んだ。いわば、

トで斗つていた。もはや、王、軍、ファシスト内反対派は、それだけで、ダウンを食つていたのである。決戦は不可避であつた。だがその時、突然。

一九四三年九月八日、英米、連合軍はイタリア解放条件降伏を発表した。王、軍、ファシスト内反対派の支配者達は、けし飛んだ軍首脳は、米英占領地帯へ、王家は外国へ飛び、ファシスト内反対派も逃亡した。責任者はすべて舞台から姿を消した。新たな力関係が構成された。軍は、解体した。ドイツ軍と米英軍、それに、胃のペシヤンコになつた労働者と、どん欲だが、國家権力を持たない資本家が残つた。奇妙な関係が出来上つた。

## 第Ⅱ期 分散的内乱から総蜂起へ。一九四五年四月まで。

一九四三年十月、全イタリアに、反ファシスト武装バルチザン戦争が波及した。

共産党の「ガリバルディ旅団」、社会党の「マツテオツテイ旅団」、行動党の「正義と自由旅団」が創設された。一方、ヒトラーは、ムツソリーニを救い出し、生き残つたファシストを救い出し、ガルダ湖畔に新政府「ファシスト社会共和国」を創設した。これに対してプロレタリアートは、ミラノに「上部イタリア国民解放委員会」を創設した。ムツソリーニ、ファシスト社会共和国、資本家と「上部イタリア国民解放委員会」との二重権力が形成された。その後、ドイツヒトラーと米英軍がついて来た。バルチザン部隊のムツソリーニとの激しい内乱の過程で労働者は階級として、

ムツソリーニとプロレタリアートの事実上の二重権力が生まれて来た。

「ムツソリーニはがんとして賃上げを認めなかつた。その間にも、斗争は広がり深まつていく。その過程で異様な事が起つた。一部のファシスト義勇軍兵士が労働者の側に立つた。警察は、労働者の逮捕をしふりはじめた。それを見たムツソリーニは遂に賃上げを認めた。だが、すでに、ムツソリーニは國家を把握してはなかつた。プロレタリアートは事実上ムツソリーニを打したが、それに代るほど成熟してはなかつた。それ故に、支配者間の内部分解が始まつた。ファシストが外では帝國主義戦争に敗れ、内では労働者を弾圧出来ないといふれば資本家はもはやファシストを必要としない。彼らイタリア金融資本は、米英資本との結合に興味を持ちはじめた。軍部はファシストと手を切り、王家をかつぎ出して、國家をすくおうとした。ファシスト幹部の多くは、ムツソリーニの退陣とファシスト制度の全面的な改変なしには、この戦争から逃げ出れないと考え、反ムツソリーニ派を結成させた。党内反対派は、ファシズム大評議会でムツソリーニを退位させた。四三年七月二十五日であつた。宮廷革命が始まつたのである。ムツソリーニは、突然、王と軍によつて逮捕された。首領を失つた國防義勇軍は、軍のクイデターの前にあえなく崩れた。王、軍、ファシスト内反対派の支配が始まつた。

彼らは進むべき方向を持たなかつた。王、軍、ファシスト内反対派、資本家対プロレタリアートの二重権力が生まれつつあつた。革命が、その序曲を奏でていたのである。一九四三年七月二十六日北伊労働者はストに立つた。二九日トリノ労働者は二四時間ス

内乱のヘゲモニーをにぎりはじめていた。すなわち、資本家との斗争を通じて内乱の指導権を握つていくのである。一九四三年十一月十五日のトリノのスト、ライキは、その突破口を開いた。「一九二〇年革命」に於ける、「工場内部委員会」は死滅し、それに代つて「扇動秘密委員会」が「ソヴェト」の萌芽として生まれて来た。その要求は、十割の賃上げ、食糧増加、空襲時の労働停止であつた。翌十一月十六日トリノの全金屬労働者がストに入つた。トリノによるこの突破口は、一九四四年三月一日の全イタリアのゼネストに発展する一連の斗争に受けつがれていく。四三年十一月二日の全イタリア金屬労働者のスト。翌二三日のシエノヴァのゼネスト。十二月十三日から二二日のミラノのゼネスト。十二月十六日から二十日までのシエノヴァのゼネスト。十二月二十三日モニファルコーネのスト。四四年一月ゼノヴァのゼネスト、とドイツ占領下の地域を震憾させ、ついに一九四四年三月一日の全イタリアのゼネストに引きつがれる。一九四四年三月北伊プロレタリアートは「ピエモンテ、ロムバルディア、リグリア、扇動委員会」を創設し、工場、「扇動秘密委員会」を指導し、「ソヴェト」の機能をはたし戦斗の準備をととのえた。三月一日、トリノ、ミラノ、シエノヴァ、ポロニア、ゼレンツェのプロレタリアートは、武装バルチザンと結合し、ゼネストに突入した。しかし争議が頂点に達し、ゼネストでは処理出来ない段階へ来た時スト中止を扇動委員会は命令し、労働者の武装的録的ストを明白より行へと宣伝した。

四四年四月五日、フォルリのゼネスト、五月二〇日パルマの争議。九月一日トリノのスト。十日ピエモンテの鉄道スト。二十

一日のミラノのスト。十一月七日トリノのゼネスト。一九四四年三月ゼネストを突破口としたこれらの「蜂起的スト」は、一九四五年四月二五日のイタリア武装蜂起への道を開くのである。

だが、「イタリア革命」の成否のカギは、四四年三月ゼネストから四五年の「蜂起」の間に秘められていた。「蜂起」をどのようなものとして指導するのか。単なる反ファッシヨムツソリーニ民族解放の「蜂起」なのか、あるいは、社会主義革命の出発点としての「蜂起」なのか。それ故、我々は、四四年三月ゼネストから、四五年の「蜂起」までの、諸階層、諸勢力の分析とその指導の問題を検討することを避けるわけにはいかない。

一九四四年三月のゼネストは、北部イタリアに「ソヴェト」が作成され、バルチザンの武装との結合がなされ、プロレタリアートのヘゲモニーで展開されることを意味した。北部工場（「扇動秘密委員会」を指導する「ピエモンテ、ロムバルディア、リグリア扇動委員会」と北部バルチザンによるゼネストは、「ファシスト社会共和国」と資本家の権力に対して、「ソヴェト」とその武装によるプロレタリアートの自己権力が、一方の政府を握っていることを示した。「上部イタリア国民解放委員会」は、そのような「ソヴェト」とその武装を背景にした、臨時政府であった。ファシストは、ドイツ軍と、その手先、工場経営を通じて、プロレタリアートを支配した。それ故、二重権力の実権は、ドイツ軍とその手先工場経営者対、「扇動秘密委員会」バルチザンであった。（英米軍は、一九四三年末でもまだイタリアの五分の一を占領したにすぎなかった。）それ故、「扇動秘密委員会」と武装バルチザンに実権をますます確保し、そのヘゲモニーを握り、

ルチザン）から実権を「国民政府」に移らす様自ら努力していた共産党にとっては、もはや英米軍とのベタバタの妥協と、ローマ政府に「上部イタリア国民解放委員会」を格下げすること以外に道は残されていなかったわけである。

一九四五年三月十一日、十二日に、ミラノで占領地区イタリア共産党指導部の拡大会議が開かれていた。「蜂起」をどの様な性格のものにするかが最終的に決定されるのである。トリアツチは、次の様に提起した。「蜂起」は、国民的の性格をもっている。故に、解放委員会の旗のもとに国家の記章である「三色旗」の旗のもとに展開されなければならない。国民的蜂起は、階級の目標を提起するものではないし、社会主義ないし、共産主義の復活を要求するものでもなく、我闘士からドイツ軍を追い払いファシズムを絶滅させ、我闘及我国民に自由と民主主義を再び与える事を目的とするものだと、ここに於て蜂起が、社会主義革命への突破口第一歩とならず、民主主義の復活と「三色旗」の復活に一切が移された。「蜂起」以降のイタリアの運命はここにすべて決定されていたのだ。

そして又、一九四四年三月二九日「上部イタリア国民解放委員会」は、共産党の提案を受諾し、全バルチザン部隊をイタリア陸軍の正規部隊に転身させることを決定した。国民戦線の統一にバルチザン部隊が合流した。バルチザンも「三色旗」のもとに斗争することになった。プロレタリアートの自己権力バルチザンも「三色旗」に格下げされた。蜂起以前に於て、共産党自ら「三色旗」の方を大切にし、「現代のシロンド派」になりつつあったのだが、一九四五年三月から「プロレタリアート」は、蜂起へと破竹の勢い

それによつて「上部伊国民解放委員会」を監督し、「蜂起」を資本主義から解放する第一歩とすることを意識的指導の問題であった。「蜂起」を前にして、この二重権力状況を、誰が集約し、「蜂起」をどのような性格のものにするのが、一切のカギであった。

だが、トリアツチによれば、すべての政党の基本問題は、ナチスからイタリアを解放することであり、将来の政体を検討することではなりえなかつた。……一切の力をあけてファシズムの残存を掃討出来る政府を樹立することであり、政体は、そのあとで国民の総意にもとづいて決定されてもさしつかえないことであつた。各政党は、共産党指導部者の主張を正当と認めて賛成した。この様にして共産主義者も参加する全国民的な民主政府が可能となり、四月二十七日パドリオのもとにファシズム打倒以来最初の国民政府が誕生した。革命側の実権は、自から「扇動委員会」、「バルチザン」から「国民政府」（「人民戦線政府」と読め）に移つていった。

この最初の政府に共産党からトリアツチ、ファウスト、ゲツロが人閣した。（これ以降我々は「フランス人民戦線」を念頭におかねばならない。）

英米軍との関係は次の様なものであつた。解放運動が、英米軍の指令に従ふべき事。英米軍に受諾された一將軍を解放委員会首脳として任命することであつた。一方、ローマ政府との関係は「上部イタリア国民解放委員会」を非解放地区に於ける反ファシスト諸党の機関として承認させ、同委員会が、ローマ政府を北イタリアで代表するといつたものであつた。「扇動秘密委員会」（パ

で前進していった。「三月、トリノを中心とするピエモンテ地方の鉄道労働者はストに立上つた。

四月一八日、トリノの全労働者が「蜂起的ゼネスト」に突入した。「最後の決定的な瞬間には労働者が工場を占拠して陣地と化す以外には敵軍の組織的破壊からまぬがれる方法はなかつた。」トリーノのランチャにしても、グランディ・モトーリにしても、戦車と大砲に援護されたドイツ軍の攻撃に労働者は機関銃と手投弾を持つてよく耐えぬいた。政治的ゼネスト、武装ゼネストによつて情勢は急迫して来た。「三月二三日夜から二四日朝にかけて、シエノヴァが蜂起した。四月二四日ミラノは蜂起した。ムツリーニは処刑された。四月二六日二八日にトリノが蜂起した。二日間の市街戦が激しい夜かれた。北イタリア諸都市は多かれ少かれ、この様な形をとつて、四月二五日を頂点として蜂起に突入した。そのヘゲモニーは、英米軍將軍が入り、ローマ政府のカイライになり下つた「上部イタリア国民解放委員会」が握つていた。「蜂起」は「勝利」した。

### 第三期 憲法制定議会の時期。革命の挫折期。

一九四五年四月末から一九五〇年末まで

「蜂起」によつてファシストが打倒され、「全イタリアが解放」された瞬間から、この「蜂起」を資本主義の打倒、社会主義革命に移行させる指導は、誰れによつてもなされなかつた。革命は、その進むべき道を失つてしまつた。キリスト教民主党、王党派を中心とする保守グループによつて公然と反革命が開始され出した。



この様に「農地占拠」「工場占拠」の革命的エネルギーが、進むべき道を社会党のイニシヤティブによる「民主人民戦線」に見出しえず、そのエネルギーをむしやくしやして胸の内に秘めていたとき、思いがけない突発事件が起つた。

一九四八年七月十四日、トリアツチが襲撃されたのである。「トリアツチ撃たる」の報はただちに、全ローマに広まつた。「報が伝わる」と、電車は車庫に入り、乗務員はみな下車してしまつた。汽車も停止した。工場という工場はみな罷業状態に入つた。戸家はよりの戸をおろした。午后三時には、軍と警察に満ちる為いたる所にバリケードがつくられた。トリーノやミラノでは二時にはすでに各工場はストに入つており、工場は労働者により占拠されていた。十四日から十五日にかけて、全イタリアはゼネストによつてまひされ、特に北伊では労働者と警官の衝突があり、相互に負傷者を出した。革命が生じようとするかのような情勢であつた。」「イタリア社会運動史」)

しかし、この「イタリア労働運動史」に「かつてなかつた自然発生的であり結束し広範にわたつたゼネスト」(「ゼネスト、セツキアの七月十四日に關するパンフレット」)「革命が生じようとするかのような情勢」も、もはや政府打倒の斗争に転化指導するものはないなかつた。一九四九年二月二六日、革命の方向を見失つたトリアツチは「ソヴェト軍がイタリアからアメリカ軍を追い出しにやつてくるならイタリア人民は、ソヴェト軍を援助する義務がある。」と、自国プロレタリアートの革命をいかに指導するかを放棄して、「ソヴェト赤軍による革命」、ソヴェト大國主義追隨を宣言していた。

一助となり、地方には、労賃の無意味な斗争をいくらかでも緩和出来るかと考えられたからである。」「(「イタリア労働組合運動史」カンデイローロ)

共産党は、「労賃の無意味な斗争を緩和させ」荒廃し、死にひんしている資本主義を「建設的な経済計画」で救ふこと、に、全力をつくす事が決定された。

一九五一年四月三日↓八日。ローマでイタリア共産党第七回大会が開かれた。「第七回大会は、新たな武装斗争のウズに祖国を引き込むことを阻止する平和の政府を要望するトリアツチ同志の提案を歓迎し……」「共和憲法こそが平和と自中と國民の幸福を欲するすべてのイタリア人を、そのまわりに結合出来る協約であると信じる。」そして「平和経済計画」によつて國民の生活条件をヨーゴする、と。すなわち「革命」を行わず、修正に修正を重ねキリスト教民主党のイニシヤティブで作られた「共和憲法」を信じ、「平和経済計画」によつてイタリア資本主義を生き返えらせ、「祖国を救う」のだ、と。

これで最終的にイタリアの戦後革命は終つた。一九四五年の「蜂起」。四七年の「工場占拠と農地占拠」。四八年のトリアツチ事件」。四九年の斗争。と。「政府打倒」、「革命」の突破口になつた、高揚期は、誰れの手によつても導かれなかつた。導くべき共産党は、「武装斗争反対、内乱反対」「共和憲法を守れ」「祖国を復興させよ」と叫びつづけ、革命的プロレタリアート、貧窮と敵対しつづけた。

ジロンド、メンシエヴィキ、カウツキ、スターリン、トレイズは、ろようよしているが、ジャコバンは、誰れ一人としていな

しかし、一方、イタリア資本主義は、「インフレは常化し、工業生産高は一九三八年の六五↓七〇%を示し、基幹産業の大部分は短縮したし、失業は、一九四八年一年間に七〇万増え、一九四九年には三〇〇万になつていた。この様な事態を反映して、四九年二月クロジノの製紙工場争議を端緒として、各地の各産業に、種々の形をとつた示威ヤストがおびただしく展開される。

その中でも五月十八日から開始された農業労働者のストは最大のものであり、それはポー河流域からはじまつて、南部イタリアを席卷し、一〇〇万以上の農業プロレタリアートを参加させ、延三〇〇万の都市労働者を支援したたせた。再び「トリアツチ事件」以降高揚を見せていた。

ローマでは、イタリアバルチザン全團協会のアルリゴ、ボルドリーニが示威者を前に「必要とあらば、イタリア解放の爲、ガリバルディの内戦をくりかえしてもよい。」と演説していた。

しかし、共産党にすれば「農民は土地を占拠してしまおうと望んでいるのではない。かれらの欲しているのは、そこで働きたいということであり、地主に普通の地代を支払いたいということである。」と解釈されていた。そして、一九四九年十月四日↓九日。シエノヴァの労働総同盟(共産党系)第二回大会が開かれ、「建設的な経済計画」「平和経済計画」が決定された。「過去の斗争の多くが、賃上げ要求であつたよりも、実質的には、工場閉鎖から工業を守ることに向けられていたことからも、もし労働者の側から建設的な経済計画が提出され、これが、國家的に実現されるならば、労働組合も広範な國民的規模に於て國家の経済及び政治と結びつく活動を展開しうるし、一方には失業問題解決の

かつた。

ただ、革命的プロレタリアート貧農、バルチザンの戦士がジャコバンの役割をはたそうとし、度々突進したが、その度に胸をつかまれた。だが、彼らには、それをふり切り、決意する自信と組織性を持ち得なかつた。

第「次」イタリア革命」は、技術と軍事組織との現在の諸条件のもとで、「武装蜂起」が勝利しうることを証明し、そして又、「人民戦線」方式が、フランス、スペインについて、敗北したことを証明した。

第二次「イタリア革命」は、全團労働運動が以降、来たるべきプロレタリア革命では、この様な戦斗形態が予想されることを、前者は、勝利しうるし、後者は、敗北することを、念頭におかなければならないことを教えた。

(田中正治 同大)



(A) 昨年十二月九日真夜中、日共「統一派」の武装した六十名によつて、同志社学友会自治会指導者十六名にかけられた「集団リンチ事件」は、一月三十日京都地裁の田所学友会委員長に対する強制引引によつて、國家権力との新たな緊張關係を生み出している。

東京の分派斗争が、今頃京都で起つていたので、と他人事ですましてはならない。

それは、①安保斗争以降の学生戦線の中心部での危機の深化、②昨年「前衛」六月号で提起された、「自治会サーピス機関論」を公然と否定し、「反帝反独占」の戦鬥的學生運動を自認する京都の民青の流動化、③明確な計画のもとに実行 ④学生大会等々による大衆的対応、⑤代々木の全體的逆宣伝 ⑥京都府警、京都地裁の全面的介入、といった特徴をもっているが故に、事実の原因——本質、及び、解決の方向を、全国の学友に明らかにする事が急務であると考ふる。

⑤ 事件の「真相」

すでに「民青新聞」等で「学友会に集食うトロツキスト社学同が、酒を飲んで、統一派の学生を集団リンチした」「社学同

は、デマ、とデッチ上げにより党と人民に敵対している。」など例の如く、全国の大学や労組で、逆宣伝を行っているが故に、再度、真相の秘略を伝えねばならない。

十二月九日午前二時頃、日共「統一派」の完全武装（コン棒、鉄棒、皮牛包）した六十名程が、授業料斗争の為、とまり込み、や、唾り込みをしていた学友会自治会指導部十六名を襲つた。理田は、「民青旗等がうばわれた。」というものであつた。（全く事実無根）そして、民青系三サークルBOXにつれ込み、約三時間めつた打ちをし、自白を強要した。十六名中五名は再起不能となり入院し、他も、重傷をおつた。

⑥ 事件の原因——本質

五十二年の「立命館事件」（武井全学連委員長らに対する所感派のリンチ）にも比べられるこの「同志社事件」の原因は、日共「四中総」以降より、公然化した、学生戦線に於ける分裂工作「平民学連」方式である。

その本質は、中ソ論争を契機として、より露骨化している、所感派スターリン主義である。

直接の原因は、日韓ポラリス反対斗争を十二、五京都府学連

ホストに對置した、十二、七（京都統一派会議統一行動）の完全な空振り、授業料斗争への無方針と立遅れによる「統一派内部」の分裂と混乱を、「トロツキスト、社学同、学友会」に痛打を与え、それを契機に集約しようとしたものである。

そして、彼らが、この様な解決の方向以外に見出せなかつたのは、彼ら自身の内部事情にもよつた。京都の民青の内部分裂と混乱である。

すなわち、中ソ論争と学生運動論（サーピス論）をめぐつて、中固派とソ連派に分裂している。ソ連派（京大指導部）と中固派（同志社、立命、学芸大）への分裂が、中固派にあつては、イデオロギー的というよりは党中央の官僚的しめつけへの屈服を通じて行なわれているのである。

学生運動論をめぐることは、京都の大衆運動の圧力により、サーピス論を実践的に否定し、彼ら自身全く混乱状態にあり、アナキーになつていたのである。

事件は、中固派が、内部のヘゲモニー争いの為、党中央への忠誠をねらつたものである。イデオロギー斗争では、ソ連派（京大指導部）に勝利しえない彼らは、特惠の手段で内部結集をねらつたのである。

もちろん、このような京都の特殊性に一切の原因をもとめてはならない。

というのは、日共内部のこの様な特殊性を生み出したのは、「四中総」路線を媒介としているからである。

「プロフィンテルン方式のスターリン的固定化である「四中総」は、昨年七月「平民学連大会」以降、九月から京都では大々的な

分裂活動が行なわれ出した。九月府学連大会ボイコット、十一月分裂集會等と、そして、十二月五日ゼネストの失敗（これは、十二月京大選挙では統一派の完敗と、社学同の勝利として直接反映）、十二月九日の集団リンチ事件へと発展したのである。

「事件」は、四中総路線の学生戦線に於ける「平民学連」方式が、安保とそれ以降訓練された京都の学生大衆との矛盾（統一派内部の分裂としてこのことがあらわれた）の激発なのであつた。

⑦ 事件から現在までの経過

統一派による「リンチ」への学友の対応は、即時的自然発生的ではあつたが、さわめて、急速であり、広範なものであつた。

「事件」後、学友会中央委員会によつて提起された学生大会（十三日）は、二七〇名（他に教室に入れない学友五〇〇名）の結果のもとに勝ち取られた。それは、①学生運動内部の「事件」が、運動内部で大衆的に提起され対応されたという点（学生運動史上初めて）に於て、②自治組織を破壊者から防衛するという点に於て、③代々木共産党スターリニズムの党の幻想性と、スターリン主義が大衆的にパクロされたという点に於て成果を獲得した。だが、同時に限界と欠陥を生み出していた。①学生大衆の「暴力」に對する即時的反発「非暴力」、自治組織防衛の自然発生的意識を、支配階級との斗争を通じて学生生活を防衛する自治組織の防衛（階級的意識）に充分高められなかつた事、②スターリニスト「統一派」の歴史的な犯罪的スターリン主義への批判とその止揚を学友の中に徹底化する事が不充分であつた。

これら①②の結果として、多数の中間層を生み出した。すなわ

ち、国家権力の介入(召喚、証言の強要、捜査)に対して妥協的であり、スターリニズム批判を新左翼の思想に発露させるというよりは、むしろ、社民思想へ移行している市民主義者を多数生み出している。

市民主義的の学友——学生部——大学当局の暗黙の支持を受けて、国家権力は「刑事事件」であると宣言した。まさしく、国家権力の介入は、現在、この様に内部に自己の支持者(客観的にも主観的にも)を得る事により介入しているのである。

そして、「統一派」は、「トロツキスト社学同、学友会はデッサン上げを行い……党と人民に敵対している……」のデマ宣言により、学友会、自治会不信のみ目的とし、ますます、市民主義者を自ら生み出し、墓穴を掘っているのだ。

我々は、この様な二つの偏向(統一派と市民主義者)を、支配階級——国家権力との闘いの中で打破する為、全力をつくして来た。

それでは、どの様な方向で克服しなければならないのか。

### ⑤ 事件解決の方向

運動内部でのこの「事件」は、運動内部で解決されねばならない。

学生運動内部のスターリニストと新左翼との抗争である限り、スターリニズム的(マキャベリズム、主観主義社会ファシズム……)方法では、解決へ一歩たりとも前進しない。

更に、国家権力の介入が全面的に行われようとしている。(九人強制拘引、現場検証)現在、国家権力との非妥協的闘いを通じ

て、スターリニズムを大衆的に粉砕していくのだ。

すなわち、「便しゅう」や、大衆から遊離した党派斗争や、「証言」「現場検証」裁判による国家権力による「解決」や、「退学」による学校当局による「解決」によつては、運動内部の問題は、何一つ解決せず、むしろ、混乱と分裂と混迷を進めるであろう。

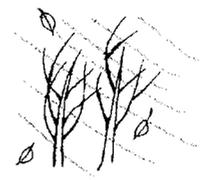
我々は、解決への路線を次の様に進めている。

① 全国の学生組織に事実を明らかにし、民青のデマ宣言を粉砕し、解決の方向を明らかにする。

② ブルジョアジャーナリズムの宣伝に対しては、「証言」「召喚」「拒否の証言的意義を明らかにする。

③ 「召喚」「証言」「拒否斗争」「現場検証」阻止斗争を通じて、大衆的に「統一派」のデマと市民主義者の没階級的思想を粉砕し、階級斗争を通じての学生大衆組織を実践をもつて明らかにし、階級の意識に、全体としての学生層を引き上げる。

④ 「統一派」の歴史的犯罪性と現代革命に対する誤りの徹底的批判を通じてスターリニズム粉砕と脱脚を大衆的に獲得していきたい京都の「統一派」の内部分裂をイデオロギー斗争を通じて促進させねばならない。



## ニュース

### 京大教養自治会並同学会選挙で社学同圧勝

去る十二月中旬行なわれた選挙の結果は、教養正副委員長では、一三〇〇対六〇〇で、正委員長に宮地洋二君、副委員長に尾崎洋君が選出された。同時に

に行われた同学会代議員選挙も同様の圧勝に終わった。この選挙には、昨年来の選挙の経過と今後の展望という点がかげられていた。選挙斗争の経過並結果は明らかに、京大民青の破産と社学同路線の正しさを確認した。第一に京大民青の破産とは、その中間路線のそれであった。彼等は、全学連八中委——九大合路線の全国斗争の重要性を認め、それを志向しながら、一方では、現実の斗争においては、日共中央の地方的、地域的な方式に屈服せられてゆくというものであった。総選挙という政治休戦とそれを許すまでには後退した労働運動という情勢の中で、党派化した社共の分裂と大衆組織の分裂という事態は、学生運動にも及ぼされ、屈伏した京大民青も、昨年来以降、分裂方針を前面化した。矛盾は、十二、五、十二、七斗争で頂点に達し爆発した。我々は、権力の攻撃の性格(政治的迂回)と労働運動の後退という情勢の中である意味ではきわめて当然な大衆斗争の後退を正しく認識し、しかも、本号論議文に明らかにされたように、新しい波への前進の契機をつくり出すことを大衆的に追求した。

十二、五斗争の過程で、我々は状況と力量に対応した授業放棄方針と、全クラス、ゼミに憲法研を組織し、三年間にやしなわれ

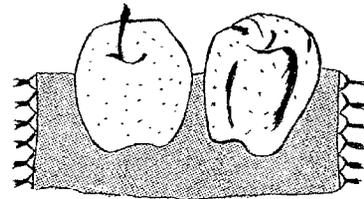
た大衆斗争の伝統と、巨大な過剰をいえるエネルギーを吸みあけるところの方針を駆使したのであった。そして、全国学生運動の視点を大衆的に確立すべく、「全国の新しい波の先頭に立て」をスローガンとして闘つたのである。そしてそのような中で、活動家の一部の投機的な分子がふるい落され、新たな展望に立つた活動家が社学同の下へ結果されてきたのである。民青の分裂方針とその物量作戦に対しても、我々自身の力量と思想を強めながら、常に最大限統一への努力を行い(大衆的に)その結果として大衆自身の経験によつて民青の分裂方針が感得されていつたのである。しかし、民青は、十一月衆院選挙に対する主観的な情勢判断(日共伸張、大衆左傾化)にうらづけられ、十二、七ストライキ方針を提起し、分裂を公然と強行したのであった。

それによつて、一学に、左翼的ボイズをもつて、ヘゲモニーをとろうとしたのであった。自己の足もとのひびわれに気づいた時は、すでに遅く、何らなすすべもなく、内部からガカイしていつたのであった。それは、大衆運動の思想と一定の能力をもちながら一面で、日共中央派の自己中心、同心円の党勢拡大の組織方針にしばられた。京大民青の体質の必然的帰結であった。前者の積極的な面は、社学同のたえざる影響下にあった結果であることはもちろんである。かくて、彼等は、十二月選挙において、組織としての体をなさず、選挙斗争の体制をとることさえできなかった

たのである。我々は、その中で最も包括的宣伝内容を持ち、しかも、当面の日韓との密接な関連をもって暴露されうるところの憲法問題と現在の情勢について語り全学生運動と労働運動の「新しい波」について、広範な大衆を教育するという作業を遂行しえたのである。いま、京大民青内部で深刻なカツトウがおこっている。三月日共大会へ向けて、日共中央のしめつけは強化されている。

彼等の内部対立に介入し、適切な方針をもつことが、ますます必要となつている。

以上



## 編集後記

△ 開放体制と自由化の新しい段階をむかえて、日本資本主義は、内、外に多くの問題をかかえている。この様な戦後の第三の転換点にあつて、安保以後の混乱と停滞が続けていた学生運動に現在新しい波が、生れていることをみる。我々は、この新しい波の本質を解明し、全国政治斗争の転開をめざして、我々の任務と、その方向を明らかにしていくであろう。

△ 三月下旬の全自代に向けて、以上の観点から、当面の国際、国内情勢、日韓、憲法問題、全学連再建への我々の態度を明らかにし、討議資料としての戦士四号を三月下旬発行の予定である。

△ 尚、発行が大変遅くれたことを深くお詫びする。

編集発行

社会主義学生同盟関西地方委員会

連絡先

京都市左京区吉田下大路町65

安養院内

社会主義研究会